宮古市埋蔵文化財調査報告書7

Archaeological Researches in Miyako

金浜館 発掘調査報告書

Archaeological Research in Kanehama Tate Site

1985

金浜館全景（南西より） Photo. 1

岩手県宮古市教育委員会

The Board of Education Miyako, Iwate Pre.

Photo.2－1
（原寸）

天目茶碗（建物跡出土）

Photo.2－2
（原寸）

Photo.3－1
天目茶碗
（建物跡出土）

Photo.3－2

Photo.4
青磁輪花皿
（建物跡出土）

(原寸)

(原寸)

Photo.4－1

(2/3)

Photo.4－2

序　　文

宮古湾の周辺には、縄文時代から中世に亘る数多くの遺跡の所在が知られています。

特に金浜地区には、中世城館遺跡のひとつである金浜館があり地元の方々からも館山と呼ばれ親しまれてきました。しかしこの金浜館に老人福祉センターの建設が予定され、教育委員会では止むを得ず緊急調査を行い記録により館跡の概要を残すことになりました。

本書はこの発掘調査の結果をまとめたもので、金浜館に残された中世の人々の生活の一端を公表するものであります。

造成工事にあたっては、館跡の一部を現状のまま残すなどの措置をとり保存に努めてまいりましたが、かつての金浜館の姿は人々の記憶と本書に残されるのみであります。金浜館が老人福祉センターとして活用されると共に、この地がかつて中世の人々が歴史の痕跡を残した地であることを忘れることのないよう本書を刊行し、後に伝えるものであります。

最後に、調査を実施するにあたり多大な御協力をいただいた金浜地区の皆様と、御指導・御助言を賜わりました関係各位に厚く御礼申し上げ序文にかえさせていただきます。

昭和60年３月

宮古市教育委員会

教育長　小野寺　　聰

例　　言

1．本書は宮古市大字金浜に所在する金浜館の発掘調査報告書である。

2．挿図について

・地形図・遺構・遺物の図版にはスケールを付して縮尺を示した。

・遺構図中のレベルは標高値を示す。

・遺構図中の柱穴の深さは、生活面からの値を示す。

3．遺物及び堆積土層の色調表現は、小山・竹原編著『新版　標準土色帖』を用いた。

4．遺構の略号は次のとおりである。

中世建物跡　～　MB(The Middle ages Building)

中世堀跡　　～　MD(The Middle ages Ditch)

縄文時代ピット～ＪＰ(The Jomon period Pit)

5．本書の図版作成・執筆は宮古市教育委員会事務局社会教育課主事武田將男が行なった。また、図版作成にあたり佐々木朋子・佐々木徳子両氏の協力があった。

6．遺物の写真撮影にあたり、成ヶ沢弘氏の多大なる助言、協力を得た。

7．城館遺跡の分布及び宮古市内の城館については、下記の文献を参考にした

『日本城郭大系－２　青森・岩手・秋田』　本堂寿一他　1980

『宮古地方の中世史　古城物語』　田村忠博　1983

8．金浜館等に関する文献記録は下記より引用、転載した。

『南部叢書』　南部叢書刊行會　1931

『南部藩　御当家御記録』　奥羽史談会　1975

『下閉伊郡志』　岩手県教育委員会　1922

『参考諸家系圖』

『東奥古傳　閉伊之巻』

その他参考文献

『南部史要』菊池悟郎　1912

『岩手県郷土史年表』　田中喜多美編　1972

目　　次

序 文 宮古市教育委員会
教育長 小 野 寺　聰
例 言
目 次
調査要項

Ⅰ　調査経緯

1．調査に至る経過----------1 page
2．調査経過----------1

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1．位置と地形----------2
2．市内の城館遺跡----------2

Ⅲ　金浜館の概要

1．発掘調査前の状況----------12
2．規模と構造----------15

Ⅳ　調査結果

1．調査結果の概要----------17
2．館に伴う遺構と遺物
(1)空堀り跡----------23
(2)建物跡----------35
3．４Ｆ・５Ｆ区----------50
4．縄文時代の遺構と遺物----------54

Ⅴ　金浜館について

1．文献----------67

写 真 目 次

Photo. 1 金浜館全景 …… 内表紙
2 天目茶碗（MP603－№1） …… 巻 頭
3 〃 （MP603－№2） …… 〃
4 青磁輪花皿 …… 〃
5 金浜館の位置 …… 3 page
6 金浜地区 …… 10
7 金浜館と集落 …… 10
8 金浜地区航空写真 …… 11
9 金浜館航空写真（調査前） …… 14
10 金浜館遠景 …… 16
11 金浜館北西部 …… 16
12 帯郭南西部 …… 16
13 主郭南平場 …… 16
14 金浜館全景 …… 17
15 金浜館航空写真（調査時） …… 18
16 金浜館全景 …… 22
17 〃 …… 22
18 空堀りMD101 …… 25
19 〃 …… 25
20 MD101セクション2 …… 27
21 MD101セクション3 …… 27
22 3F区 北東部 …… 29
23 3F区 北西部 …… 29
24 セクション10～12 …… 31
25 〃 10 …… 31
26 〃 11 …… 32
27 〃 13 …… 32
28 〃 9 …… 33
29 MD302 …… 33
30 3F区 南半部 …… 34
31 MD302セクション8 …… 34
32 6F区 整地部及び建物跡 …… 42
33 建物跡MB601、602 …… 42
34 建物跡 …… 43
35 〃 …… 43
36 整地部セクション北半 …… 44
37 〃 南半 …… 44
38 MB602 …… 45
39 MB601 …… 45
40 MP603 …… 46
41 MP603埋土状況 …… 46

Photo. 42 天目茶碗・炭化木製品出土状況----------47 page
43 〃 ----------47
44 天目茶碗（MP603－№1）----------48
45 天目茶碗（MP603－№2）----------48
46 青磁輪花皿----------49
47 館に伴う遺物----------49
48 4F区----------53
49 5F区----------53
50 フラスコ状ピット検出状況----------63
51 〃 ----------64
52 フラスコ状ピット埋土状況（JP624）----------64
53 〃 （JP633）----------65
54 フラスコ状ピット（JP640）----------65
55 〃 （JP625）----------66
56 金浜館の現状----------66

挿図目次

Fig. 1 金浜館の位置と発掘された中世の遺跡 4 page
2 市内の城館遺跡（折り込み） 7
3 地形分類と城館分布 9
4 金浜地区地形図 10
5 金浜館と周辺地形図 12
6 金浜館と周辺の地籍図 13
7 金浜館地形図 15
8 金浜館検出遺構全体図（折り込み） 19
9 縦横断面図 21
10 MD101堀り跡 24
11 MD101埋土状況 26
12 3F区 検出遺構 28
13 3F区 セクション8～13 30
14 6F区 建物跡 36
15 5－6Fセクション 37
16 整地部セクション 38
17 MB601、602建物跡 39
18 MP603 40
19 館に伴う遺物 41
20 4、5F区 51
21 4、5F区セクション 52
22 縄文時代の遺構分布 55
23 フラスコ状ピット平面及び埋土状況 56
24 〃 57
25 〃 58
26 〃 59
27 フラスコ状ピット出土土器 60
28 フラスコ状ピット、4F区出土土器 61
29 4F、5F区出土土器 62
30 5F、6F区出土土器 63

表1 発掘された中世の遺跡 5
2 市内の城館遺跡 6

文献1 『邦内郷村志』 ～ 72Page
2 『下閉伊郡志』 ～ 72
3 『東奥古傳 閉伊之巻』 ～ 72
4 『吾妻むかし物語』 ～ 71
文献5 『祐清私記』 ～ 70page
6 『南部根元記』 ～ 70
7 『奥南舊指録』 ～ 69
8 『聞老遺事』 ～ 69

調　査　要　項

遺跡名	金浜館　Ka-02遺跡（1984　文化庁　全国遺跡地図岩手県27-147)中世・縄文時代複合遺跡
調査地区	宮古市大字金浜第１地割字西角地　7番、7番1、7番2、7番3、7番4、7番9、64番1、
	〃　　第１地割字堤ヶ池　16番1、16番2、16番3、17番、18番1、18番4、18番3、19番
調査原因	宮古市老人福祉センター建設
調査対象面積	6600㎡
調査面積	6300㎡
調査期間	航空写真測量図化　昭和55年２月　～　昭和55年３月
	試掘調査　　昭和55年３月11日～昭和55年４月23日
	本調査　　昭和55年５月12日～昭和55年11月24日
検出遺構	掘立柱建物跡、空堀り跡、フラスコ状ピット他
出土遺物	天目茶碗、青磁皿、炭化木製品他
	なお、調査資料・出土遺物等については宮古市教育委員会で一括保管している。
調査体制	宮古市教育委員会　　教育長　野口健造
	宮古市教育委員会事務局　　教育次長　大森宏太郎
	〃　　社会教育課　課　長　谷口忠一
	〃　　〃　係　長　小林制司（昭和54年度）
	〃　　〃　係　長　大沢祐幸（昭和55年度）
	〃　　〃　社会教育主事　沼崎幸夫
調査担当	〃　　〃　主　事　武田將男
報告者	〃　　〃　〃　〃

調査、報告にあたり下記の各位から御指導、御協力を賜わりました。御芳名を記して深甚なる謝意を表します。（敬称略）

指導・助言　昆野　靖・石川長喜・本堂寿一・本沢慎輔・嶋　千秋・菊地郁雄・国生　尚・佐々木　勝
八木光則・千田和文・原田秀文・以内啓邦・佐々木和久・中嶋　隆
鈴木優子・高橋憲太郎・鎌田祐二

調査作業　杉田　功・杉田　克・船越久五郎・松原勇平・小名弘二・船越誠哉・船越孫三郎
金森一民・杉田佳隆・杉田吉穂・大槌正之・大久保定一・金沢マサ子・金沢ユキエ
大槌孝子・大槌イサ・大槌トミ・船越エツ子・松原栄子
柳沢鶴哉・山崎正徳・盛合直行・上田洋子・長沢リワ・宇都宮良子・宇都宮潤子
佐々木ヤエ子・佐々木恭子・山根トシ・山根ヤヨエ・山根タイ・山根恭子・堀内ミヨ
小金渕ヒロ・小田島龍治・伊藤広志・田川由太郎・菅原房夫・佐々木竹治・山内源平
北村昭一・武田金治・畠山博明
高島岩雄・西野祐司・細越雅佐浩・上野さた子・佐藤仁子・佐藤日出海
荒谷秀雄・摂待保典・穴沢明子・小林健一・下沢邦彦
佐藤　肇・野崎　司・崎山ミイ・岩船まき子・高橋人輝

Ⅰ 調　査　経　緯

1．調査に至る経過

宮古市では、老人の生活相談・就職の指導・教養構座等の事業を行うため磯鶏老人福祉センターに続く第二の老人福祉センター建設を金浜地区に計画し、昭和50年12月に宮古湾に面する丘陵地1,2966㎡を用地として取得した。この土地は「宮古湾を一望に見わたす風光優美な立地条件の良い場所」と建設計画の概要にあるとおり、このような施設用地としては適地であったが、一方過去の人々もこの地を様々に利用しその痕跡を残してきたのである。耕作地として利用されながらも、地元の方々からは「館山」として親しまれ、丘陵頂部には祠があり地域の儀礼の対象となっていた。丘陵の先端部は国道45号線の開削によりすでに破壊されていたが、主体部には帯状の郭や段状の作り出しが見られ中世の城館と考えられていた。昭和49年２月１日号の『広報みやこ』には、市内城館遺跡の紹介を行なった『郷土史話　古城物語』(田村忠博著)の中で「金浜館」がとり上げられ、遺跡の構造や歴史的背景について解説されており、この遺跡の持つ意味が住民に広報されている。また岩手県遺跡台帳にも「金浜Ⅰ遺跡館跡　遺跡コードＬＧ－43　2334」として登載されている周知遺跡であった。

用地取得

城館遺跡

昭和53年12月には建設実施について市教育委員会に通知があり、市教委では翌54年１月に県教育委員会にこれを進達している。昭和54年度には調査費が予算化され10月には市教委に調査依頼をしているが、当時市教委には発掘調査の担当職員がおらず、その対応に苦慮し県教育委員会と協議を重ねてきたが、その結果昭和54年11月より埋蔵文化財の調査担当職員を配置することとなり、発掘調査を実施するに至った。

2．調　査　経　過

調査はまず遺跡の現状記録を行なうため、昭和55年２月に航空写真撮影、図化・基準点測量を依託し500分の1の地形図を作成した。発掘調査は３月11日に着手し、各平場に幅４ｍのトレンチを設定し遺構の遺存状況等を確認した。24日間の確認調査の結果、堀跡、柱痕、整地部分、フラスコ状ピット等が検出され、館跡に存在する遺構の概要が確認された。この結果をもとに県教育委員会、市長部局と協議が重ねられ、県文化課では「現段階では記録保存」との見解を示し、完全な調査を行なうよう指導をうけた。本調査は５月12日より着手し、トレンチの拡張を行ない遺構全体の確認を行なうことに努めたが、下草処理・土砂の移動など事前に意外な時間がかかり、また天候不順にもたたられ、遺構検出の段階でも調査日数が延びている。検出遺構は館跡に伴う堀・建物の他に縄文時代のフラスコ状ピットが47基あり、これらについても精査に時間を要し一時は教育委員会職員総出で調査にあたる日もあった。年度内施設工事完成ということで工事に追われる調査であったが、10月４日には市民・関係者を対象に現地説明会を行ない、最終日の11月23日には地元金浜地区の方々を対象に現地報告会を開き調査結果を説明し約140日間の調査を終えた。

航空写真測量

確認調査

本調査

II　金浜館の位置と環境

1．位置と地形

宮古市
Fig.1

宮古市は三陸海岸のほぼ中央に位置し、北には田老町・岩泉町・田野畑村・普代村・野田村久慈市・種市町・階上町・八戸市と続く隆起性の海岸段丘、南には山田町・大槌町・釜石市・三陸町・大船渡市・陸前高田市・気仙沼市から牡鹿半島へと続く沈降性のリアス式海岸が広がり、当市を境に対照的な地形と景観が見られる。

三陸沖は、親潮・黒潮そして津軽暖流が交わり複雑な潮目を作ることから、豊かな漁場として有名であり、沿岸の各地、特にリアス式海岸の地域には古くから良港が開けている。このような地域には、必ずと言って良いほど縄文時代の貝塚があり、特に気仙地方には大規模なものが多い。

宮古湾
Fig.3

太平洋をさえぎるように北へ突き出した重茂半島は、その西側に良好な湾入を形成している。閉伊崎から湾頭部までの奥行約9㎞の宮古湾は、リアス式海岸の北端に位置しここから北には海岸段丘と海食崖の海浜が続く。

西方からは、北上山地の兜明神岳に源を発し、区境高原・川井村・新里村を貫く閉伊川が流れ込み、南の湾頭部は鮭の溯上で有名な津軽石川の河口になっている。

水深は湾口部で約20m、湾央部で5～10mで汽水性の湾内ではカキ・ホタテ・昆布などの養殖が行なわれている。

宮古湾の東岸は、直線状の津軽石断層面に沿って海に落ち込んでいるため、白浜・堀内などに小さな集落が形成されているにすぎない。西岸の閉伊川河口には市街地が開けここから南へ藤原・磯鶏・高浜・法ノ脇そして津軽石と村落が続いている。

金浜館

閉伊川河口の市街地から国道45号線で宮古湾東岸を南下すること約6㎞、宮古湾に面した集落が金浜である。小起伏山地から流れ出る小河川が山地を開析し、その堆積物により海浜に平担面が形成されている。集落はこの小河川沿いの緩斜面と平担地に見られる。

この小河川をはさむように、ほぼ独立したふたつの丘陵が張り出しており、北側にある標高34mの丘陵先端部が金浜館である。金浜地区の北端に位置し、南には集落全域、西には旧街道、東には宮古湾のほぼ全域を一望に見わたすことができる。金浜館に相対峙している南の丘陵部部山裾には神峯山江山寺があり、すぐ裏の斜面は墓地となっている。

小河川沿いに西に登り、大字妻ノ上を過ぎると金浜地区の西を限る峠に至る。この峠を越すと、北に八木沢・磯鶏に至る旧街道があり、南には大谷地・根井沢・荷竹・払川、また大谷地・折壁・花輪・長沢方面に通じる道がある。

金浜から南には法の脇の西の沢を通り津軽石に至る古道があり、これらにまたがる金浜第5地割と津軽石第3地割の字名はいずれも「馬越」となっている。

2．市内の城館遺跡

Fig.2

市内には現在のところ30ヶ所の城館が確認されている。城館の構築・廃絶は各々の時代状況・歴史的背景の中で行なわれてきたものであるので、これらを詳細に検討し各々の城館の持つ性格・時間的変遷・同時に存在した城館の縄張り構成また城館に伴う集落のあり方などを明ら

かにしていくことが必要であるが、ここでは宮古地区に所在する城館の分布・立地について概括的に述べることにする。

分　布

城館の分布は閉伊川とその支流にほぼ集中しており、閉伊川に面するものとしては根城・老木館・根市館・田鎖城・松山館・堀合館・千徳城・笠間館・黒田館などの諸城館があり、支流の長沢川には花輪館・鱒沢館・長沢館・折壁館、近内川には近内館・近内大館、山口川には山口館などの館跡がある。この他に八木沢川流域や、津軽石川河口に７ヶ所の館跡が見られ、金浜館は、鍬ヶ崎館・重茂館と共に数少ない臨海性の城館である。

立　地

市内城館遺跡の多くは、河川に面した丘陵地の末端部に立地している。特に河川の合流点に張り出す丘陵部には存在率が高い。これは河川あるいは河川沿いにできた街道などの交通路の掌握と防御上の利点ということに起因すると考えられる。つまり丘陵下との比高が40ｍ～80ｍという高所でしかも丘陵先端部という立地は、周囲の展望が容易であり、基部を空堀りで区切れば周囲は急峻な斜面であり自然の要害となる。河川の合流点では二方が自然の水堀りとなりより強固な守りとなるのである。防御上有利な土地を選ぶ傾向は14世紀に構築された城館に強いようである。

金浜館の立地

金浜館は市内でも数少い臨海性の立地であり、館跡からは宮古湾内のほぼ全域と対岸の白浜・堀内・赤前の集落を見渡すことができ、展望は極めて良好である。背後の山地から張り出す丘陵先端部に標高34ｍの主郭があり東端は宮古湾に没っしている。南北は丘陵斜面になっており南斜面は特に急峻である。

機能要素

内湾に接っする立地ということから館に伴う集落では、湾内漁業が行なわれていたことが予想され、この地に館を築いた人物も海浜性の生業に強く結び付いていた、あるいは結び付かざるを得なかったと考えられる。さらに良好な展望という立地から考えられる金浜館の機能要素のひとつとして、生業の場として重要な意味を持つ湾内漁場の掌握・管理ということも考えられるのではなかろうか。この点については時代背景等の検討が必要であるが、臨海性の館についてはその機能要素のひとつとして、漁業あるいはそれに伴う交易に係る面が加味されるのではないかと考えられる。

金浜館の位置（南より）　Photo.5

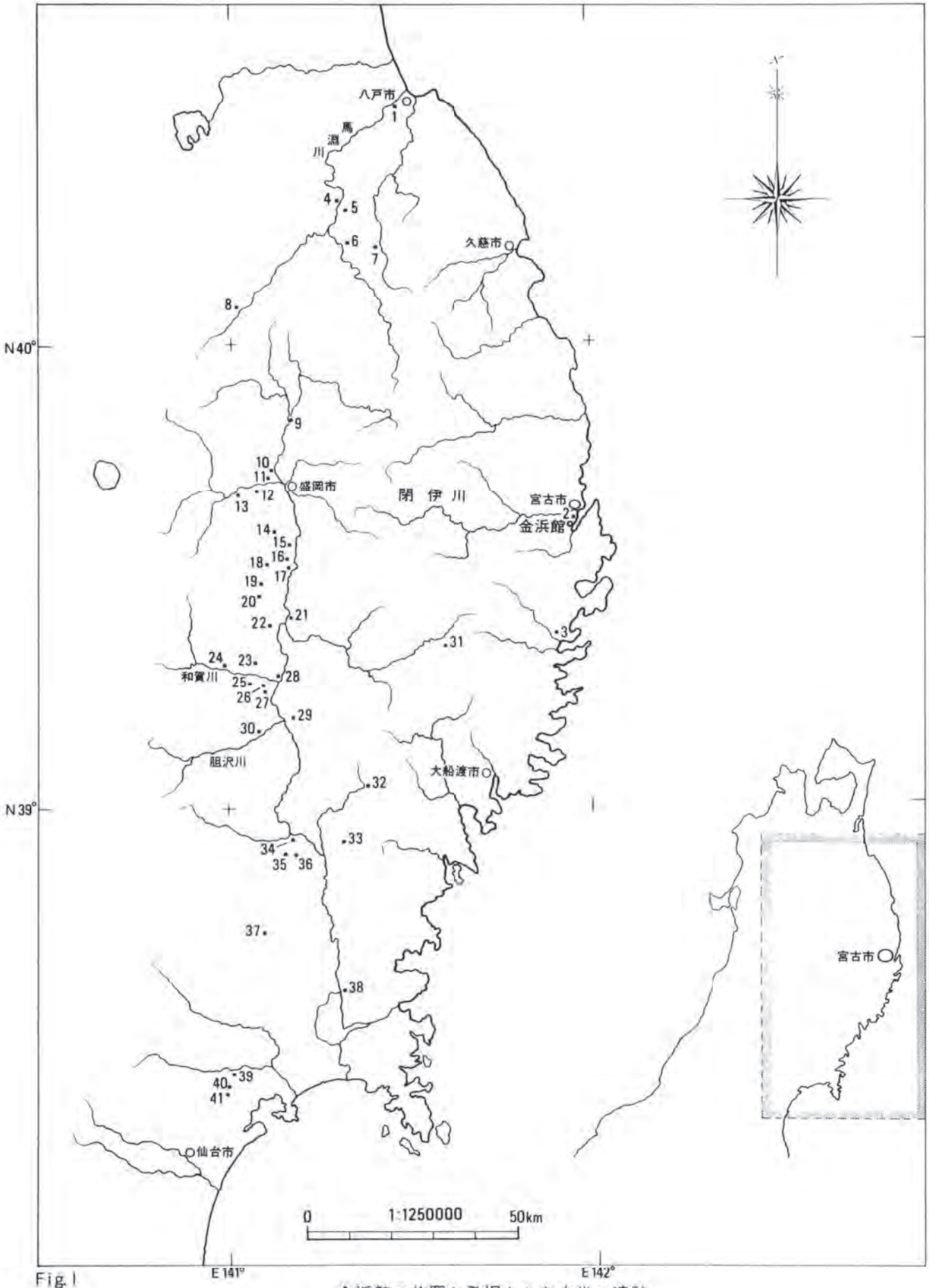


Fig. 1

金浜館の位置と発掘された中世の遺跡

発掘調査された中世の遺跡

表1

No.	遺跡名	所在地	備考
1	根城	青森県八戸市大字根城	1979 史跡根城跡発掘調査報告書Ⅰ 八戸市教育委員会
2	磯鶏館山	岩手県宮古市大字磯鶏字岸ノ前	1984、1985年発掘調査中（宮古市教育委員会）
3	大槌城	〃 上閉伊郡大槌町大槌	1984 大槌城発掘調査概報 大槌町教育委員会
4	長瀬C遺跡	〃 二戸市米沢字長瀬	1981 二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター第22集
5	九戸城	〃 二戸市福岡字橋場、五日町	1983 橋場遺跡（九戸城跡）緊急発掘調査報告書 二戸市教育委員会
6	一戸城	〃 二戸郡一戸町字北館	1982 一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 一戸町教育委員会
7	伊保内館	〃 九戸郡九戸町伊保内	1983 伊保内Ia・Ib遺跡発掘調査報告書 岩手県埋蔵文化財センター第53集
8	上の山館	〃 二戸郡安代町上の山	1982 上の山館遺跡発掘調査報告書 〃 第40集
9	下田八幡館	〃 岩手郡玉山村下田字牡丹野	1984 下田八幡遺跡 玉山村文化財調査報告書第10集 玉山村教育委員会
10	安倍館	〃 盛岡市安倍館町	1978 盛岡市安倍館古代末期城柵遺跡（復刻） 盛岡市教育委員会
11	里館	〃 盛岡市天昌寺町	1981年発掘調査 〃
12	太田館	〃 盛岡市太田松の木	1985 館遺跡発掘調査報告書（1979、1982年調査） 〃
13	繋Ⅲ遺跡	〃 盛岡市繋字清水端	1980 御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター第13集
14	久保屋敷	〃 紫波郡矢巾町室岡字久保	1979 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ岩手県文調報第32集
15	高水寺城	〃 紫波郡紫波町二日町字古館	1984年発掘調査（紫波町教育委員会）
16	比爪館	〃 紫波郡紫波町南日詰字箱清水	1983 比爪館遺跡第6次発掘調査報告書 鎌田祐二 紫波町教育委員会
17	善知鳥館	〃 紫波郡紫波町南日詰字滝名川	1964 岩手県紫波町善知鳥館調査報告書 板橋源 〃
18	柳田館	〃 紫波郡紫波町片寄字中平	1980 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ岩手県文調報第53集
19	大瀬川館	〃 稗貫郡石鳥谷町字大瀬川	〃 〃 Ⅷ 〃 第57集
20	小森林館	〃 稗貫郡石鳥谷町字小森林	1984 小森林館跡発掘調査報告書 岩手県埋蔵文化財センター第73集
21	胡四王山館	〃 花巻市矢沢胡四王山	1958 館址 江上波夫他 東洋文化研究所
22	古館	〃 花巻市湯口町大字中根子字古館	1981 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ岩手県文調報第56集
23	新平館	〃 和賀郡江釣子村新平	1967 岩手県江釣子村新平塚郡遺跡 板橋源 佐々木博康
24	蛭川館	〃 和賀郡和賀町横川目	1983 蛭川館遺跡発掘調査報告書 和賀町文化財調査報告書第2集
25	岩崎城	〃 和賀郡和賀町岩崎宿	1932 岩崎城址 史蹟名勝天然記念物調査報告第11号 小笠原謙吉
26	鹿島館	〃 北上市鬼柳町満田坂の上	1975 鹿島館遺跡調査報告書Ⅰ、Ⅱ 北上市文化財調査報告第15集
27	丸子館	〃 北上市鬼柳町下鬼柳笊淵	1974 北上市丸子館遺跡調査報告書 〃 第12集
28	二子城	〃 北上市二子町	1972 二子城跡坊館遺跡調査報告書 〃 第21集
29	岩谷堂城	〃 江刺市岩谷堂字館下	1984 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報 岩手県埋蔵文化財センター第75集
30	大林城	〃 胆沢郡金ヶ崎町大字永沢	1983 館山遺跡第2次発掘調査報告書 〃 第65集
31	鍋倉城	〃 遠野市遠野	1974 遠野市鍋倉城二の丸跡発掘調査報告書 板橋源
32	伊勢館	〃 東磐井郡大東町鳥海字清水	1984 昭和57年度伊勢館発掘調査報告書 大東町文化財調査報告書第8集
33	牧ノ巣館	〃 東磐井郡千厩町磐清水字大沢田	1981年発掘調査 掘立柱建物跡・空堀検出
34	狐禅寺城	〃 一関市狐禅寺峰下	1981年範囲確認調査 1984年発掘調査（一関市教育委員会）
35	牧沢城	〃 一関市牧沢中屋敷	1981年発掘調査（一関市教育委員会）堀跡・土塁検出
36	滝沢城	〃 一関市滝沢字館下	1984 滝沢城跡発掘調査報告書 岩手県埋蔵文化財センター第81集
37	鶴ノ丸遺跡	宮城県栗原郡志波姫町八樽字谷地	1981 東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ 宮城県文化財調査報告書第81集
38	柳津館山館	〃 本吉郡津山町柳津字宮下	1984 柳津館山館跡 〃 第102集
39	駒場小谷館	〃 黒川郡大衡村駒場字中里	1983 東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ 〃 第93集
40	御所館	〃 黒川郡大和町落合蒜袋字宮下	1983 〃 〃
41	八谷館	〃 黒川郡大和町落合蒜袋字新田	1983 〃 〃

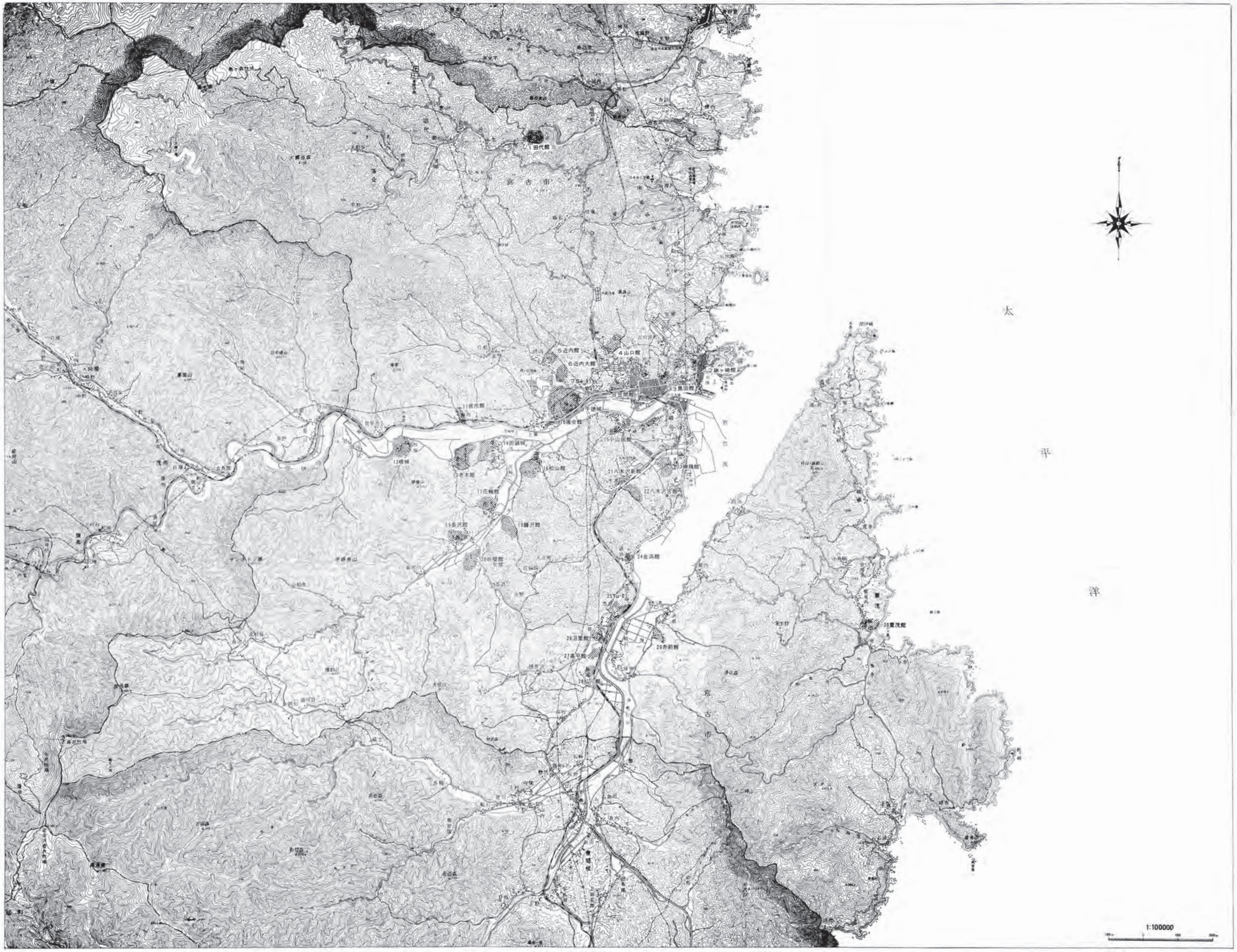
参考文献 1980 「日本城郭大系」－2 青森・岩手・秋田
1982 「岩手の土器」－文献目録 岩手県立博物館

市内の城館遺跡

表2

No.	城館名	所在地	築城年代	創建者・館主	文献
1	田代館	田代字吾妻	南北朝時代頃か	田代氏	東奥古傳・大久保昔書遺翰
2	鍬ヶ崎館	鍬ヶ崎下町	室町時代末	河北閉伊氏	東奥古傳
3	黒田館	本町・沢田	室町時代末	河北閉伊氏（近能氏）	東奥古傳
4	山口館	山口字久保	不詳	小笠原氏	東奥古傳・安泰寺鐘銘
5	近内館	近内	室町時代から戦国初期	近内氏	東奥古傳・奥南旧指録
6	近内大館	近内	不詳	不詳	
7	Se－01	千徳長根	不詳	不詳	
8	笠間館	和見町	南北朝時代初期(14世紀前半)	閉伊余市員連	東奥古傳・東奥一戸系譜略
9	千徳城	千徳字沢・太田	14世紀末	河北閉伊氏	東奥古傳・諸城破却共書上之事
10	堀合館	千徳字土子豆	不詳	不詳（千徳城以前）	
11	根市館	根市字与藤沢	鎌倉時代末期(14世紀初頭)	閉伊氏	東奥古傳
12	根城	老木字根城	南北朝時代初期(14世紀前半)	閉伊氏	東奥古傳
13	老木館	老木字沢の下	室町時代初期（14世紀末）	閉伊氏	東奥古傳・尾崎大明神縁起
14	田鎖城	田鎖字三合並	永和年間(1370年代)	田鎖氏	東奥古傳・東奥落穂集　田鎖系譜
15	小山田館	小山田字館ヶ下	不詳	閉伊氏（田鎖氏）	上・下閉伊郡誌
16	松山館	松山字小深田	南北朝時代末(14世紀後半)	白根氏	大久保昔書遺翰　東奥古傳
17	花輪館	花輪字程久保	天文15年(1546)	花輪十郎左衛門朝重	参考諸家系図（花輪氏）
18	蟶沢館	花輪向沢・蟶沢	不詳	不詳	
19	長沢館	長沢字中家和戸	室町後期から戦国初期	長沢氏（田鎖系）	東奥古傳　大久保昔書遺翰
20	折壁館	長沢字中折壁	室町時代	伊藤氏	東奥古傳
21	八木沢新館	八木沢守の越	室町時代	八木沢氏	東奥古傳・奥南落穂集
22	八木沢古館	八木沢湯舟ヶ沢	不詳	弥木沢氏	東奥一戸系譜略
23	磯鶏館山	磯鶏岸ノ前	不詳	不詳	
24	金浜館	金浜西角地	戦国時代	本文参照	東奥古傳・系胤譜考　宝翰類聚
25	Tu－01	津軽石字馬越	不詳	山崎氏か	東奥古傳
26	沼里館	津軽石字沼里	室町時代中頃	不詳	東奥古傳　東奥一戸系譜略
27	高平館	津軽石字吉原	不詳	不詳	
28	払川館	津軽石字払川	室町時代末から戦国初期	津軽石氏	東奥古傳　東奥一戸系譜略
29	赤前館	赤前字神田	南北朝時代	赤前治郎左衛門為義	東奥古傳　参考諸家系図
30	重茂館	重茂字館	15世紀末か	重茂民部少輔広嗣	東奥古傳　参考諸家系図

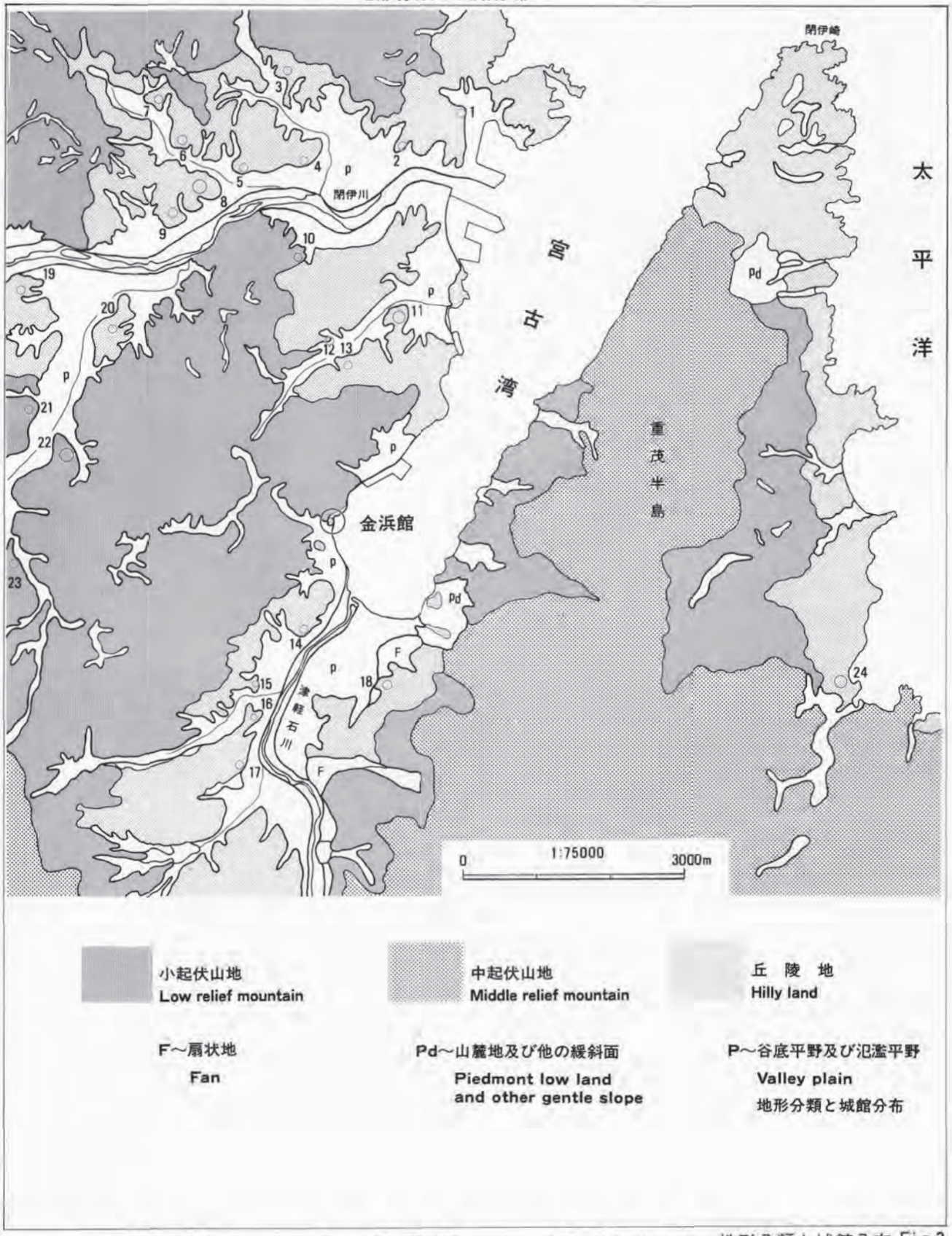
参考文献　『日本城郭大系２　青森・岩手・秋田』　本堂寿一他　1980
『宮古地方の中世史　古城物語』　田村忠博　1983



市内の城館遺跡

Fig.2

地形分類と城館分布



地形分類と城館分布 Fig.3

1	鍬ヶ崎館	9	堀合館	17	払川館
2	黒田館	10	小山田館	18	赤前館
3	山口館	11	磯鶏館山	19	田鎖城
4	笠間館	12	八木沢新館	20	松山館
5	Se－08	13	八木沢古館	21	花輪館
6	近内大館	14	Tu－01	22	鱒沢館
7	近内館	15	沼里館	23	折壁館
8	千徳城	16	高平館	24	重茂館

Photo.6　　金浜地区（南西より）

Photo.7　金浜館と集落（東より）

金　浜
第１地割
　堤ヶ池
　西角地

第２地割
　古　館

第３地割
　妻の上

第４地割
　鋤ヶ崎

第５地割
　馬　越

第６地割
　古　川

第７地割
　船川原

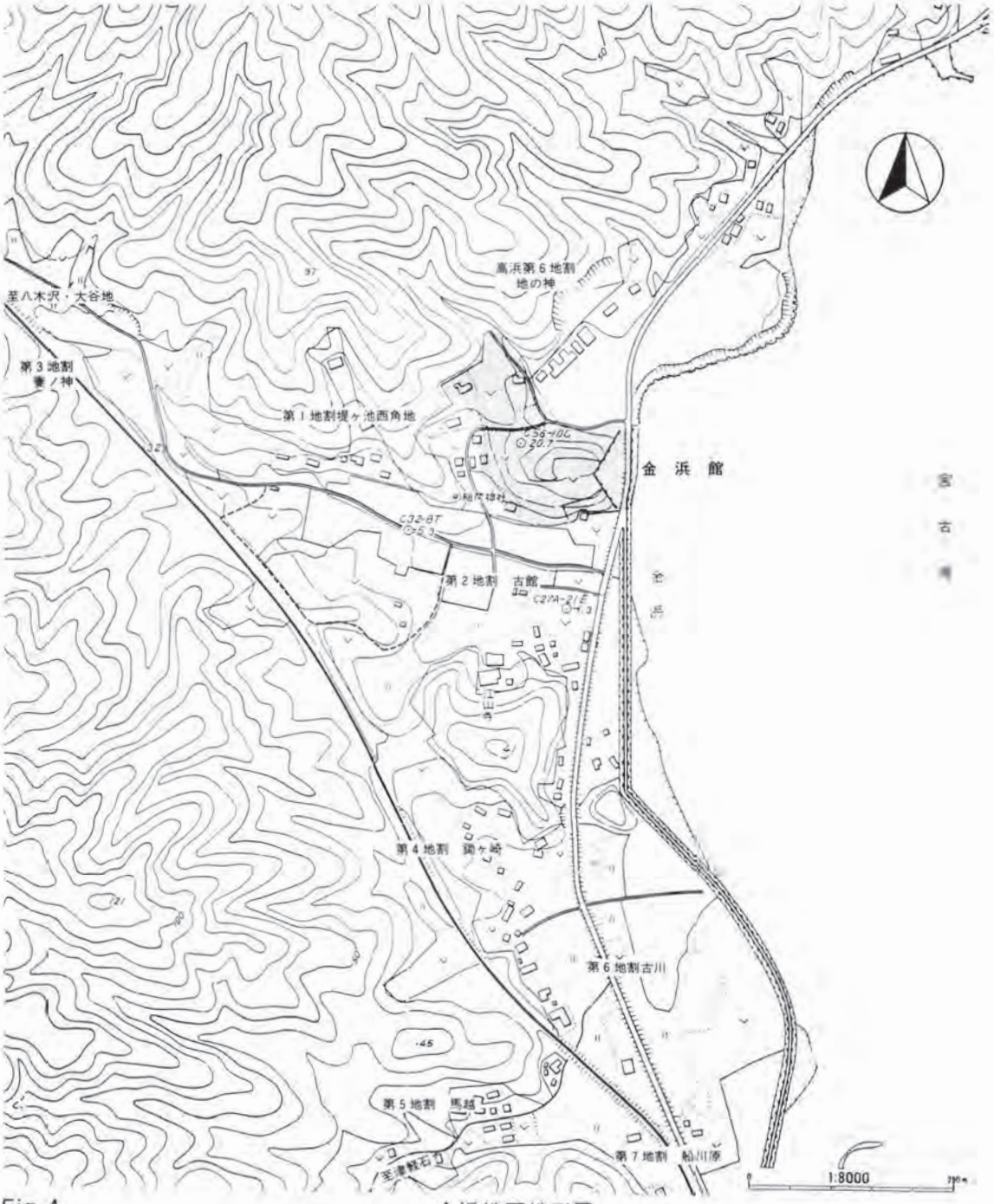


Fig.4　　金浜地区地形図

金浜地区航空写真　Photo.8

Ⅲ 金 浜 館 の 概 要

1．発掘調査前の状況

金浜館の東端は宮古湾に接っしており、『東奥古傳閉伊之巻』には「金浜館は海辺にて東南の腰に浪の寄せ岸を阿らふ」とある。現在は国道45号線の開削(註)により、東端部の20～30ｍほどが削り取られており、南東の一部がわずかに残っているのみである。

Fig.5 館の北は道路を隔てて高浜地区（第６地割地ノ神）になっており、高浜小学校がある。高浜との境の道路部分は、かつては堤ヶ沢に続く沢地で金浜館の北を限る天然の水堀りとなっていたと言われる。現道はこの旧沢地を登り館の北西部の細い尾根を切り通し、南へ下って集落の

Photo11 中心部に至る。切り通しの北は一部宅地になっているが、尾根上に二段の作り出しが見られる。

館の西には道路をはさんで小さな丘陵張り出し部があり、ここには稲荷神社が祀られている。

地籍 地籍図では、主郭をとりまく帯郭が堤ヶ沢19番、16番２、16番３、西角地７番１にあたり、堤ヶ池18番１、３、４が主郭部分に相当する。また17番は主郭南西斜面中腹に開かれた４×７

Fig.6 ｍほどの小さな平場にあたる。

註 白根光久 撰 藩制後期の宮古地方の史家

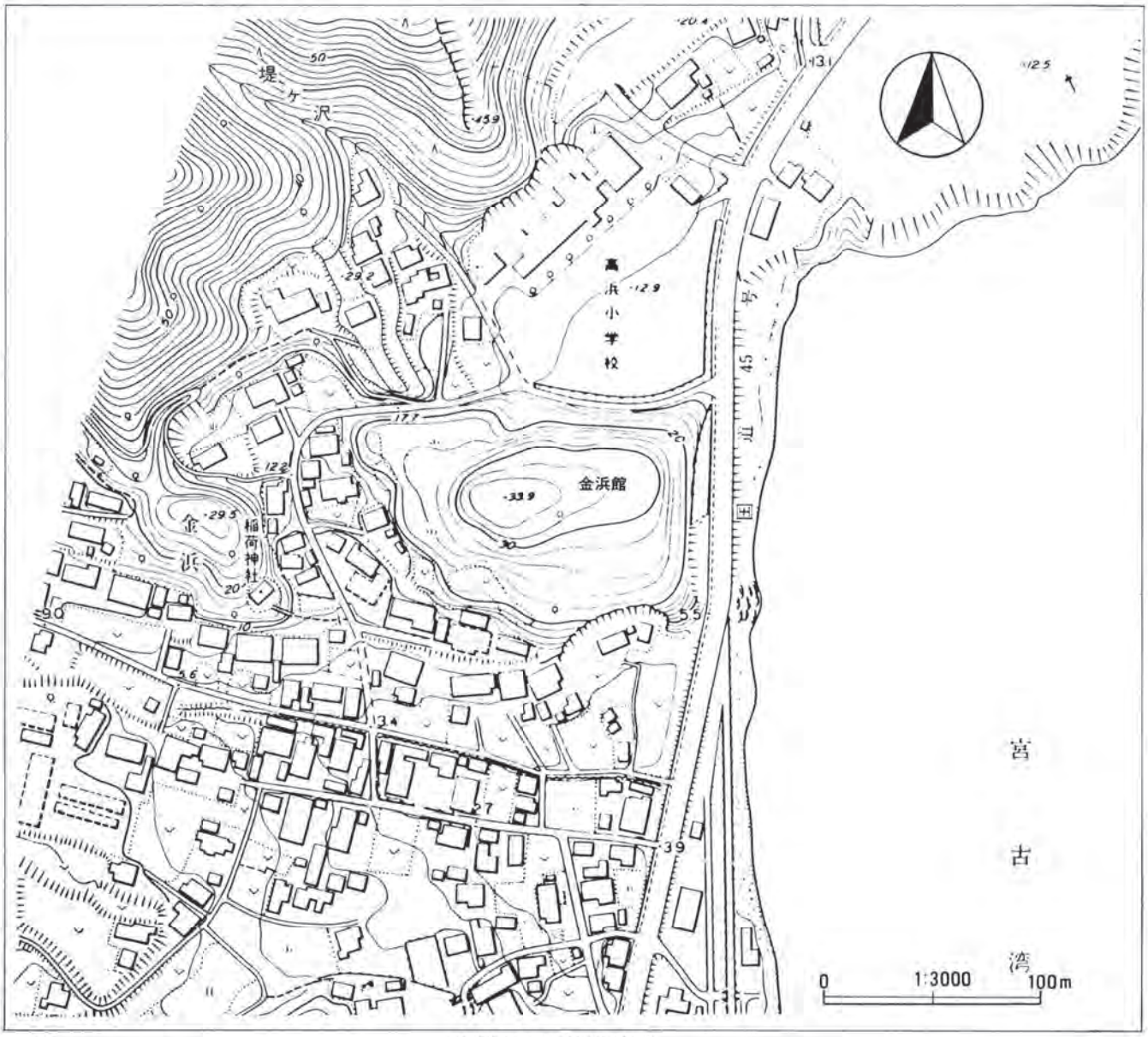


Fig.5 金浜館と周辺地形図

金浜館と周辺の地籍図

Fig.6

Photo.9　　金浜館航空写真

2. 規模と構造

規模

館は東西に伸びる丘陵上に構築されており、東は宮古湾に接っしているが、国道により末端は破壊されている。西側は一部宅地になっているが、構築時に意識された館の範囲は南に下る現道付近までと考えられる。現況で確認される館の範囲は東西約 160 m であるが、宅地・道路等により旧状が失われている部分も含めて当初の規模を推定すると東西で約 200 m を計る。南北は丘陵裾までの範囲で約130 m である。

構造

館跡は最上部の主郭・主郭南斜面の 2 段の平場および主郭をとり囲む帯郭により構成されている。帯郭は南斜面中央から主郭の西をとりまいており、この途中に西から館に上る小道がある。主郭の裾には、農作業用の道路があるが、これは新たに開かれたものと思われる。杉林でおおわれた北斜面にも巾 4 ～ 6 m の平場が二段に作り出されている。主郭は東西約 100 m、南北25 m ほどの東西に細長い郭で、西側の一部を除き畑として利用されている。この南に 2 ～ 3 m の段差で幅15 m ほどの二段の平場があり、南の急斜面（落差約20 m）に至る。

金浜館地形図　　Fig.7

Photo. 10　　金浜館遠景（南より）

Photo. 11　　金浜館北西部（南東より）

Photo. 12　　帯郭南西部（2F区東より）

Photo. 13　　主郭南平場（東より）

Ⅳ 調　査　結　果

1．発掘調査の概要

発掘調査の結果、今回の調査対象地区からは館跡に伴う堀・建物跡等の遺構と、縄文時代のフラスコ状ピット群が検出され、縄文時代・中世の複合遺跡であることが明らかになった。 Fig.8

(1) 館に伴う遺構と遺物

金浜館の最上部（標高35～32m）の東西に長い平場（6F区）からは、この遺跡の中心となる施設が検出された。6F区のほぼ中央に緩斜面を平担に整地した部分が見られ、ここから2棟の掘立柱建物跡の存在が確認された。またこの建物跡からは、青磁輪花皿が出土したほか、皿状の土坑からはほぼ完形の天目茶碗2個体、炭化した木製品が出土している。

6F区の南斜面には、二段の平場（5F区、4F区）が見られる。各々の平場にトレンチを設定し、遺構の有無を調査したが、館跡に伴うと考えられる建物跡等の遺構は検出されなかった。

調査対象地区西側の1F～3F区からは空堀り跡が検出されている。堀りは主郭部分の西側をとり囲むように配されており、MD101、MD102、MD304は薬研状の堀である。

(2) 縄文時代の遺構と置物

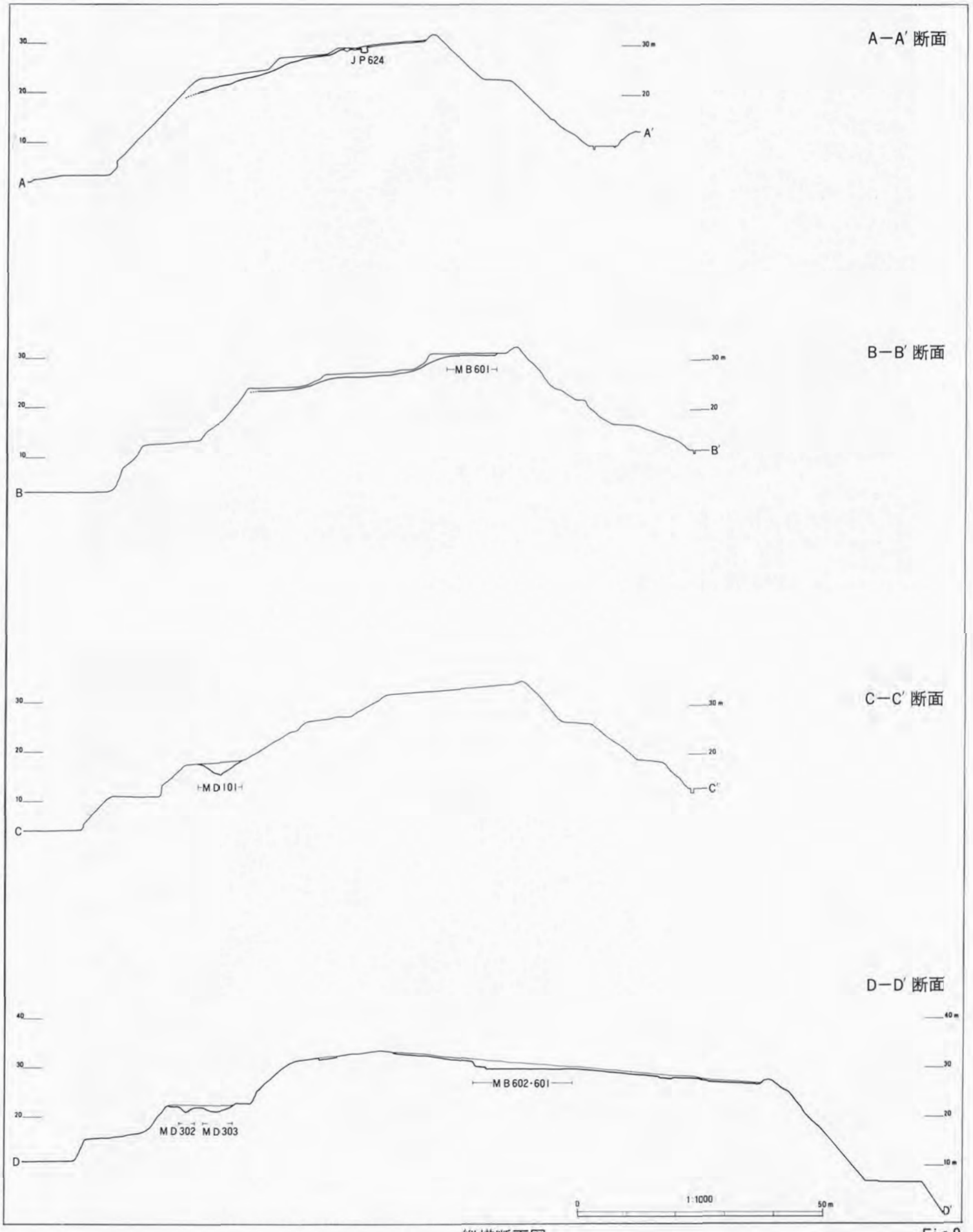
6F区の東半を中心に縄文時代のフラスコ状ピットが47基検出されており、ピットからは縄文時代前期及び中期の遺物が出土している。また5F、4F区からも縄文時代の遺物が出土している。

金浜館全景（南西より） Photo.14

Photo. 15　　金浜館航空写真

金浜館検出遺構全体図

Fig.8


A－A′ 断面
30
20
10
30 m
20
A
A′
J P 624
B－B′ 断面
30
20
10
30 m
20
B
B′
M B 601
C－C′ 断面
30
20
10
30 m
20
C
C′
M D 101
D－D′ 断面
40
30
20
40 m
30
20
10 m
D
D′
M D 302
M D 303
M B 602・601
0
1:1000
50 m

縦横断面図

Fig.9

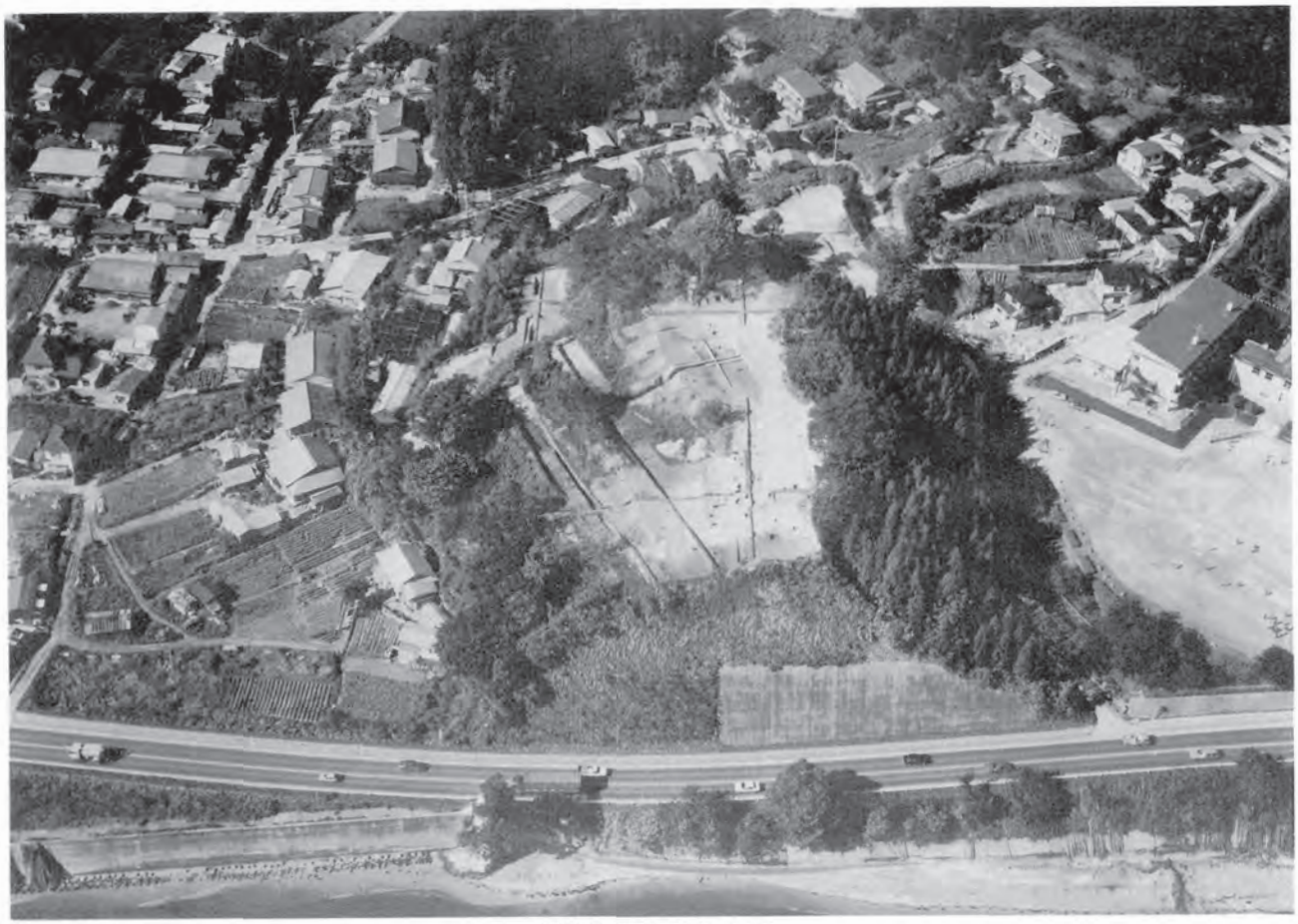


Photo. 16　　金浜館全景（東より）

Photo. 17　　金浜館全景（西より）

2．館に伴う遺構と遺物

(1) 空堀り跡

空堀り跡MD101は主郭の南西部１Ｆ、２Ｆ区より検出された。１Ｆ区は巾約10ｍ、長さ約20ｍほどの南東方向に長い平場で標高は17.5ｍ前後である。この北西に一段高い標高約20ｍの２Ｆ区が続く。巾約10ｍ東西約29ｍの平場で南北は急崖となっている。**(Photo.12)** １Ｆ区の南東端は斜面となって４ｍほど下り、小さな緩斜面を介して丘陵の裾に至っている。２Ｆ区の北西は巾３ｍほどの狭い道状の平場となり３Ｆ区に続いている。 **MD101**

ＭＤ101は１Ｆ、２Ｆ区の北側に沿って検出された堀り跡で、２Ｆ区の中央北半 (Section６) から１Ｆ区南東端 (Section１) まで確認している。堀の巾は約６～８ｍで、４Ｆ、５Ｆ区の山裾に沿って緩やかに曲がりながら南東方向に伸びており、南東端は１Ｆ区の斜面に抜けていると考えられる。堀はSection6までは確認しているが、ここから西は調査が及ばず不明である。調査で確認された堀の長さはSection１～６までで約41ｍである。**(Fig.10)**

調査は堀跡に６ヶ所のトレンチを設定し、埋土状況を観察すると共に堀の形態を確認した。堀の埋土は大きく三層に分けられる。１Ｆ区のSection1～３では埋土はほぼ共通しており、Ａ層は褐色～黄褐色土で地山の花崗岩風化土の真砂土を含む他、木炭の混入が認められる。Ｂ層は褐色～暗褐色土で一部に真砂土を含んでいる。Ｃ層は暗褐色土で真砂土を多く含み軟質である。 **埋土**

２Ｆ区のSection４～６でもほぼ同様な埋土状況であるが、Ｆ層では人為的に埋められた可能性が高い層相が観察された。**(Fig.11)**

堀は薬研状で、25～30°の傾状で堀り込まれている。巾は７ｍ前後、深さは最も深い南東部で3.2ｍ、２Ｆ区中央部では1.5ｍ前後となり、掘り込みの角度も緩やかになる。堀の最深部には、深さ15cmほどの溝が見られる。堀の底面は北西が高く南東に下っており、Section１と６では標高差が4.79ｍあり、この間での平均勾配は11.7%となる。各セクション間での勾配を見ると１－２間で最も強く13.6%、５－６間で最も弱く7.2%であった。 **形状**

堀と同時あるいは近時の遺物は見られなかったが、Section３のＢ層中からFig. 19－６に示す陶器が出土している。器高38mm、推定口径72mmの小型茶碗で、胎土は2.5Y8/3淡黄色でやや粗く釉は５Y8/3淡黄色である。 **遺物**

主郭西の３Ｆ区南半部で検出された堀跡で、主郭の山裾に沿って南北に二条平行して掘られている。ＭＤ302は巾2.4～3.6ｍ、深さ１～1.2ｍの薬研状の堀で、堀の底は12.2%勾配で南に下っている。埋土は大別三層で、Ｐ層は真砂土を混ずる黄褐色土、Ｑ、Ｒ層は褐色～暗褐色土である。ＭＤ303は302の東に沿って平行する堀で巾４～4.8ｍ、深さ１～1.5ｍ、9.5%の勾配で南に下っており、立ち上がりは約18°と緩やかである。埋土はＴ層が黒色土と黄白色粘土をブロック状に含む人為的な堆積で、Ｓ、Ｕ層は褐色～黄褐色の真砂土を含む自然堆積層である。これら二条の堀には明確な切り合いは見られず、掘削時の大きな時間差は認められない。 **MD302、303**

ＭＤ305は３Ｆ区の北半に検出されたもので、プランではＭＤ302に続いているが、各々の堀を完掘するに至っておらず、これらの関係を明確にし得なかったので、別遺構として取り扱う。巾４～4.8ｍ、深さ１～1.2ｍ、堀の底は7.2%の勾配で北東へ下っており、立ち上がりは20°～25°である。埋土はＡ層が黒色土と真砂土をイレギュラーに含む人為的堆積層、Ｂ層は真砂土を **MD305**

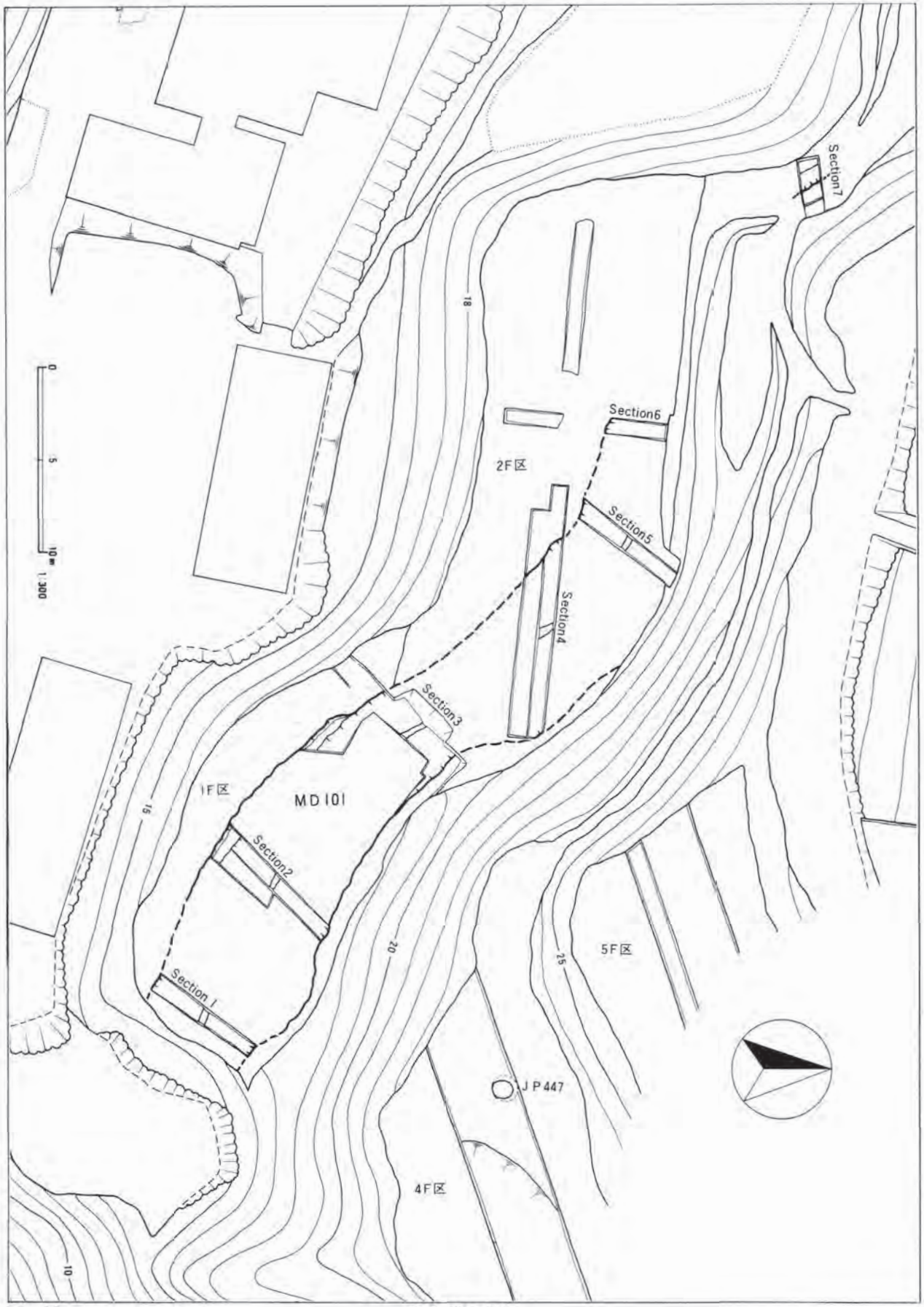
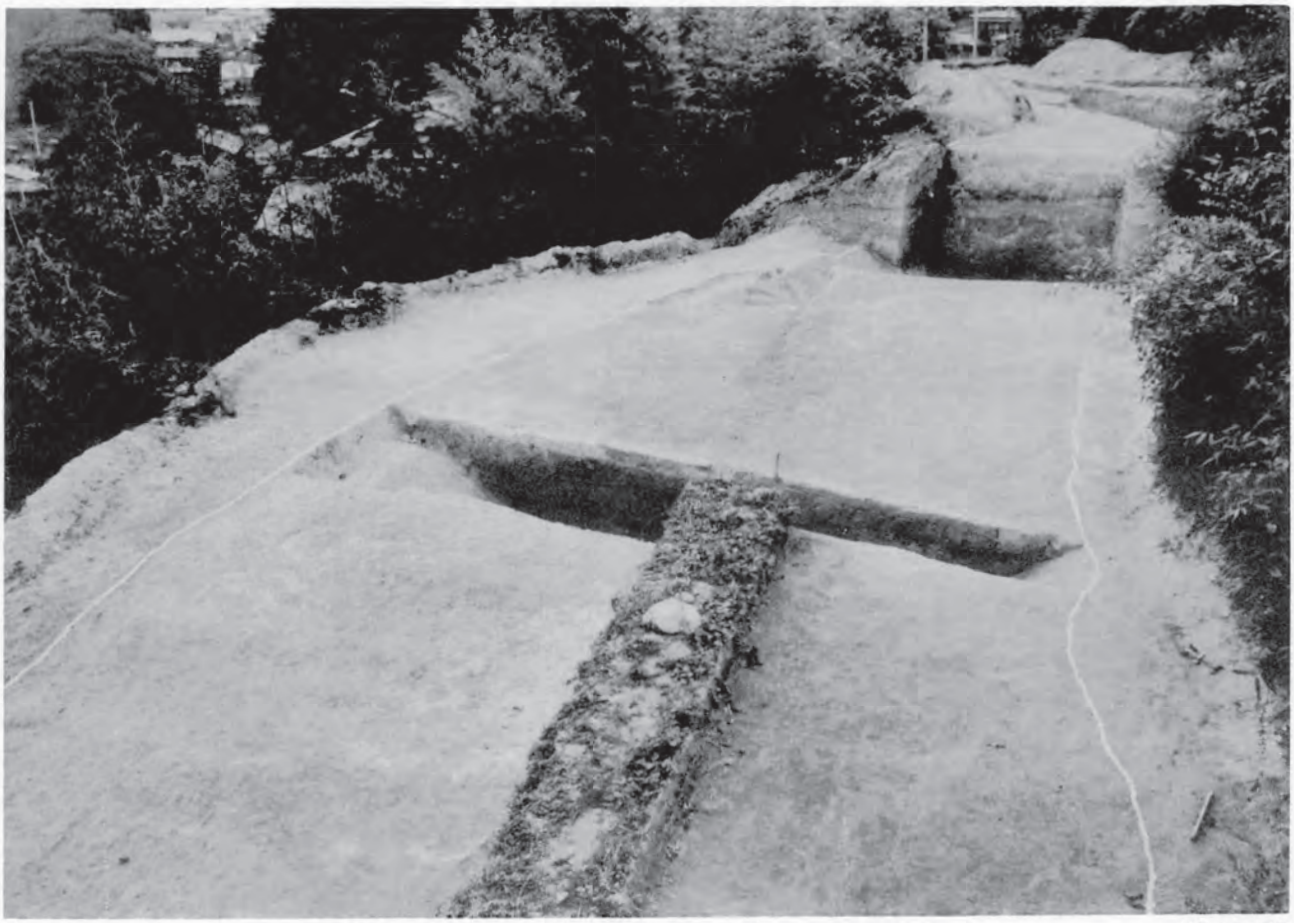
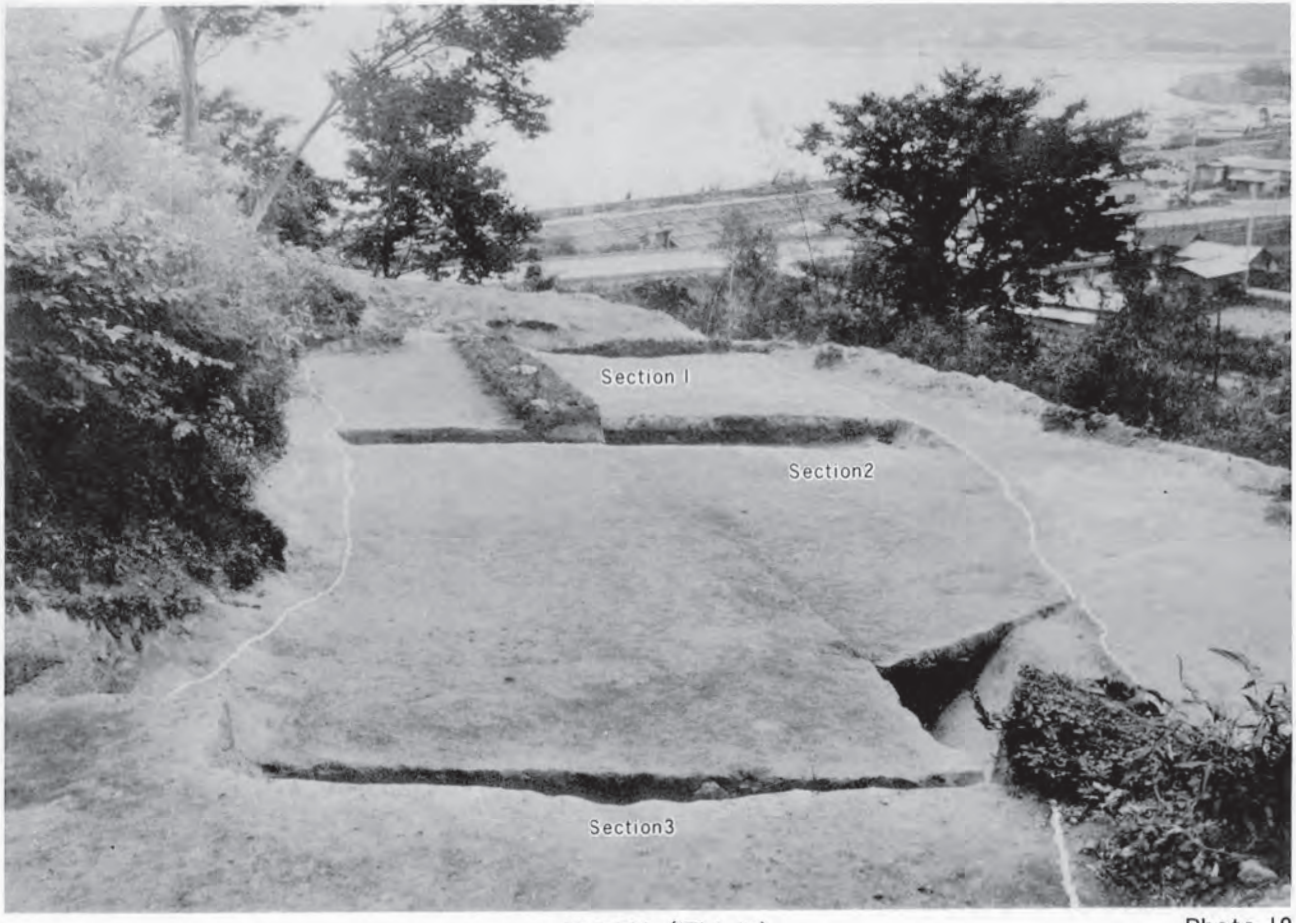


Fig. 10　　MD101 堀跡



MD101（東より）　Photo. 18



MD101（西より）　Photo. 19

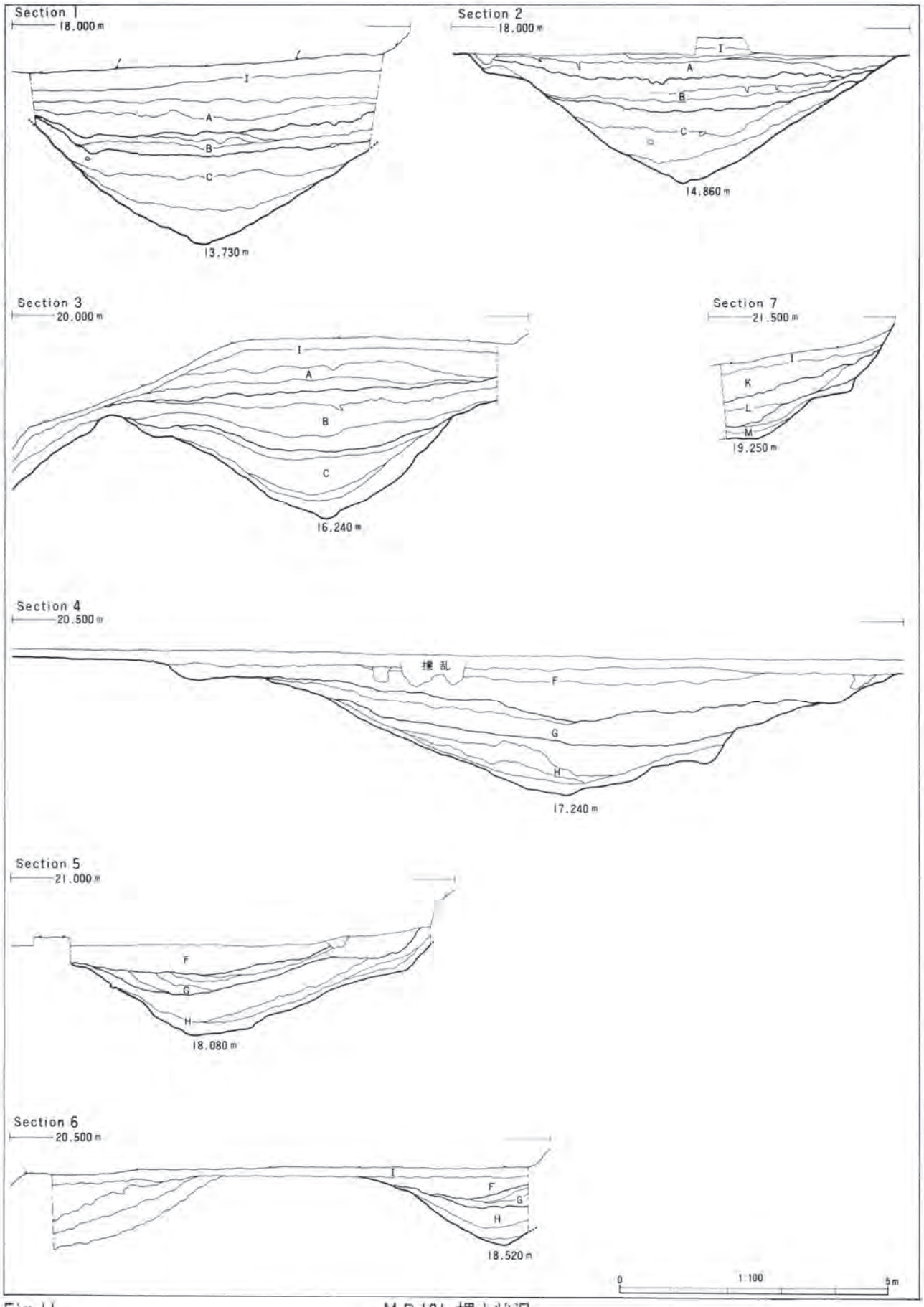
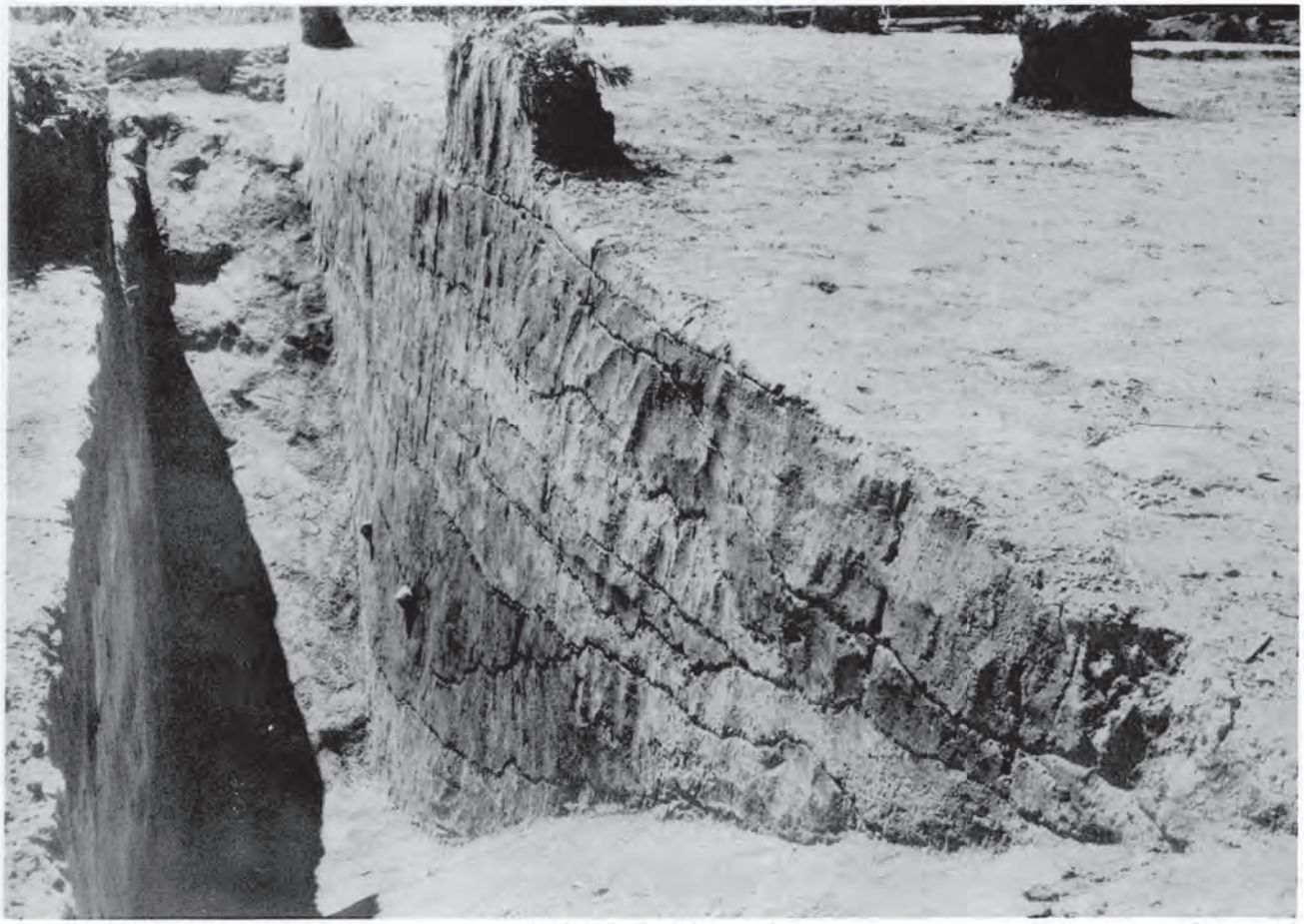


Fig.11 MD101 埋土状況



MD101 セクション2　　Photo.20

MD101 セクション3　　Photo.21

多く含む砂質土層である。またG層は黒色土で南側でMD305の埋土を切るように立ち上がっている。H層は黒色土・真砂土・黄色土が縞状に傾斜して堆積しており明らかに人為的なものである。

MD304　MD305の途中から北に伸びる堀で、トレンチ部分で巾約4m、深さ2.1m、ほぼ45°の角度で立ち上がる薬研堀である。埋土は真砂土を混ずる黄褐色土と暗褐色土で、D層は比較的短時間に堆積している。なお3F区の堀跡からは時期を決定できる遺物は出土していない。

XG307　MD305の埋土上層から掘り込まれた墓坑である。人骨はほとんど腐朽しており副葬品は無い。

XB306　東西9.6m(3.2m×3間)、南北8m(1.9・2.1・1.6・2.4mの4間)で、南東角の柱穴はMD305の検出面から掘り込まれており、堀の完全埋没後の遺構である。

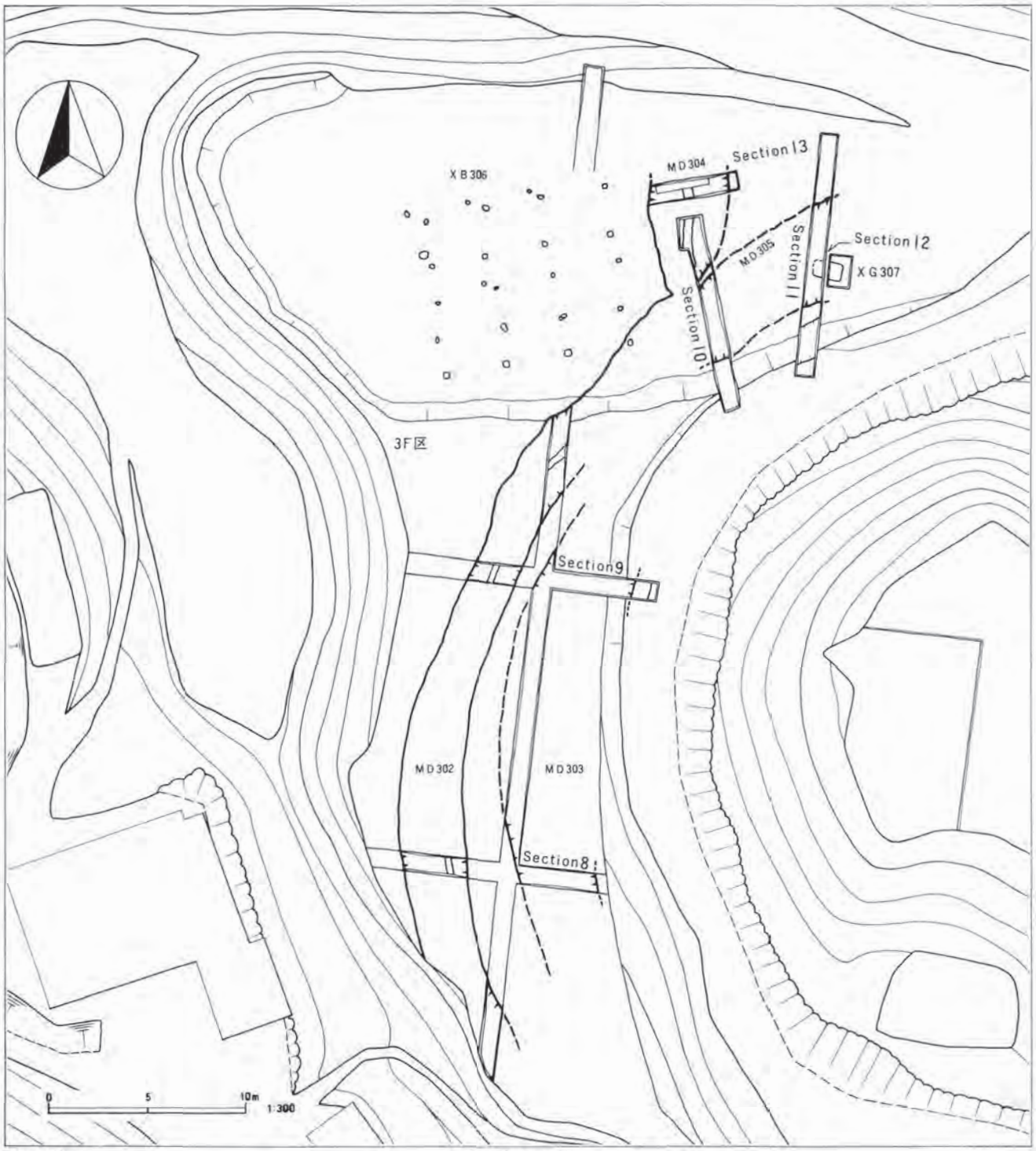
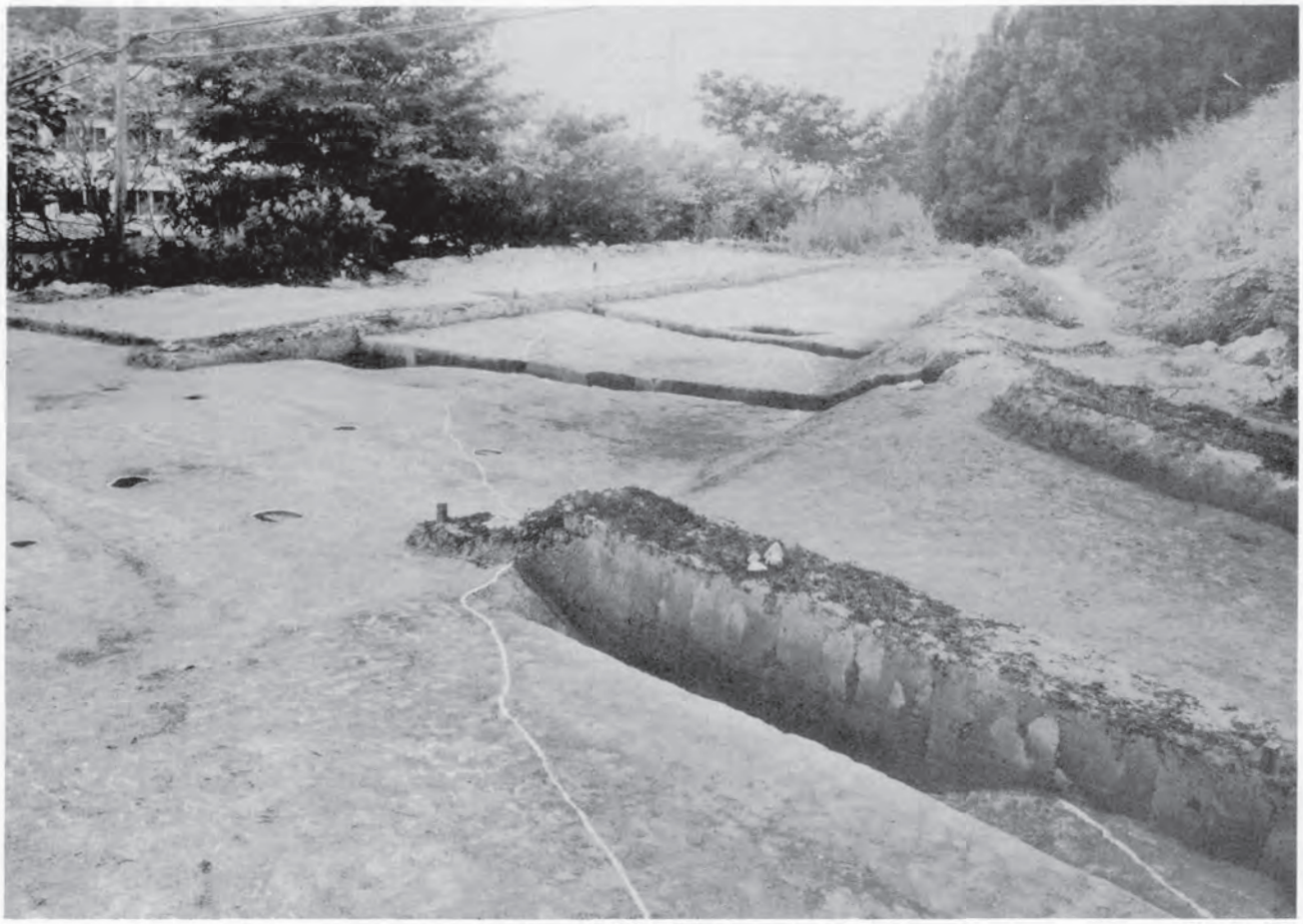
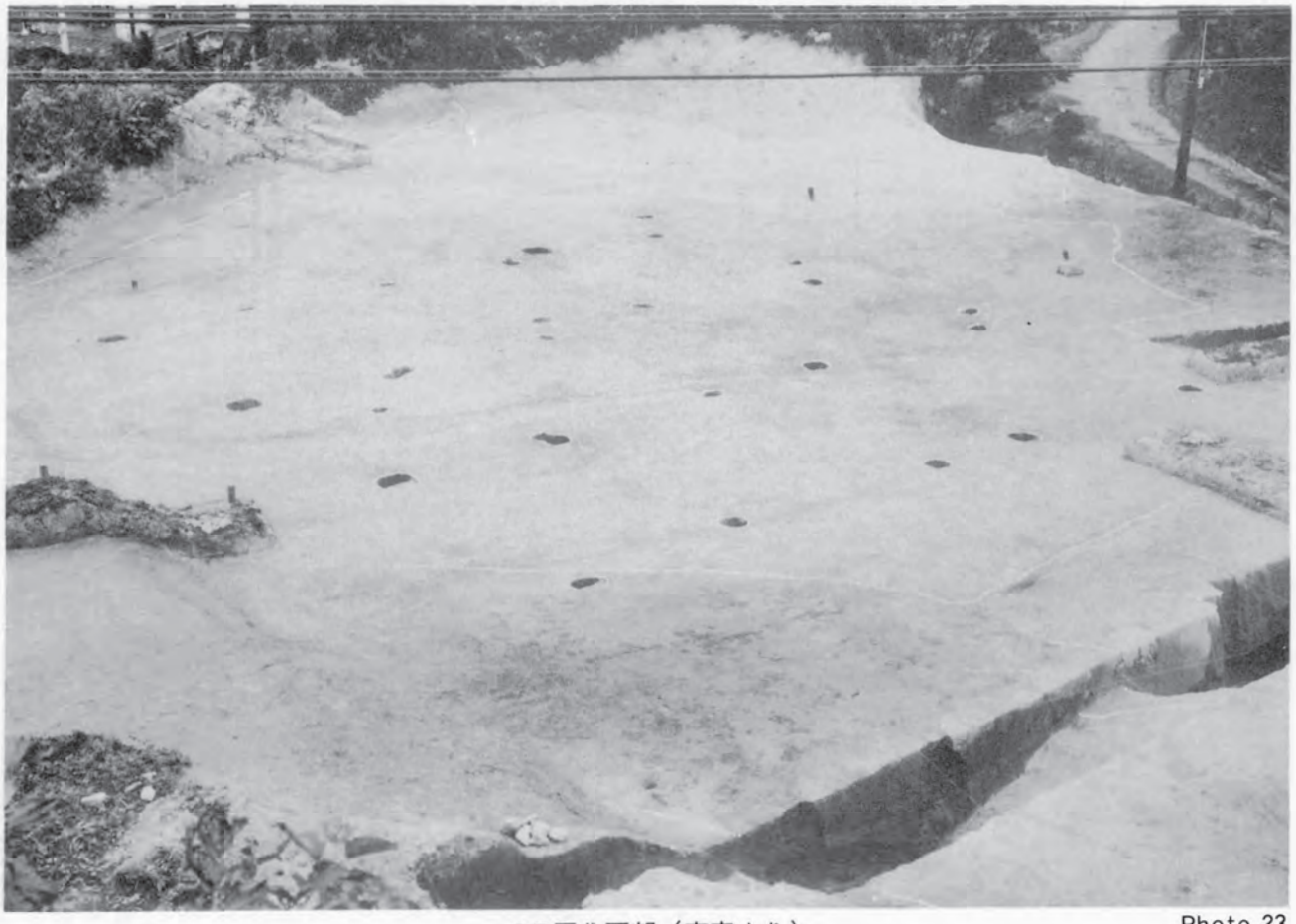


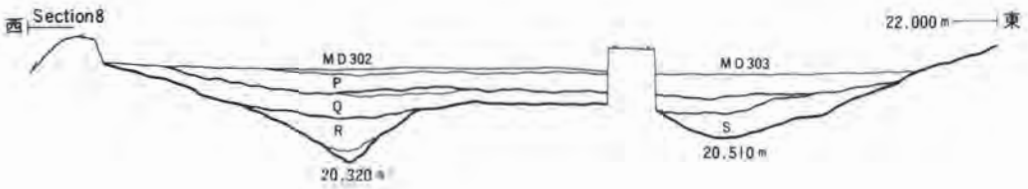
Fig.12　3F区検出遺構

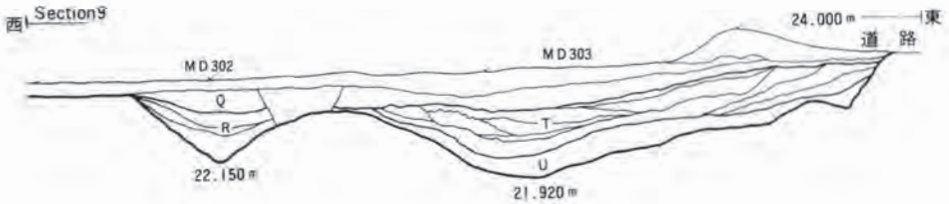


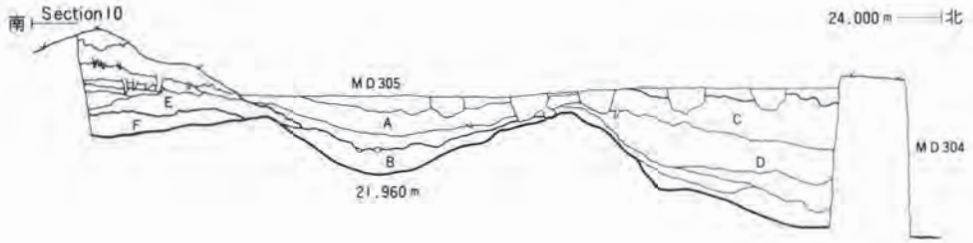
3F区北東部（南西より）　Photo.22

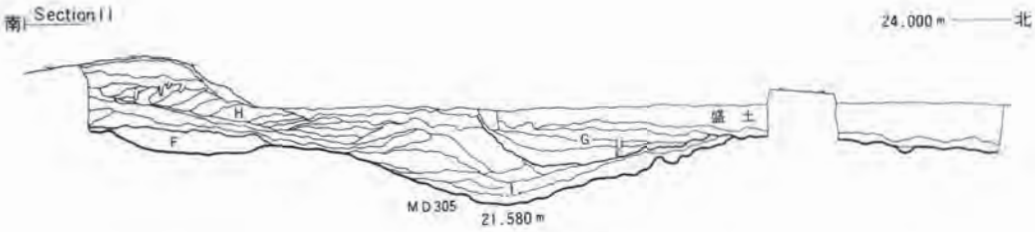


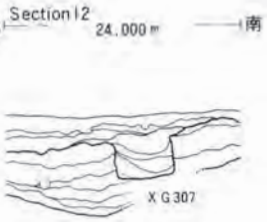
3F区北西部（南東より）　Photo.23











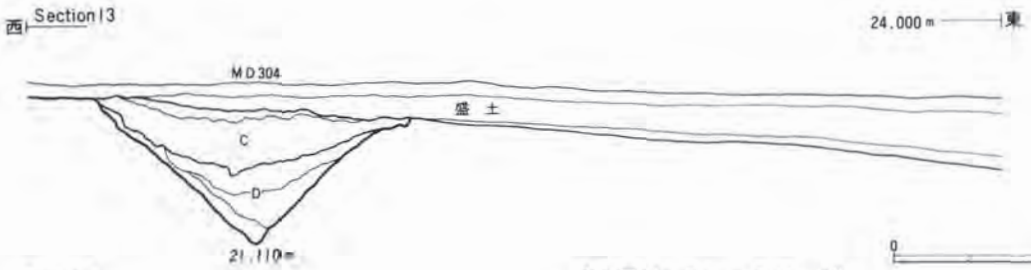


Fig.13　　3F区セクション8～13

セクション10～12　　Photo.24

セクション10　　Photo.25

Photo.26　　セクション11

Photo.27　　セクション13

セクション9 Photo.28

M D 302 Photo.29

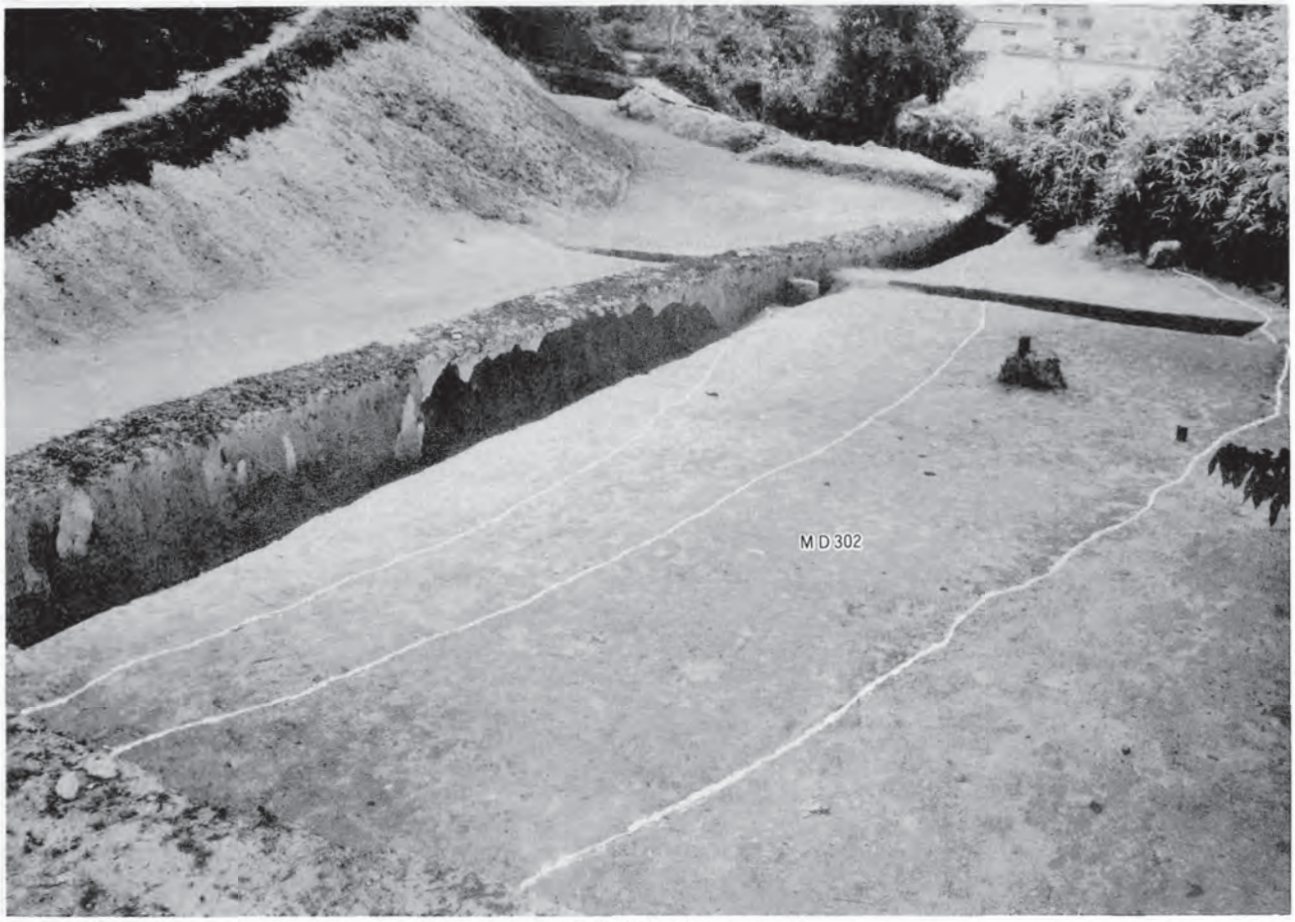


Photo.30　　3F区南半部（北西より）

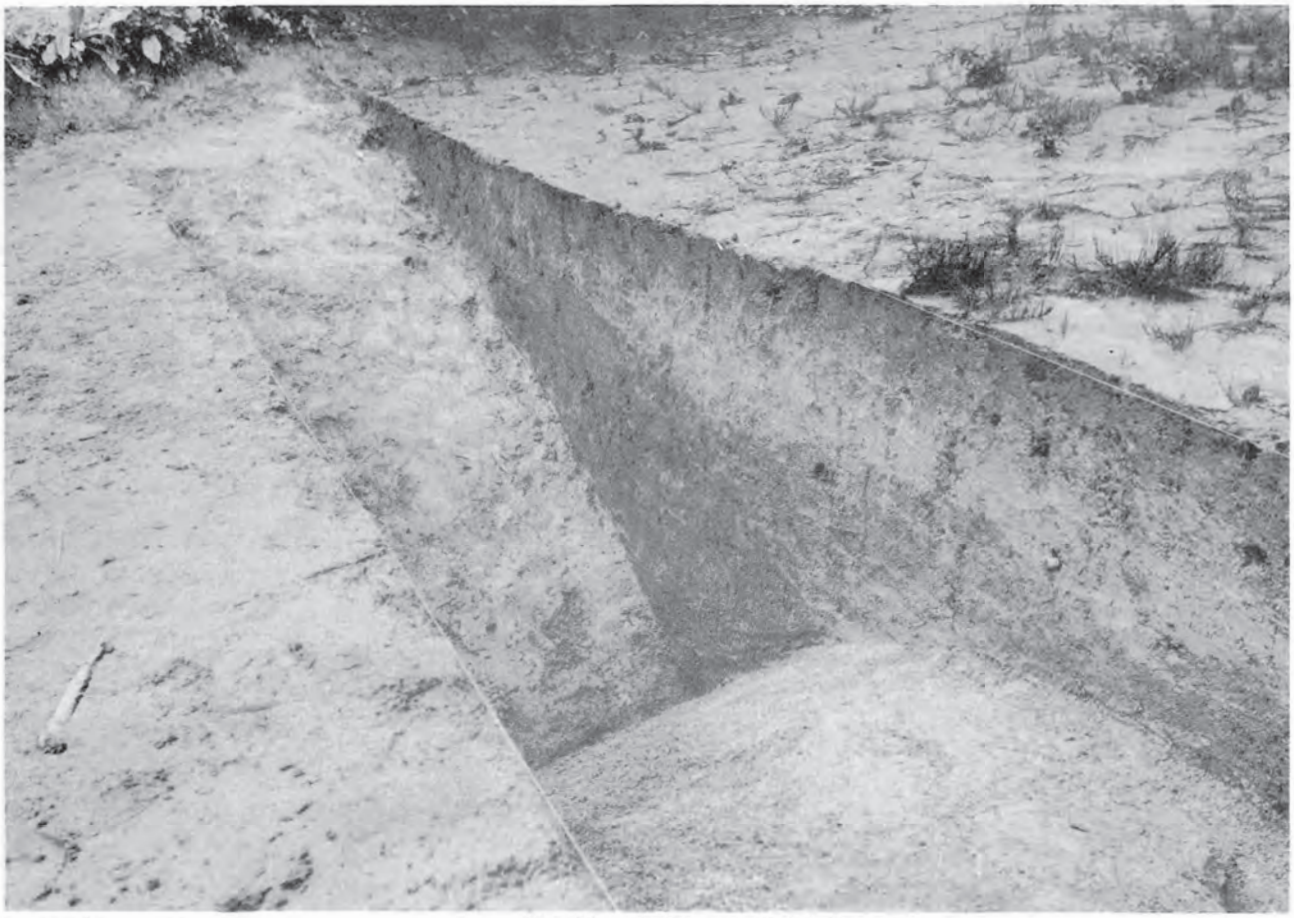


Photo.31　　MD302 セクション8（南東より）

(2) 建 物 跡

6Ｆ区のほぼ中央に南北約８ｍ、東西約20ｍの範囲にわたって整地部が見られ、ここに館に伴う建物跡が検出された。約6°の傾斜で南に下る緩やかな斜面を切って平担面を作り出しており、整地部北側では80cmほど切り下げている。切り土は南斜面へ盛っているが、建物跡は盛土の範囲には及んでいない。南斜面に盛られた削平土は、５－６Ｆセクション**(Fig.15)** で確認しているが、Ｍ層では暗褐色土と真砂土を混ずる黄褐色土層が互層を成しており、斜面の上方から下方へ順次排土した過程が明良に観察される。この上のＬ層は黄褐色土で、整地部埋没後の堆積である。 **整地部**

整地部には、東西棟・南北棟の２棟が隣り合って検出されている。東側の比較的大きな建物跡がＭＢ601、この西隣りの南北棟がＭＢ602である。

MB601建物跡

東西桁行12.44ｍ(2.06＋0.90＋2.16＋2.02＋2.05＋2.10＋1.15) 7間、南北梁行6.06ｍ(1.06＋1.86＋2.04＋1.10) ４間の建物で、北側に廂あるいは縁が付いている。柱穴は全部で67ヶ所検出されており、建物北側部分で柱穴の切り合いが見られ、二時期の重複が確認されている。新旧関係は建物最北縁の柱列が古く（Ⅰ期）、ここから南東に30～50cmの位置に据え変えた柱が最終期（Ⅱ期）のものである。 **規模** **重複**

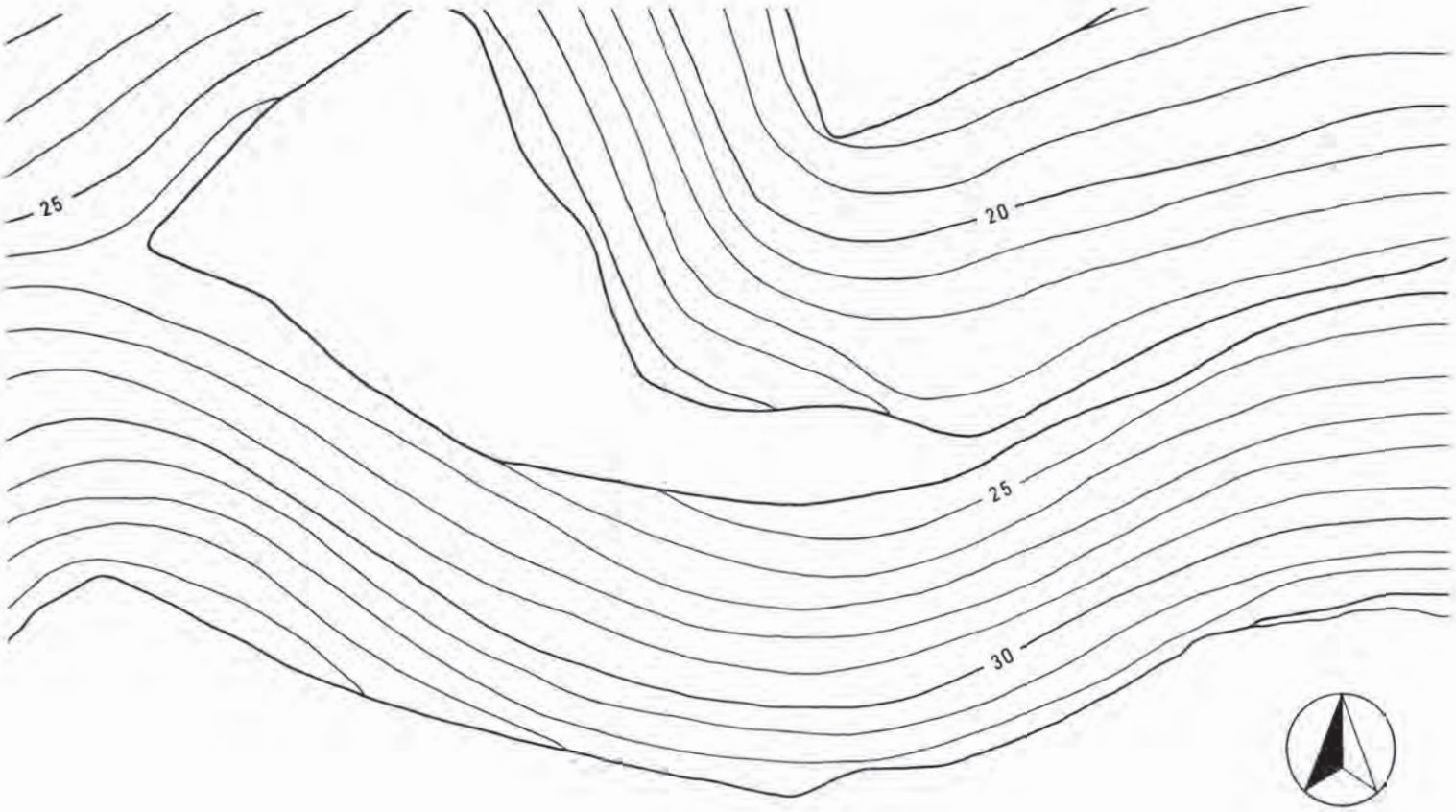
建物跡の北東角には、東西2.1ｍ、南北1.1ｍ、深さ70cmほどの長方形の掘り込みが見られる。また北東には、南北1.1ｍ、東西0.9ｍ、深さ20cmほどの隋円形の土拡(ＭＰ603)があり、この底面からはほぼ完形の天目茶碗２個体、炭化した木製品などが出土している。 **遺物**

建物跡に伴う遺物は、土坑ＭＰ603から出土した天目茶碗等の他に、柱穴検出面で青磁が出土している。**Fig.19－４**は青磁輪花皿で口経11.4、器高2.8、高台径5.4、高台高さ0.5cmを計る。 **青磁**

胎土は比較的緻密であるが、一部に層状の細孔・空隙が見られ、色調は灰白色(Hue N7/0)である。器面は明緑灰色(10ＧＹ7/1) ～淡緑色を呈し、光沢は失われている。粗い貫入が見られ釉は一部で発泡またはひだ状の粗面となっている。炭化物が付着しており、二次的に火を受けている可能性がある。15～16世紀の中国明代の船載青磁と見られる※。**Fig.19－５**は青磁花器の底部破片と考えられ、釉は明緑灰色(7.5ＧＹ8/1～7/1)を呈し、貫入が見られ光沢がある。胎土は緻密であり、色調は灰色(7.5Y7/1)である。

土坑ＭＰ603の底面からは天目茶碗のほぼ完形品２個体、皿状の炭化木製品、釘状の鉄製品が出土している。天目茶碗は土坑の底面に伏せられた状態で出土した。ＭＰ 603－№１は口径11.3cm、器高5.6cm、底径4.3cmで、釉は茶褐色から黒色を呈し貫入が見られ、器面は光沢を失っている部分が多い。胎土は黒色細砂を少量含み灰白色(5Y8/1)で比較的緻密である。破口のほとんどにカーボンが付着しており、二次的に火を受けている。15世紀後半以降の美濃の産と見られる※。ＭＰ603－№２は口径11.6cm、器高6.2cm、底径4.2cmで、釉は黒～黒褐色(10ＹＲ2/1～3/1)を呈し、器面は半光沢がある。胎土は灰白色(7.5Y8/2)で№１の天目茶碗よりやや粗いが類似している。破口はほとんどが黒変している。この個体には修復した痕跡があり、10片に割れた破片は粘着性の強い物質で接合されており、破口には黒色の付着物が見られる。**(Photo.44、45)** **天目茶碗**

※遺物の年代等については、岩手県埋蔵文化財センター昆野靖氏に託し三上次男氏の御教示を得たものである。



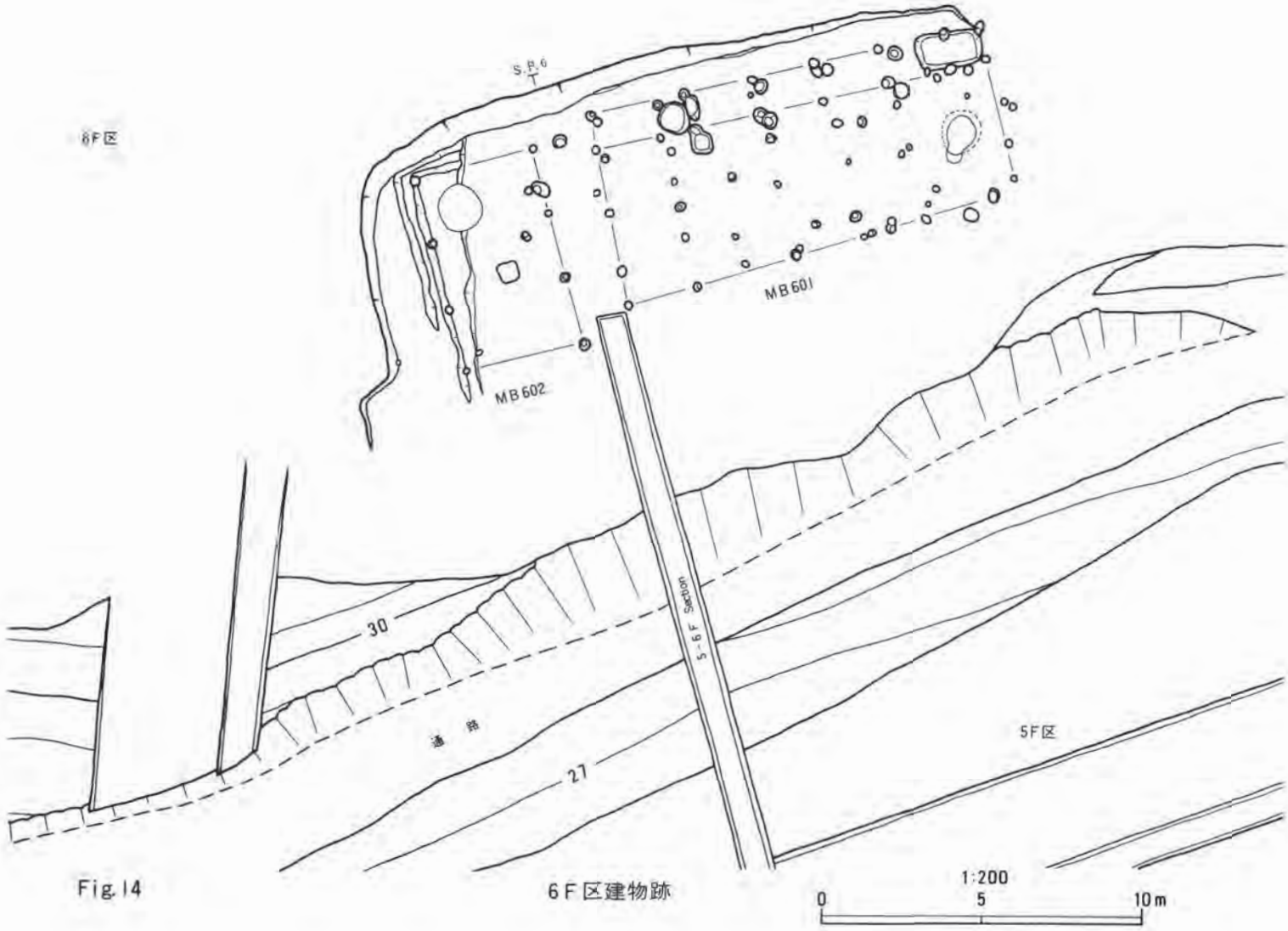


Fig.14　6F区建物跡

Fig.19－3は器台の付いた皿状の木製品で、器台径6.4cm、器台高0.6cm、器高、口径は不明である。完全に炭化しており、器面には付着物が見られ塗り物と考えられる。器厚はほぼ6mmで、口縁に近くなるにつれて薄くなり現存部で約4mmとなる。 **木製品**

Fig.19－8は長さ13.1cmの釘状の鉄製品で、頭部は14mmほどL字状に曲げられており先端部は尖鋭で胴は約9mmの角状である。 **鉄製品**

MB602建物跡

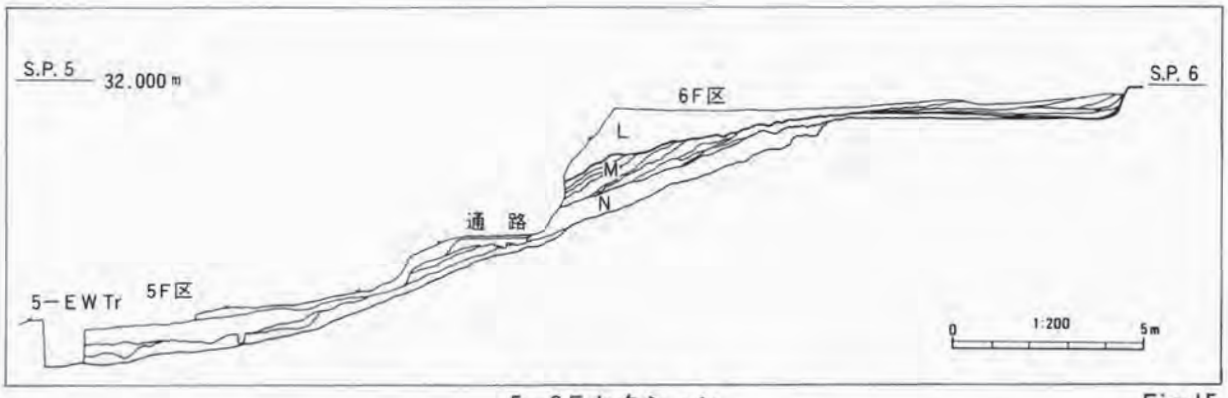
MB601の西隣りに接っして建てられた南北棟である。南北桁行が東側で6.22m(2.06+2.06+2.10)、西側で6.20m(2.10+2.12+1.98)の3間、東西梁行が3.82mの1間で、柱穴に重複は無く、建物の北と西には二条の溝が伴っている。柱筋のやや外側に沿って、巾約30cm、深さ10cm前後の溝があり、建物の南西角柱の南約1mで終っている。これの外側40～50cmに巾約30cm、深さ7～5cmの溝が平行してあり、北側では整地部北端に沿っている。南側では内側の溝より2.5mほど短く建物の西縁全体には及んでいない。建物のほぼ中央に約60cm方形の炉が伴っている。炉の掘り込みは3～5cmで、焼土は最も厚い部分で約8cmほどあり、かなり使い込まれたものと考えられる。なおこの建物に伴う遺物の出土は無かった。 **規模**

建物の生活面を掘り下げたところ、西側の一部を除き約30cmほど低い面が見られ、構築時の整地地業の時期差が認められた。つまり当初の整地部はMB602の西側柱の東に見られる段差までの範囲であり、その後最終期の範囲まで整地部を拡張しMB602を構築している。 **構築**

MB602で見られる整地部の拡張からみると、建物の構築は次のような過程をたどっていると考えられる。

整地部の造成 ⟶ MB601(I期)の構築 ⟶ 整地部の拡張 ⟶ MB602の構築 ⟶ 廃絶
MB601(II期)の構築 ⟶ 廃絶

建物跡の柱間は、多様であるが最も多く見られるのが1.98～2.10mで、一尺30.3cmで計算すると6.535～6.931尺となる。またMB602の梁行一間の柱間は3.82mで12.607尺、桁行6.22mは20.528尺となる。



5－6Fセクション Fig.15

その他の遺物　主郭(６Ｆ区)から出土した遺物の点数は少く、前述した建物跡に伴う遺物の他には以下の2点だけである。**Photo.47－1**はＭＢ601建物跡の南、Ｌ層上位より出土した青磁で、破片のため全体の器型は不明である。釉は明緑灰色(10GＹ7/1)を呈し、0.5～0.8㎜の厚でかかっており貫入が見られる。器面は光沢があり、胎土は黒色の細砂を少量含み灰白色(5Ｙ7/1)を呈し3.5～4.5㎜の器厚を計る。ＭＢ601建物跡出土の青磁輪花皿とは、胎土の色調はこの青磁片の方が白っぽいが胎土の状態、釉の色は類似している。**Fig.19－10**は刀のなかご部分で現存長144、巾19～30、厚さ７～５㎜で直径５～６㎜の目釘穴が２ヶ所に見られる。銘は見られない。

整地部の埋土　整地部の埋土は下図の２本のセクションベルトで観察している。南北トレンチは整地部北端から５Ｆ区の5－ＥＷ Tr.まで斜面をたち割って設定しており、南半では前述のとおり、削平土を南斜面へ盛っている状態が観察されている。**(Fig.15)** 下図Ｎ－Ｓセクションはこれの整地部平担面北半の埋土状況である。Ｌ層は前述の整地部埋没後の堆積層で、Ｓ～Ｖ層が以下に記す整地部埋土である。埋土は堆積状況から大別二分される。つまりＳ層とＴ～Ｖ層である。埋土状況の写真 **(Photo.36)** からもわかるとおり、Ｓ層には拳大から小頭大のかなり堅い地山(中風化花崗岩)ブロックが混入しており、明らかに人為的に埋められた層相を示している。しかも混入土が真砂土(強風化花崗岩)ではないことから、表土下の基盤層を削っていることがわかる。Ｓ層は整地部の北西を中心に広がっており、相当量の地山の掘削が行われたことになる。整地部の周辺では土取りをしたと考えられる土坑等は検出されておらず、これらの地山ブロックは整地部周辺を面的に削平し、整地部を埋めたものと考えられる。しかもＥ－Ｗセクションで見られるように、Ｓ層の堆積はＭＢ602の生活面に接っしている部分もあり、ＭＢ602建物跡の廃絶の直後であると考えられる。

Ｔ層は真砂土砂粒を混ずる明褐色～暗褐色の土層で、いずれも層状あるいは薄層状の堆積を

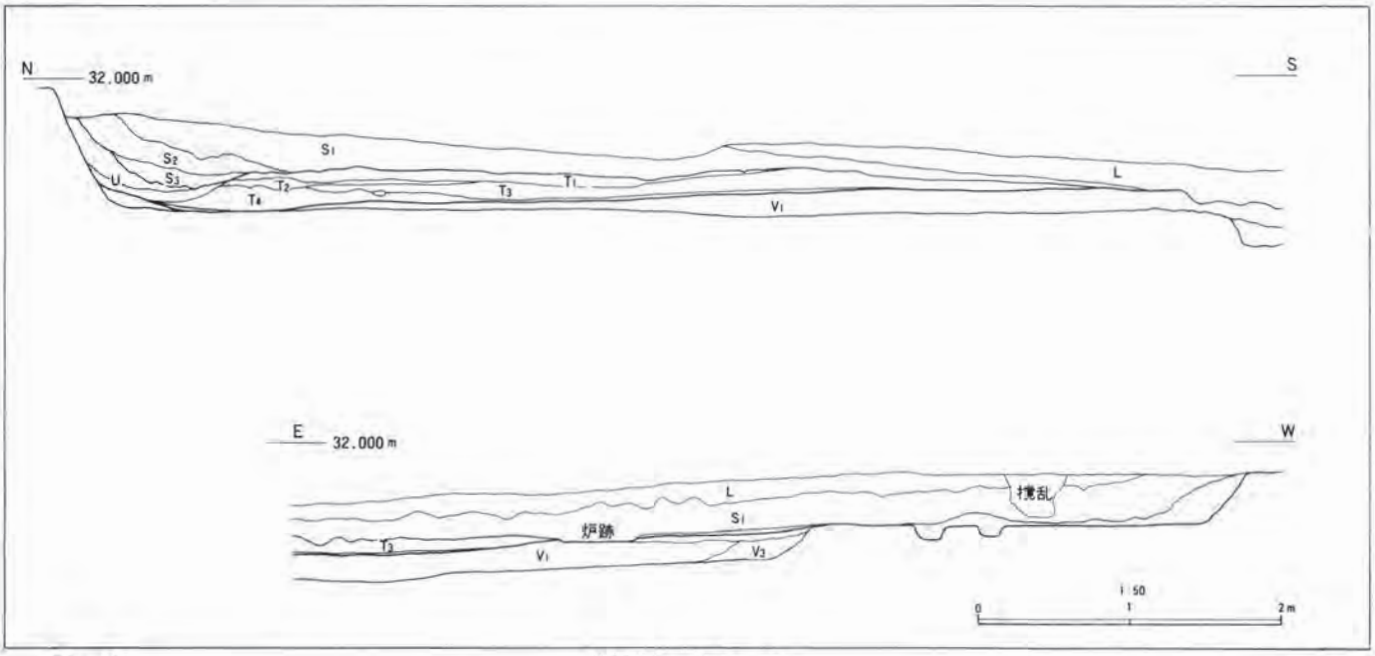
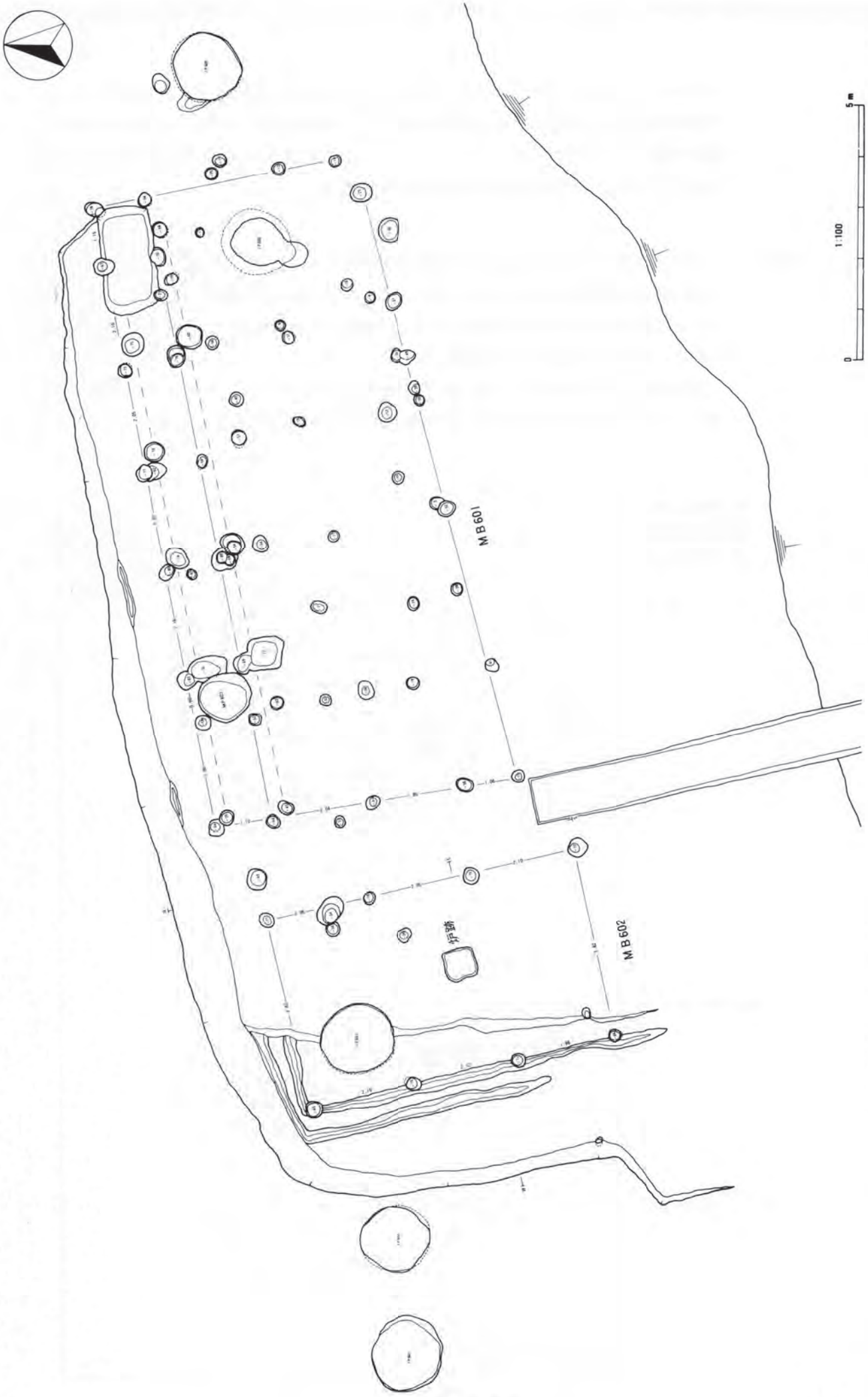


Fig.16　整地部セクション



MB601・602建物跡

Fig.17

している。T_4層はE－Wセクションで見られるようにMB602建物跡の生活面を構成している。V層は黒褐色土で、前述のとおり整地部を拡張しMB602を構築した際に、旧整地部の一段低い部分を埋めているもので、E－WセクションのV3層西の立ち上がりが旧整地部の範囲で、U層西の立ち上がりが拡張時(最終期)の整地部の範囲となる。

MP603　MB601に伴う土坑で、前述の天目茶碗等の遺物が出土している。周囲の柱穴埋土から見て、MB601のII期(最終期)に伴うものと考えられる。埋土はB層が木炭、炭化物等を含む一括埋土で、A層は真砂土を混ずる明褐色土である。埋土に木炭が見られるが、土坑底面に焼土は見られず、土坑内で火を焚いた痕跡は見られない。

遺物の出土状況からみて、天目茶碗等は意図的な埋納と考えられ、しかもほぼ完形品を残していることから、何らかの儀礼的な意識の存在がその背景にあったのではないかと考えられる。

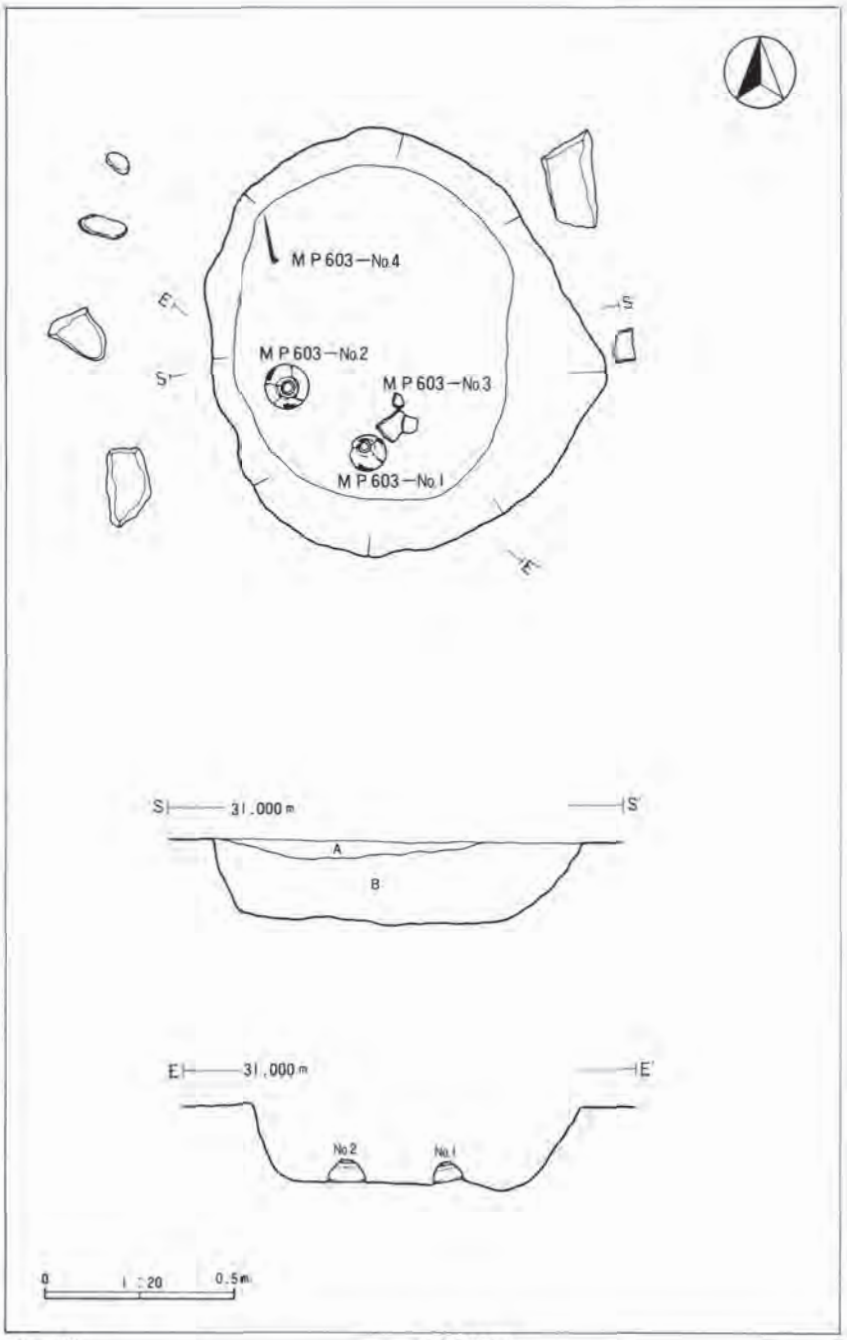
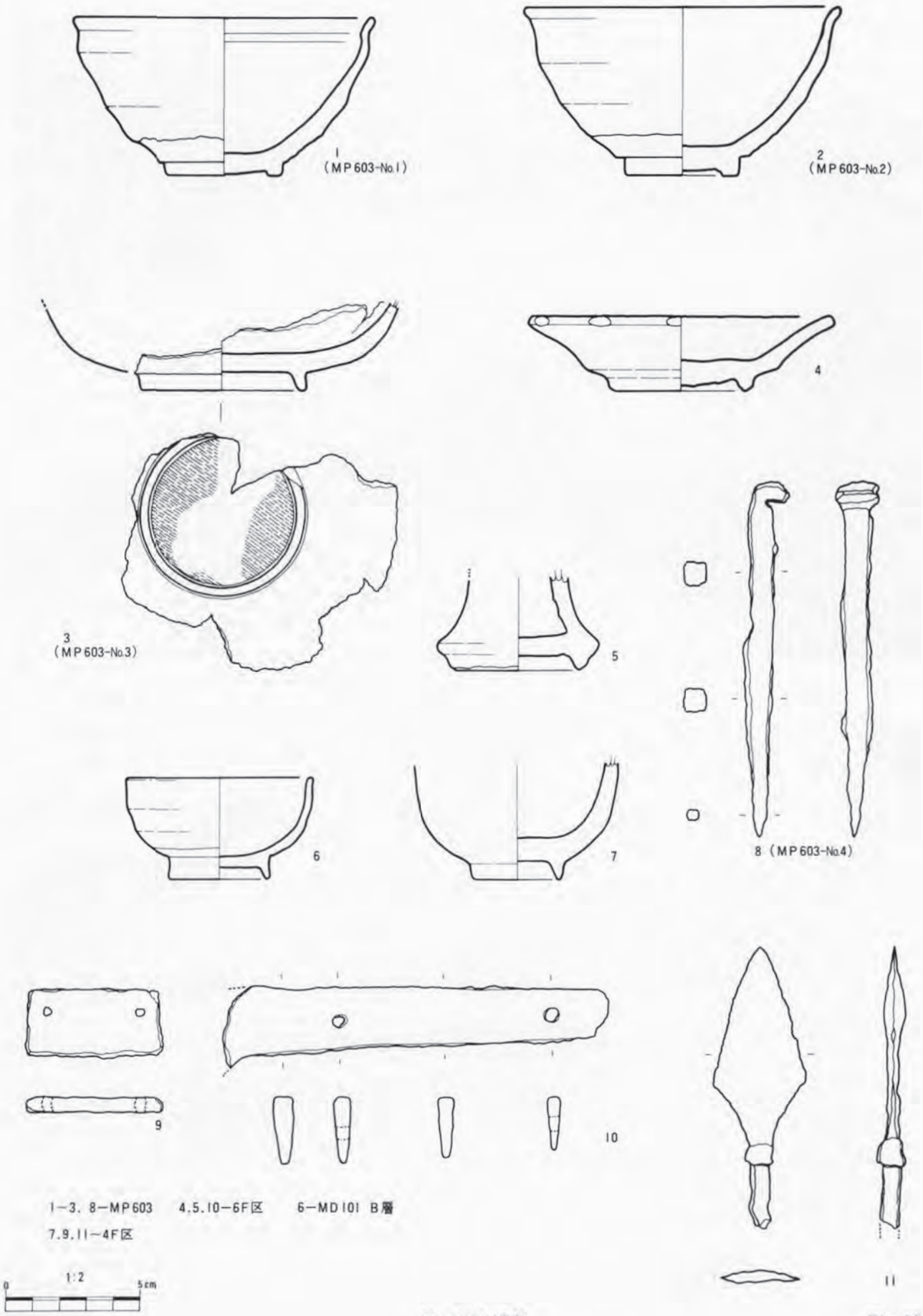


Fig.18　MP603



館に伴う遺物

Fig.19

Photo.32　　6F区整地部及び建物跡（南東より）

Photo.33　　建物跡MB601、602（西より）

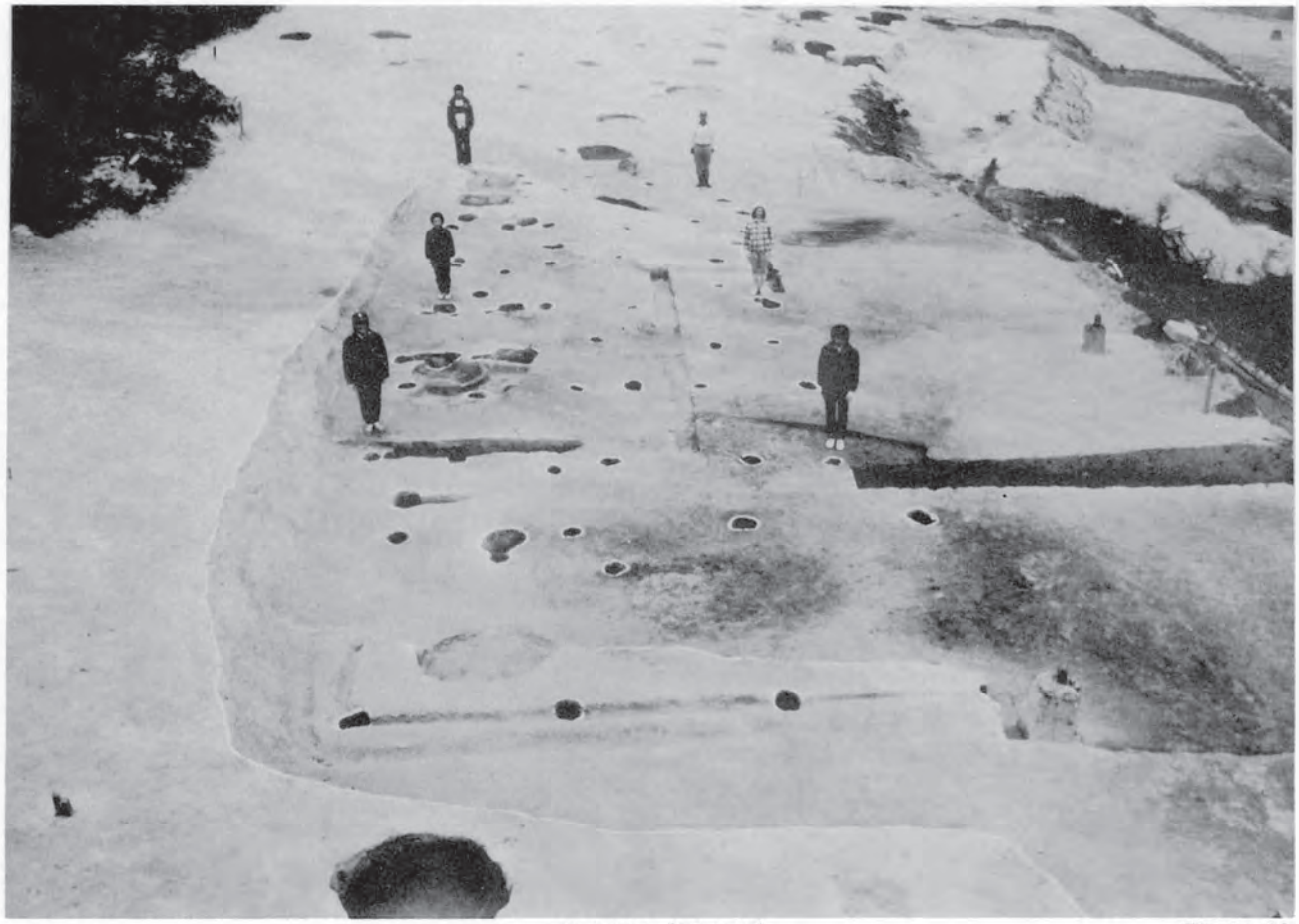
建物跡（東より）　Photo. 34

建物跡（南東より）　Photo. 35

Photo.36　　整地部セクション（北半）

Photo.37　　整地部セクション（南半）

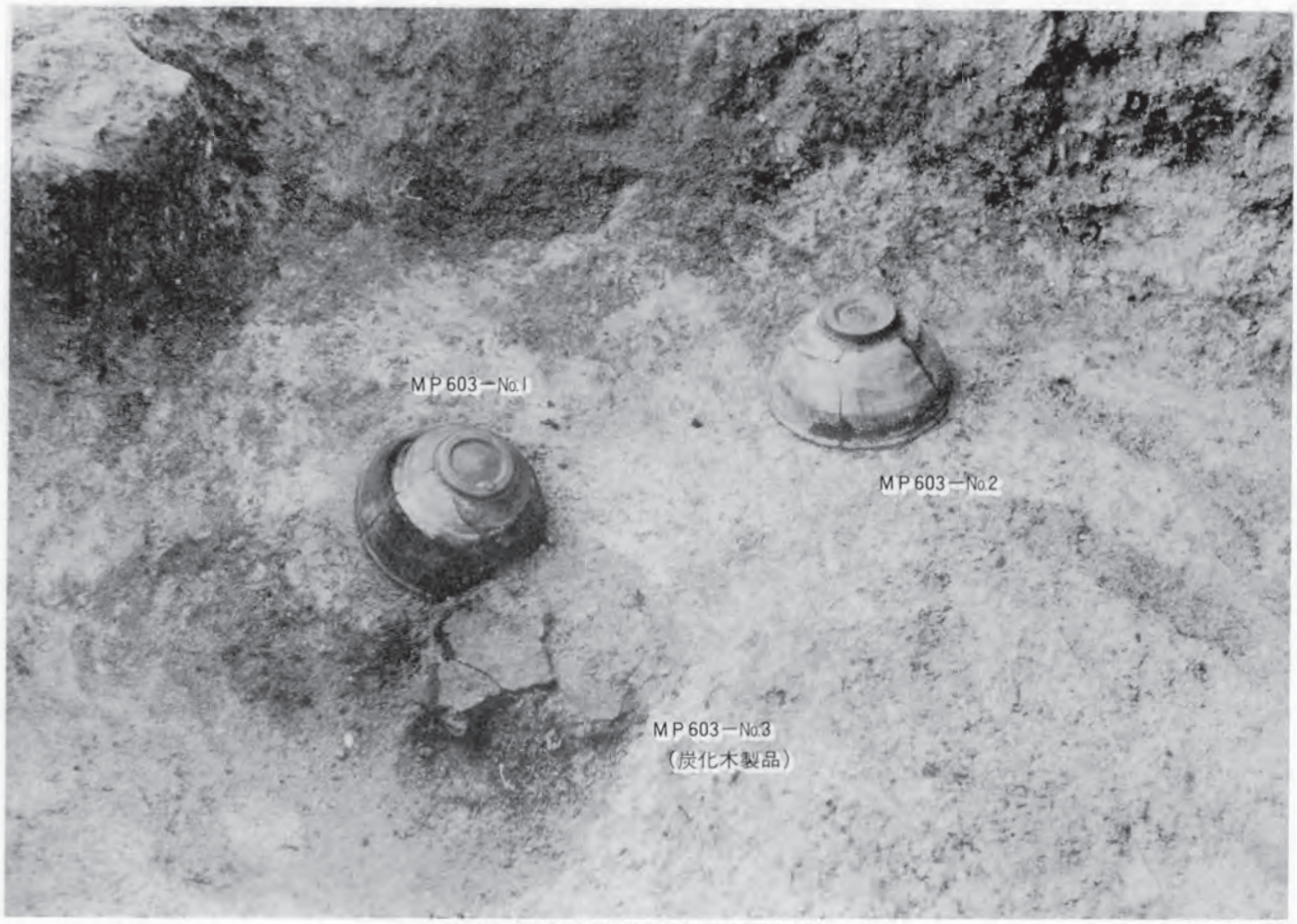
M B 602（西より）　Photo. 38



M B 601（西より）　Photo. 39

Photo.40　　ＭＰ603（北東より）

Photo.41　　ＭＰ603 埋土状況（南東より）



天目茶碗・炭化木製品出土状況（北東より）　Photo.42

天目茶碗・炭化木製品出土状況（南より）　Photo.43

Photo. 44
MP 603—No. 1
(Scale=1/2)

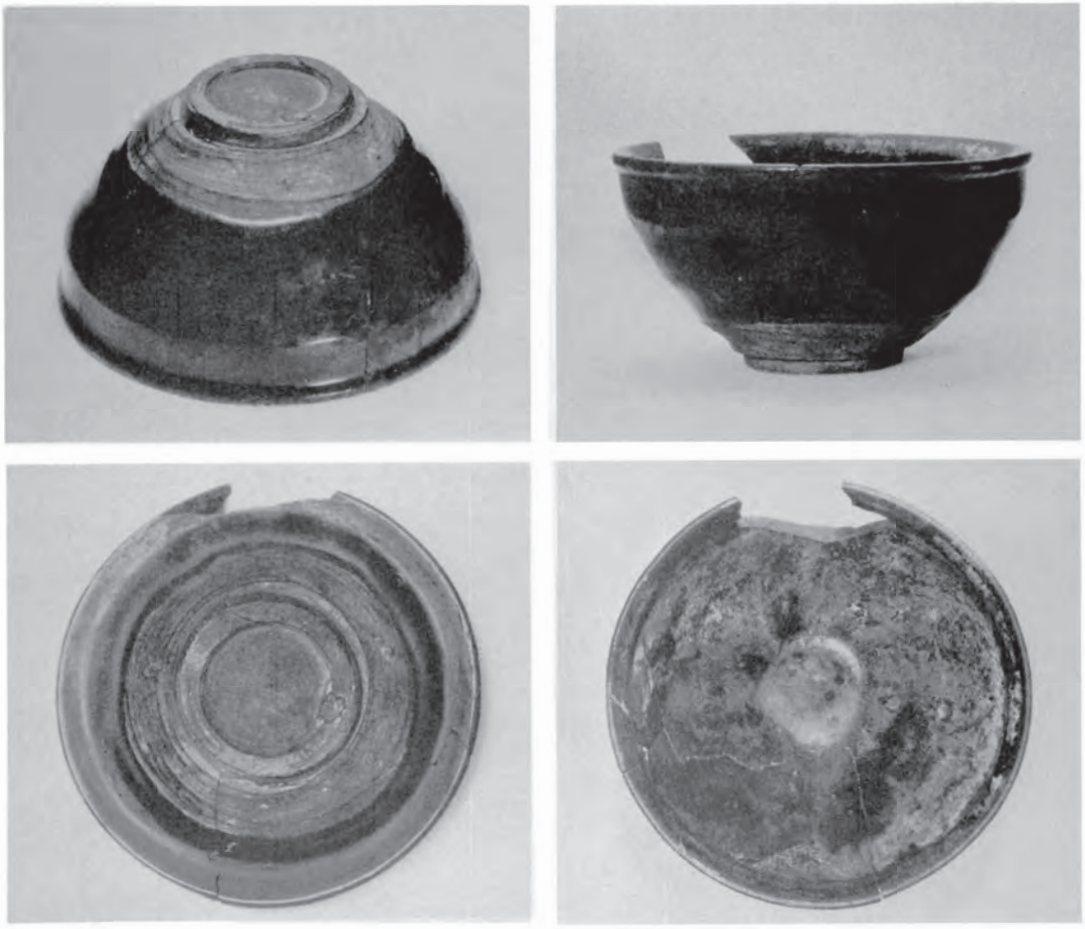
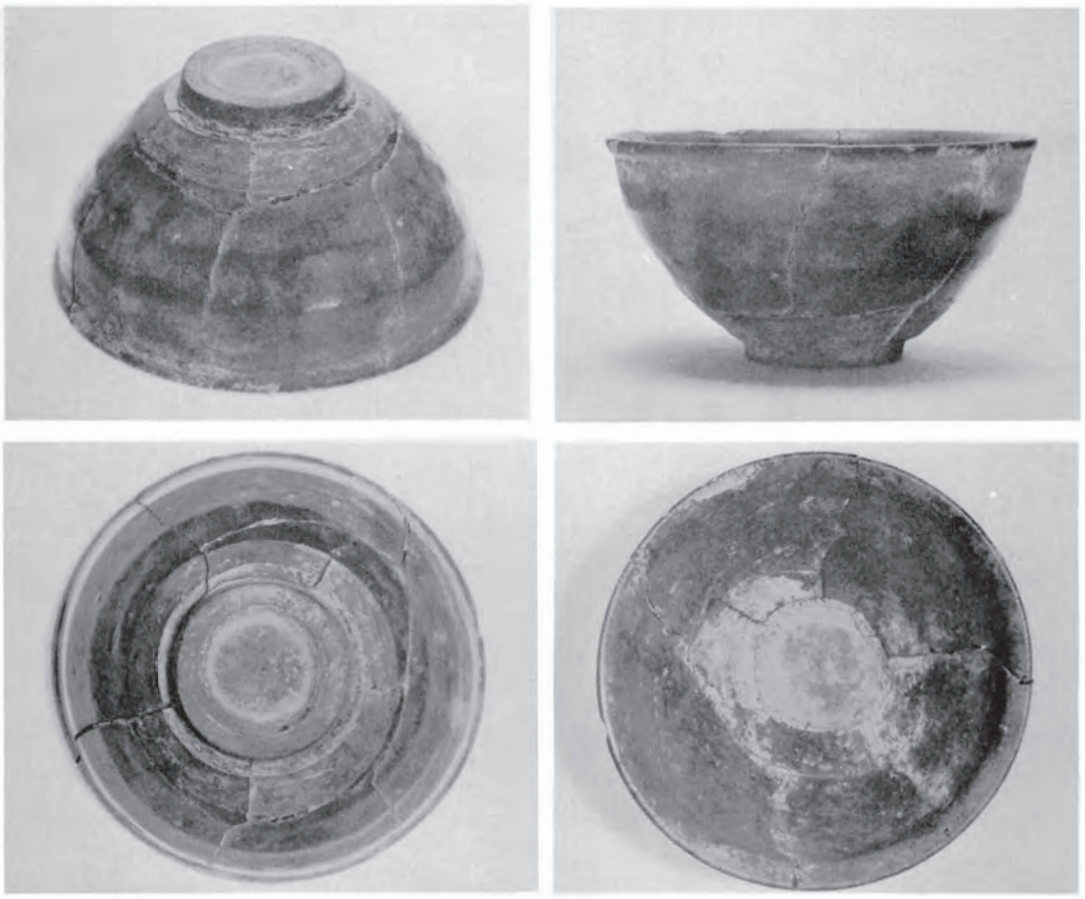
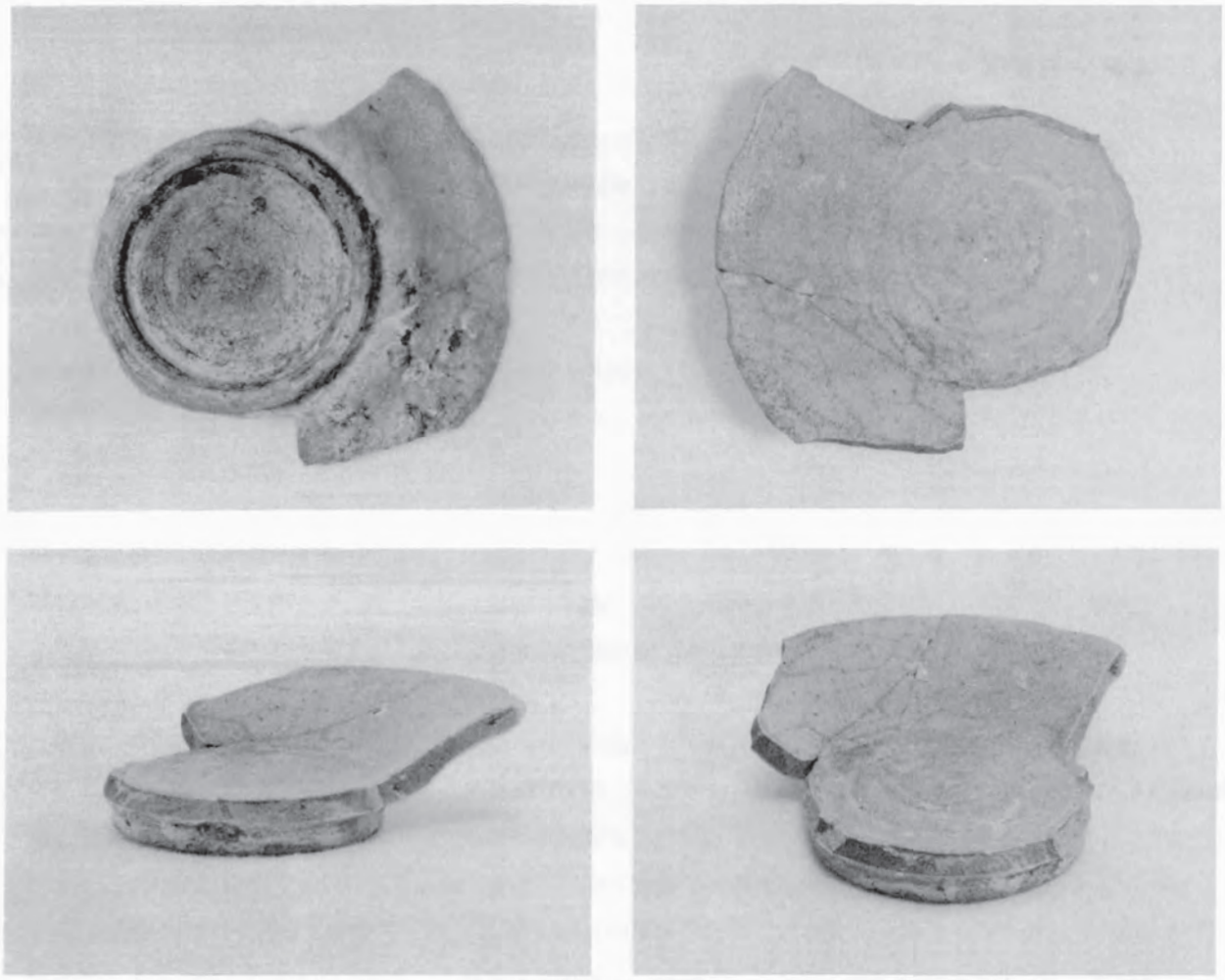
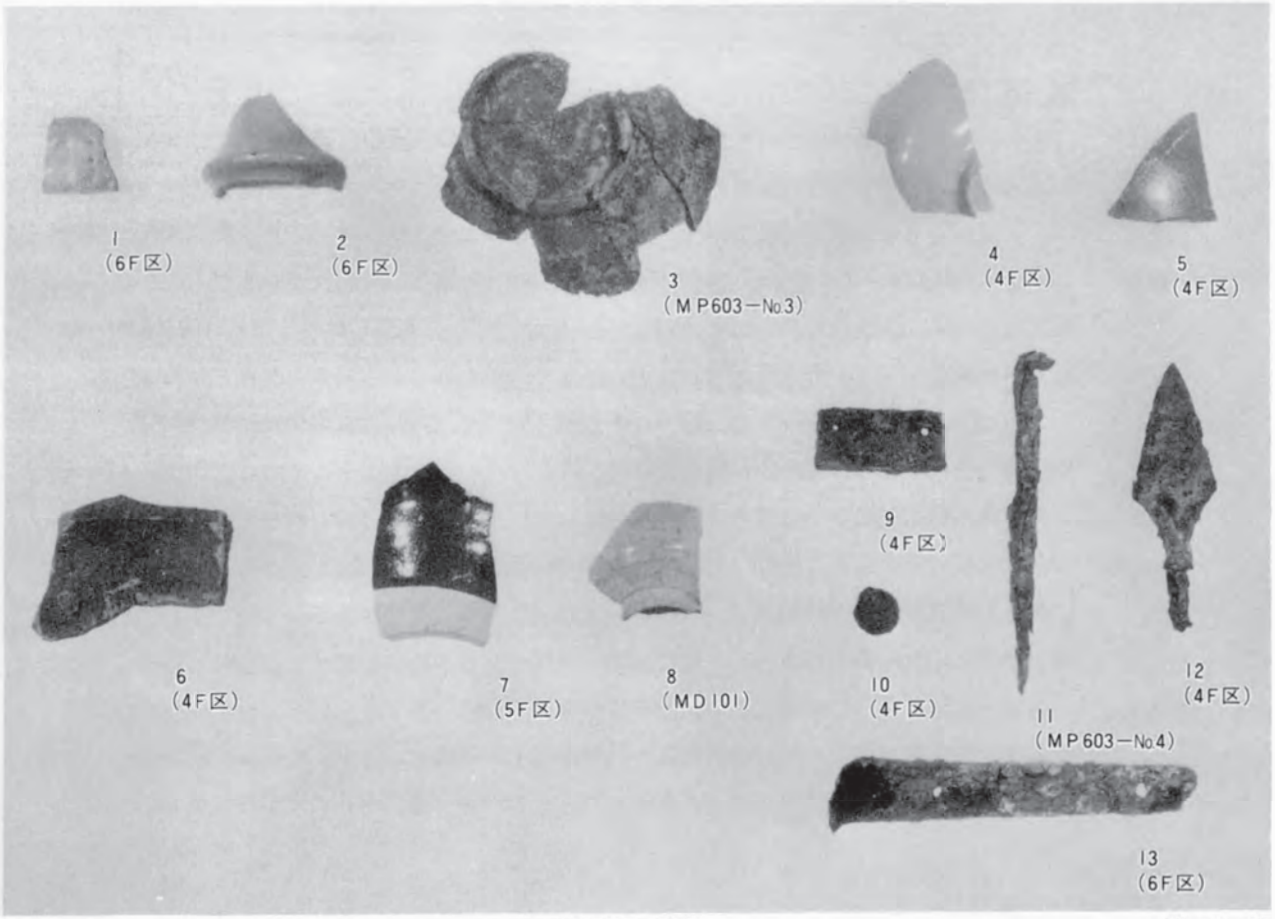


Photo. 45
MP 603—No. 2
(Scale=1/2)





青磁輪花皿（ＭＢ601出土）　(Scale＝2/3)　Photo.46



館に伴う遺物　Photo.47

3．4F・5F区

建物跡の検出された6F区の南斜面には東西に細長い二段の平場が見られる。各々の平場は3mほどの比高で段状になっており、南縁は急峻な斜面に続き館の裾野に至る。上位の平場（5F区）は、巾10～13m、長さ70mほどで平場中央の標高が26m、下位の平場（4F区）は巾10～12m、長さ65mほどで、平場中央の標高が23mほどで、いずれも東側が高く、平場東半では西に下る緩やかな斜面になっている。

調査は各々の平場を縦断する巾4mのトレンチを設定し、遺構の確認を行い、土層の堆積状況はサブトレンチで観察した。また6～4Fを南北に横断するトレンチ（40Line Tr.）で南斜面の土層堆積状況を確認した。

(1) 5F区

遺構　東半はほぼ全面、西半はトレンチ内で遺構の確認を行ったが、表土下及びA層中で建物跡等の中世の遺構は検出されなかった。東端部では6F区に続く縄文時代のフラスコ状ピットが1基確認されている。

遺物　5F区西端のA層上面からは天目茶碗の破片が出土している。完形の$\frac{1}{5}$ほどの破片で底部、

Photo.47－7　口縁を欠いており計測値は不詳である。釉はほぼ黒色を呈し、釉が薄い部分では暗赤褐色である。また数ヶ所ではあるが、禾目状の赤褐色釉(5YR5/8)の線状の流下が見られる。器面は発泡状の細いくぼみが見られるが、光沢は保っている。胎土は灰白～淡黄色(7.5Y8/2)でやや粗く黒色の細砂を少量含む。前述のMP603出土の天目茶碗よりは胎土は粗く、黄色が強い。

堆積土　A層は地山真砂土を混ずる明褐色土、B層はやや粘性のある黒褐色土で、いずれも自然堆積層である。B層中の一部に人為的な土層の変化が見られたが明確に把握するに至らなかった。

(2) 4F区

5F区と同様に遺構の検出を行ったがE層中では館に伴う遺構は確認されなかった。トレンチの西端及び東区でフラスコ状ピットが検出されている。

遺物　4F区からは青磁及び鉄器が出土している。これらは全て表土ないしE層中から出土したも

青磁　のである。**Fig.19－7**は青磁碗で釉は明緑灰色(5G7/)を呈し、0.7～1.0mmと厚く施されている。貫入は見られず器面は光沢がある。胎土は灰白色(2.5Y8/1)を呈し緻密である。**Photo.47－5**はオリーブ褐色(2.5Y4/4)を呈し、1mmほどの厚さで施釉されている。貫入が見られ釉は発泡しているが器面は平滑で光沢がある。胎土は灰白色(10Y8/1)で混入物は見られず緻密である。胎土厚は4～5mmである。またこの他に擂鉢の口縁部近くの破片も出土している。**(Photo.47－6)**

鉄器　**Fig.19－11**は銛あるいは鎗先で茎部が欠損している。現存長115mm、箭頭部長80mm、鋒巾35mm、箭頭部刃線はほぼ直状で約40°に開き、茎は7mmほどの角状である。

Fig.19－9は板状の鉄製品で、長さ51mm、巾25mmの長方形で厚さはほぼ4mmである。2ヶ所に径3mmほどの孔が見られる。この他に直径16～17mm、重さ約19g球状の鉄製品も出土している。

堆積土　E層は真砂土を含む明褐色土で、F層は褐色～黒褐色土層である。トレンチの西側では表土下はすぐ地山で、平場中央の谷状の窪みに黒褐色土が堆積している。F層には縄文時代の遺物が含まれており、一部に落ち込みが見られたがその内容を確認するには至らなかった。

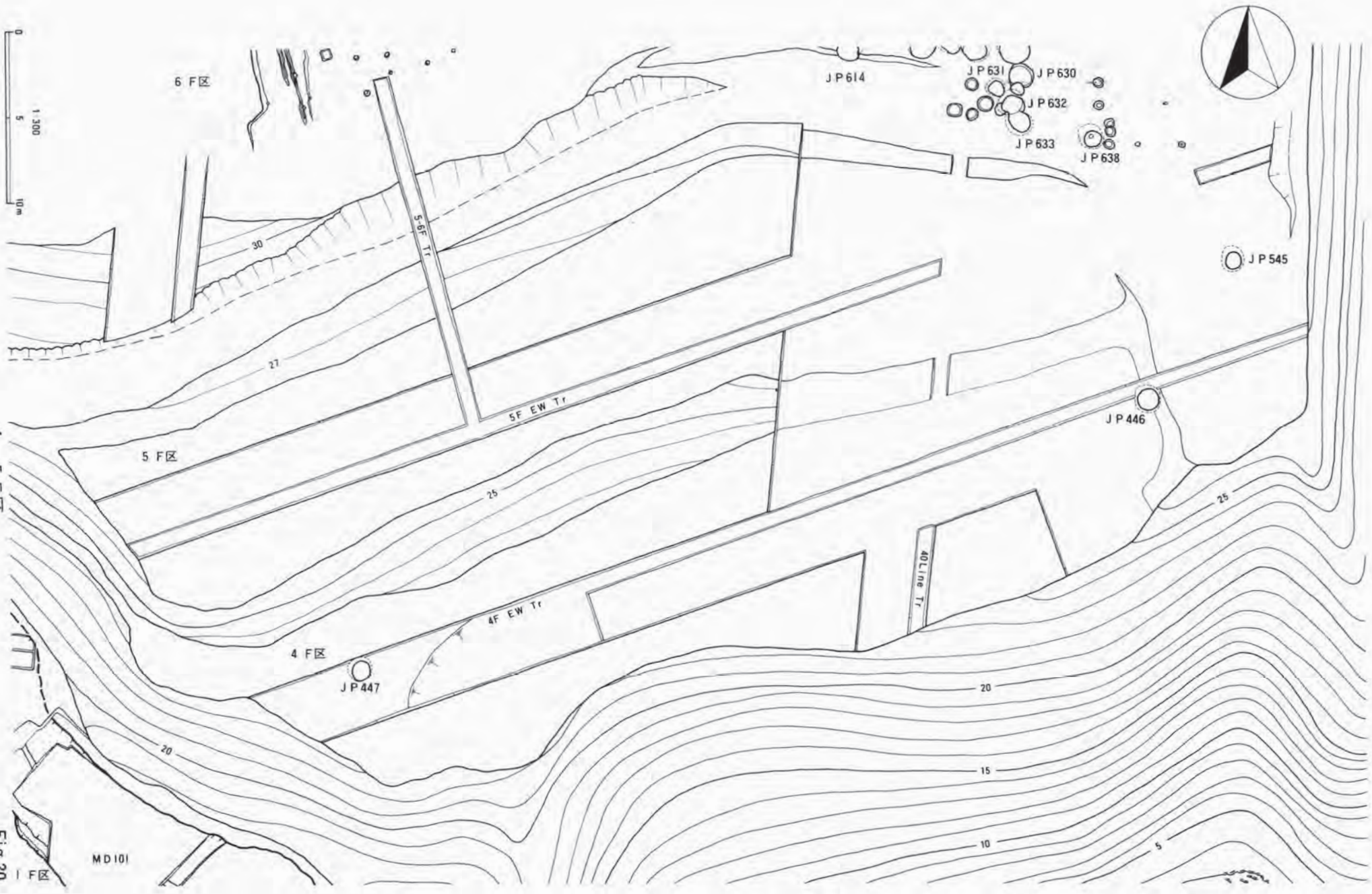

0
5
10m
1:300
6 F区
5 F区
4 F区
1 F区
5-6F Tr
5F EW Tr
4F EW Tr
40Line Tr
MD101
JP614
JP631
JP630
JP632
JP633
JP638
JP545
JP446
JP447
30
27
25
20
15
10
5

Fig.20 4、5F区

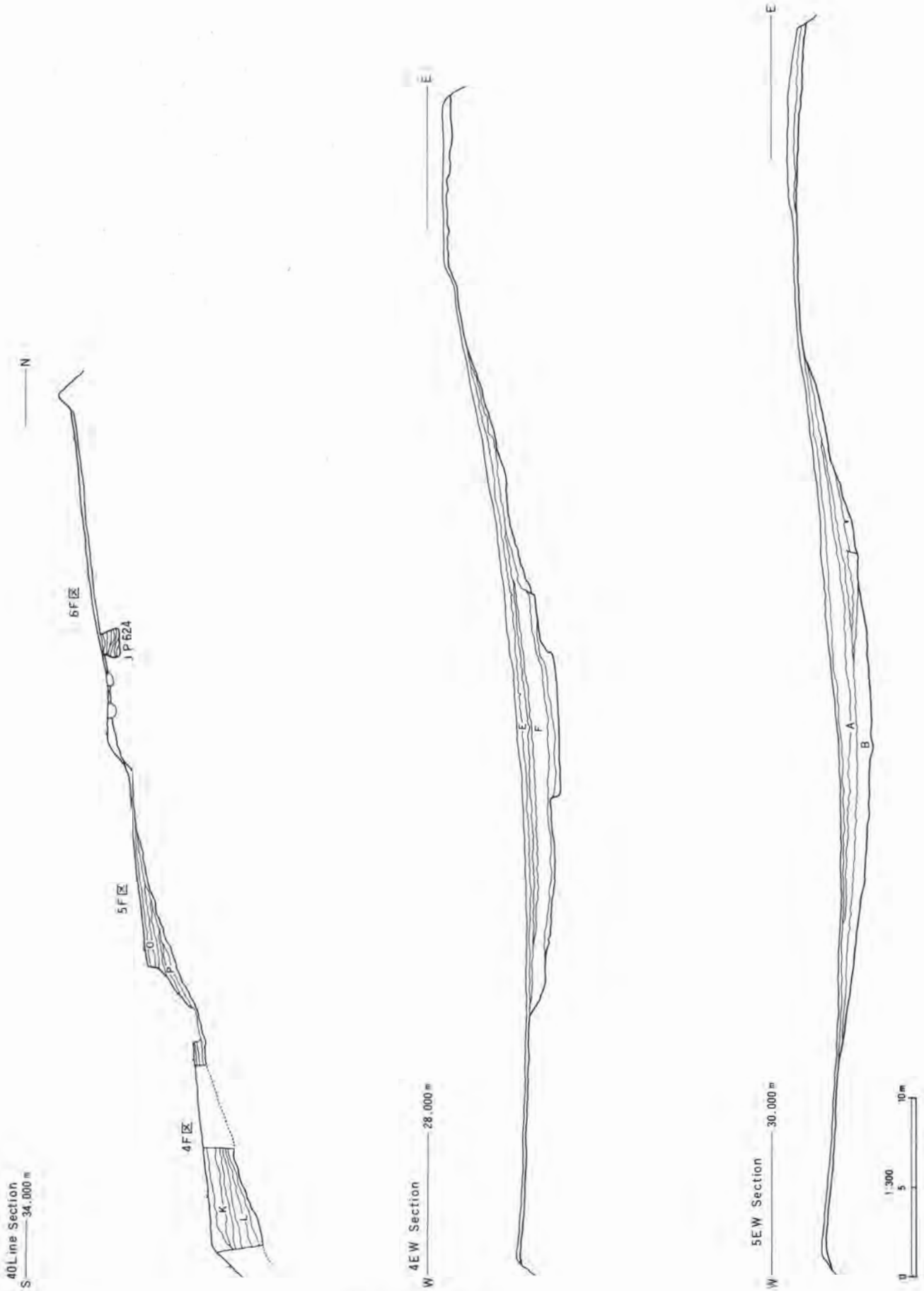
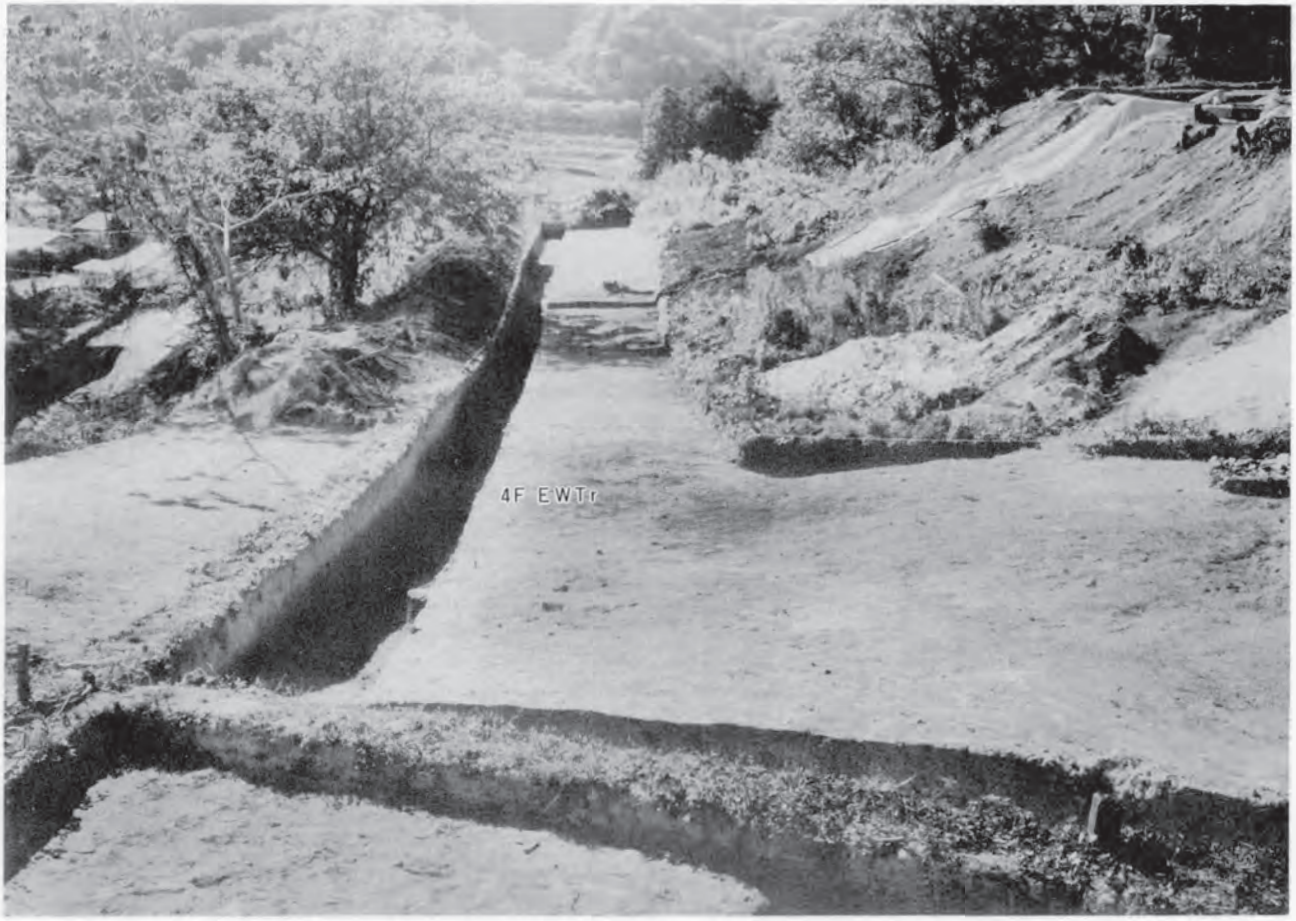
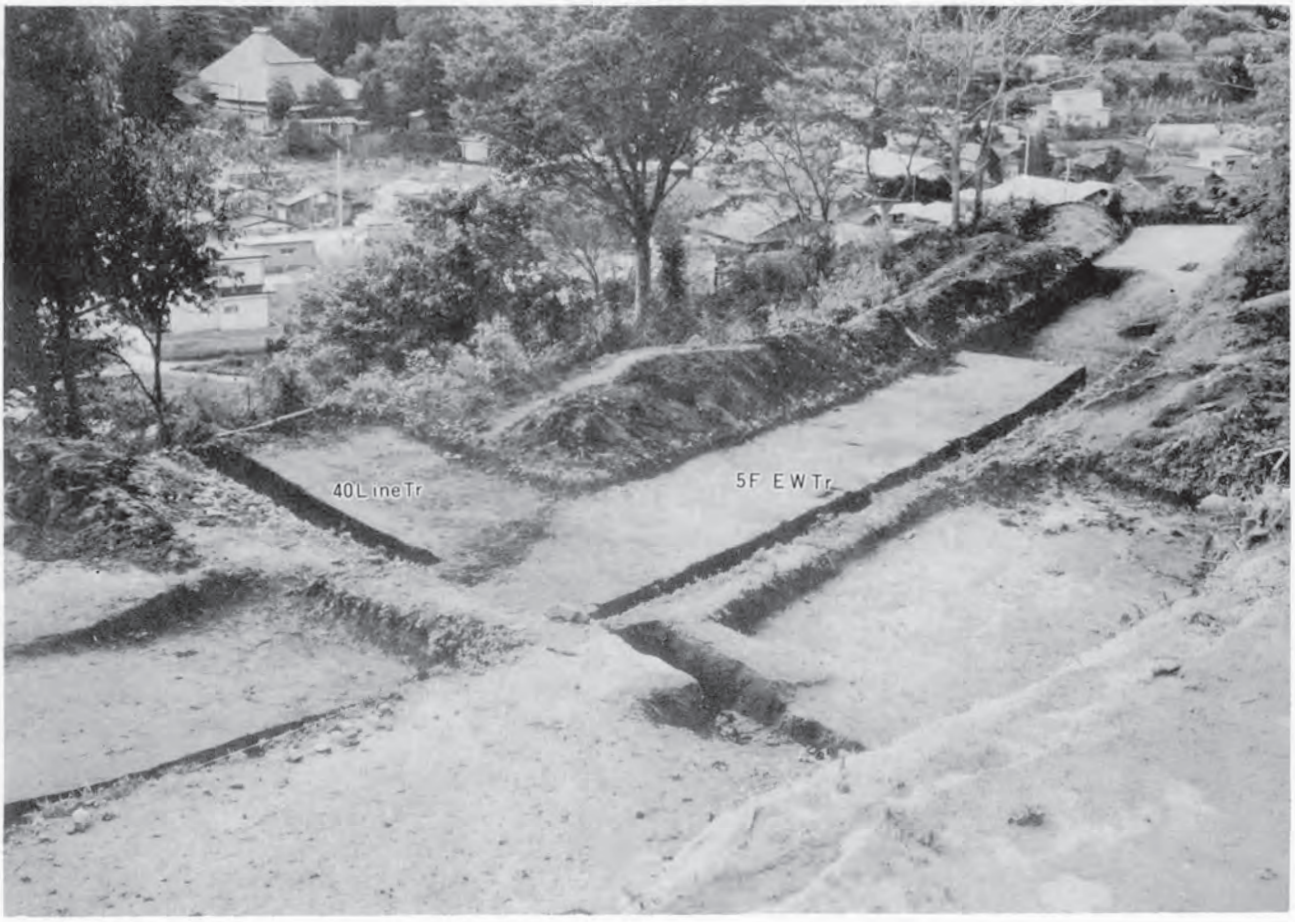


Fig.21

4、5F区セクション



4F区（東より）　Photo.48



5F区（北東より）　Photo.49

4．縄文時代の遺構と遺物

遺構　縄文時代の遺構は、6Ｆ区の東半を中心に多数のフラスコ状ピットが検出されており、総数は47基である。6Ｆ区の東半は旧地表から60～80cmほど削平されており、特に北東部でこれが著しく、かろうじてピットの底面付近のみが遺存しているものも多かった。**(Fig.22)**

ピットは重複しているものも見られ、分布も6Ｆ区北東部にほぼ80％が集中している。フラスコ状ピットは、底面中央に柱穴状の小ピットを持つものと、これを有しない二つのタイプが見られる。ピットの深さについては表土が削平されており遺構の掘り込み面から確認できたものがほとんど無いため、不明なものがほとんどであるが、最も深いものでは検出面から1.4ｍを計る。

底面の面積は最も広いもので2.78㎡、狭いものは0.68㎡と１㎡以下のものも見られる。多く見られるのは底面積1.23～2.0㎡(底面直径125～160cm）のもので、ここでの平均値は底面積1.51㎡、底面直径139cmである。

遺構埋土は、ピット底部付近の当初の埋没土が、中央部で盛り上がるというフラスコ状ピットの形状を反映した埋土状況が多く見られ、層相や層理面の状況から明らかに人為的な堆積状況を示すものや短時間に埋めもどしていると考えられるものは少い。ＪＰ633ではＢ層中にかなりの量の木炭を含む層が見られるが、この他のピットでは特徴的な混入物が含まれる埋土は見られなかった。

遺物　フラスコ状ピット及び４～６Ｆ区からは**Fig.27～30**に示す縄文時代の遺物が出土している。完形品は少ないが、縄文時代前期末、中期初頭及び中期末の遺物が多く見られる。Fig.27－３はＪＰ611から出土したものであるが、器高13.3cm、口径12.6cm、底径5.0cmを計る。口唇の一ヶ所に小隆起が付き、口縁部無文帯を沈線と円形刺突列で区画しており胴部は複節縄文を施した鉢型土器のほぼ完形品である。**Fig.27－7～10・20**は中期末葉の大木10式である。７～10は「Ｓ」状の無文帯とこの中にいわゆる「充塡縄文」を施しており、９・10では刺突が見られる。20は「Ｌ」字状の区画文が見られ端部に「ノ」の字状の隆線が付されている。

Fig.28－21～30は、4Ｆ区の東に検出されたＪＰ446から出土した土器である。前期末～中期初頭の大木６～７式の土器が出土している。**Fig.28－31～43、Fig.29－44～53**は４Ｆ区から出土した土器で、35～37は粘土紐を小波状に貼付しており前期の大木４式である。この他に大木６～７式に相当する土器も見られる。

Fig.29－54～59、Fig.30－60～66は、５Ｆ区から出土したもので、55～57、59には大木４式とみられる粘土紐の小波状の貼付文がみられる。60は肥厚した口縁をもち、この上に円形の刺突が見られる。63、66は中期末の大木10式である。

Fig.30－67、68は６Ｆ区から出土したもので、口縁部に無文帯を持ちここに縄文原体の圧痕文を施しており中期初頭のものと考えられる。

周辺の縄文時代の遺跡　金浜館の周辺には、縄文時代の遺跡が数ヶ所見られる。北には現在高浜小学校の校庭となっているTa－06遺跡がある。ここからはかつて縄文時代中期の遺物が多数表採されており、わずかに残っている畑地からも多くの資料が採集できる。またこの北にはTa－05遺跡があり、大木８式土器が表採されている。また館の西にはKa－03遺跡がありここでは縄文時代早期末の土器が見られる。

縄文時代の遺構分布

Fig.22

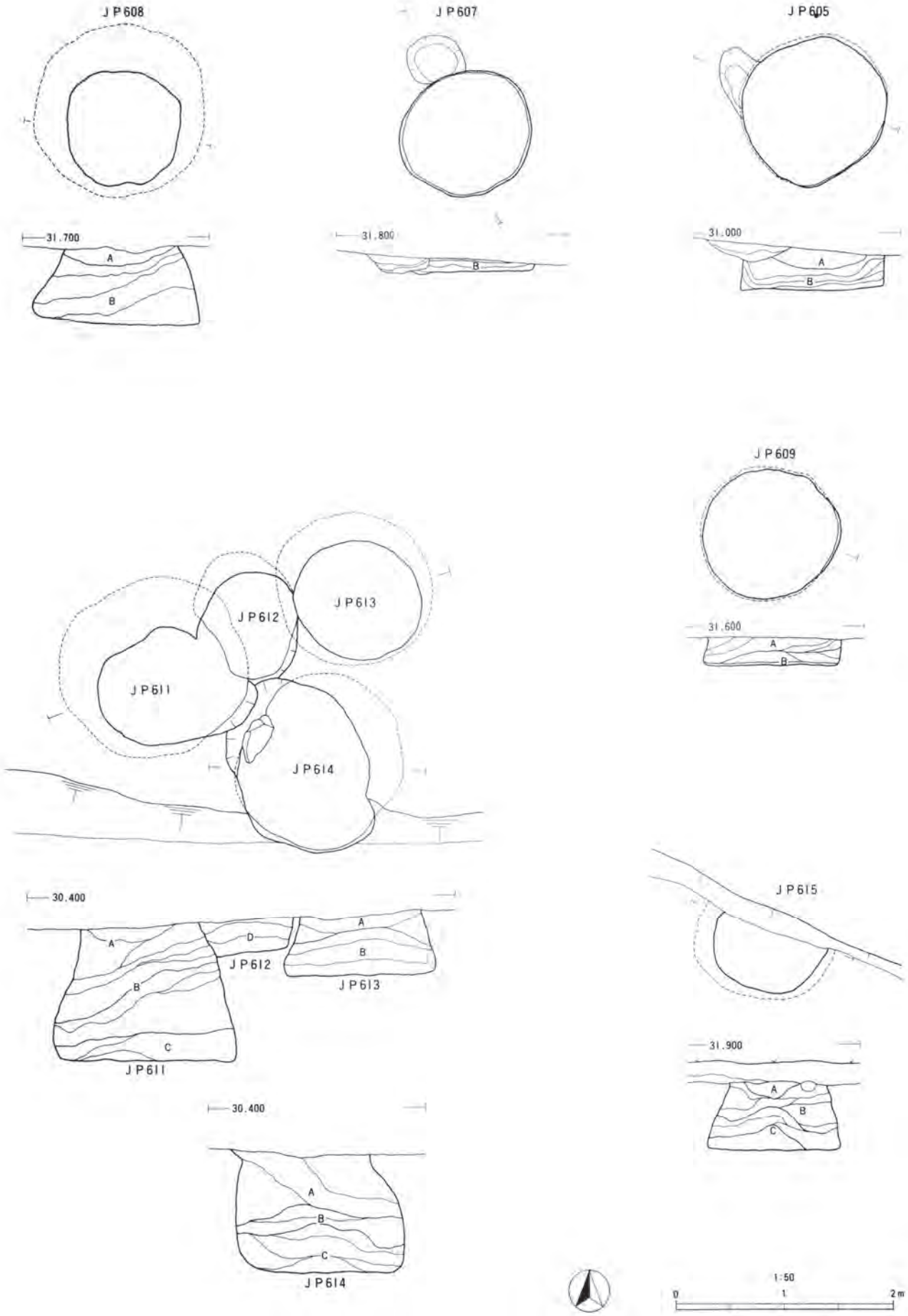
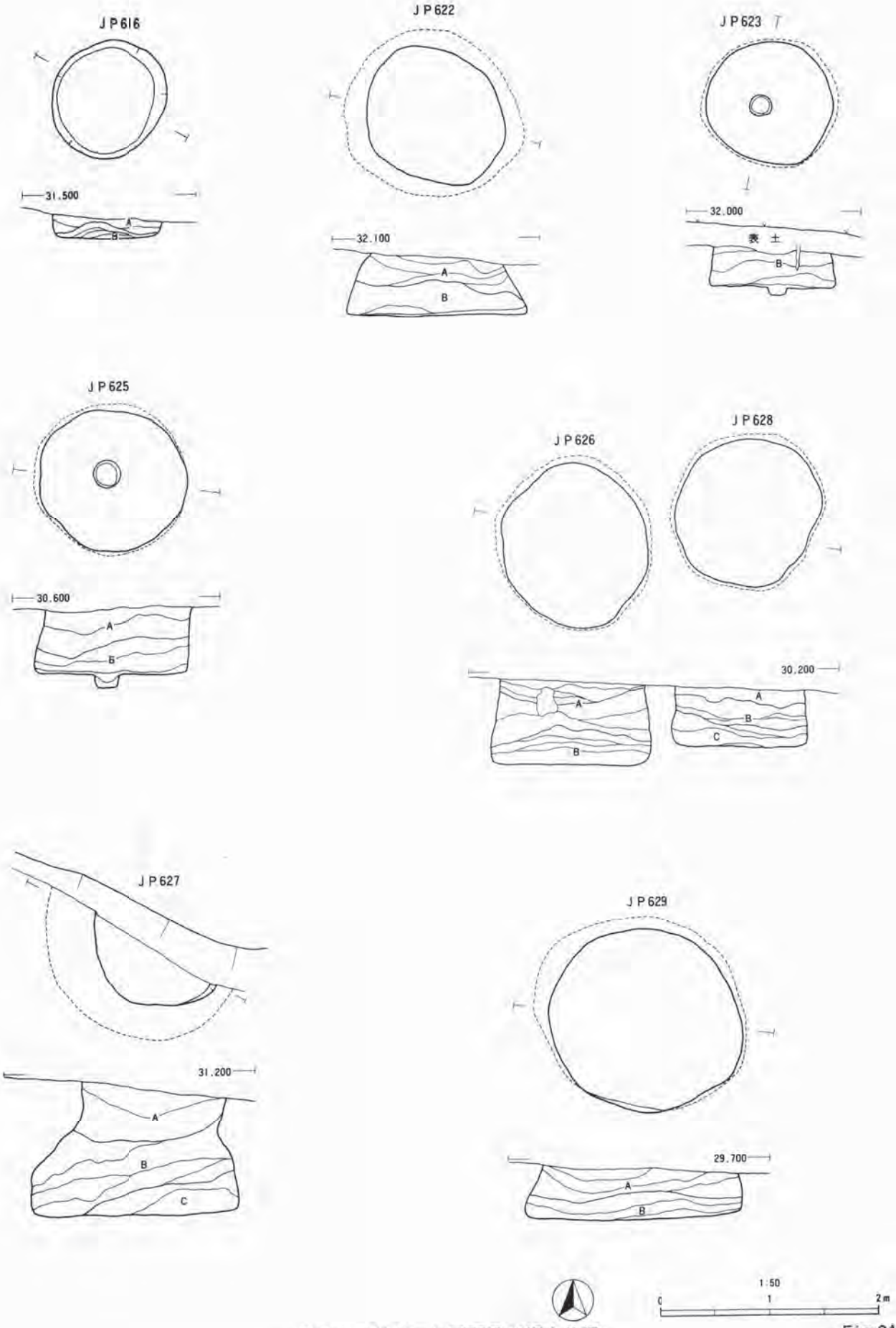


Fig.23　フラスコ状ピット平面及び埋土状況



フラスコ状ピット平面及び埋土状況

Fig.24

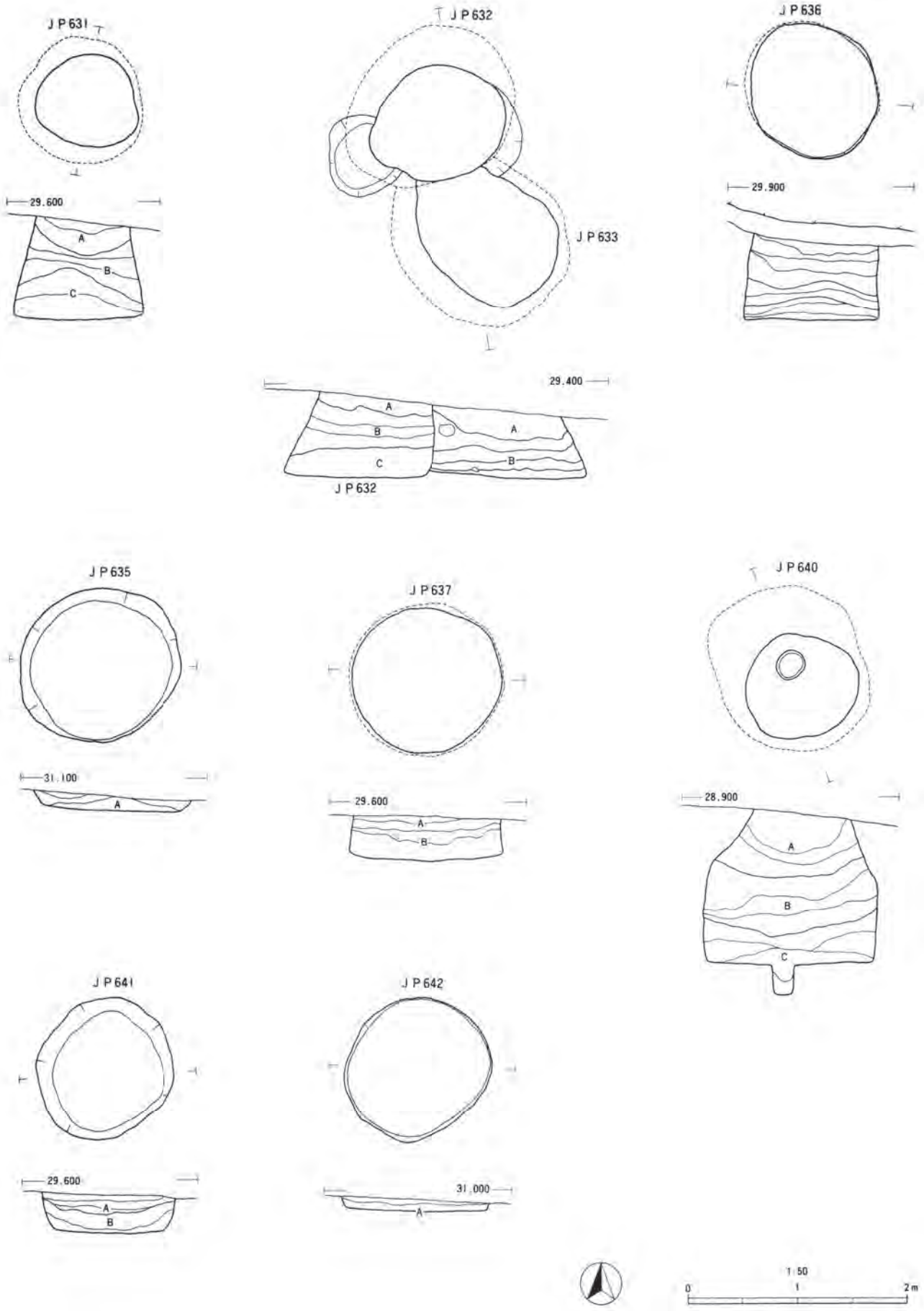
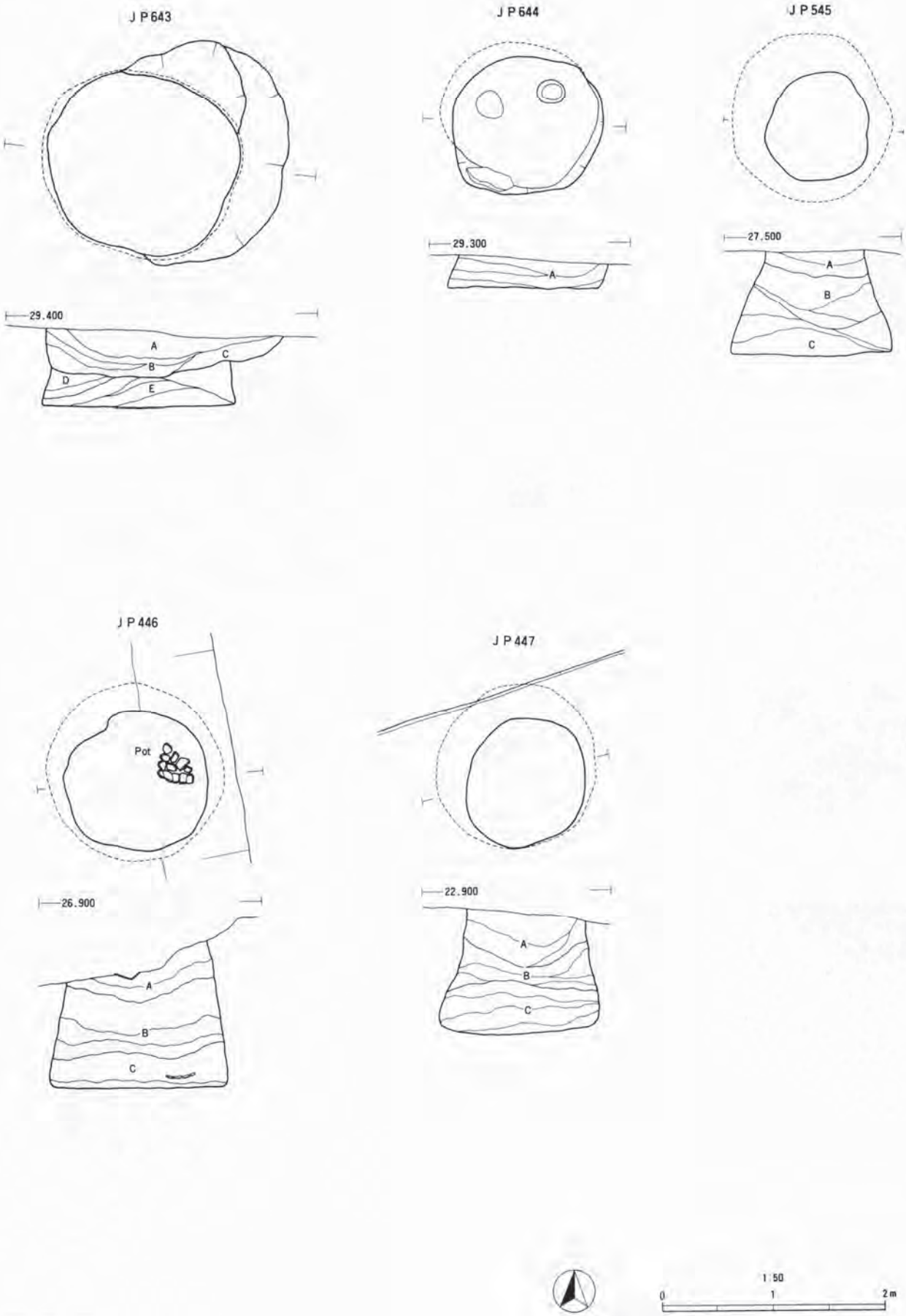


Fig.25　　フラスコ状ピット平面及び埋土状況



フラスコ状ピット平面及び埋土状況

Fig.26

Fig.27 フラスコ状ピット出土土器

Fig.28　　フラスコ状ピット、4F区出土土器

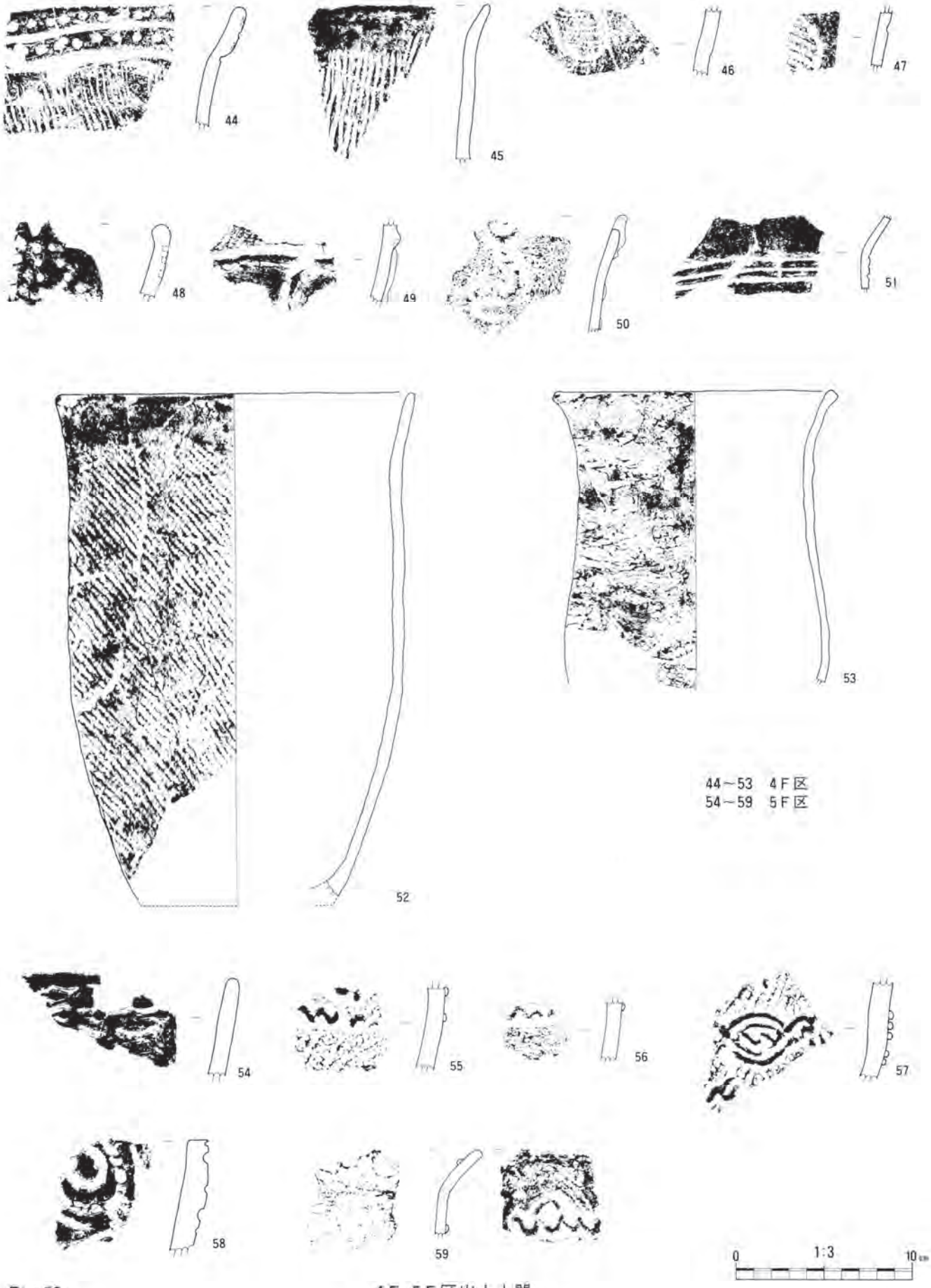
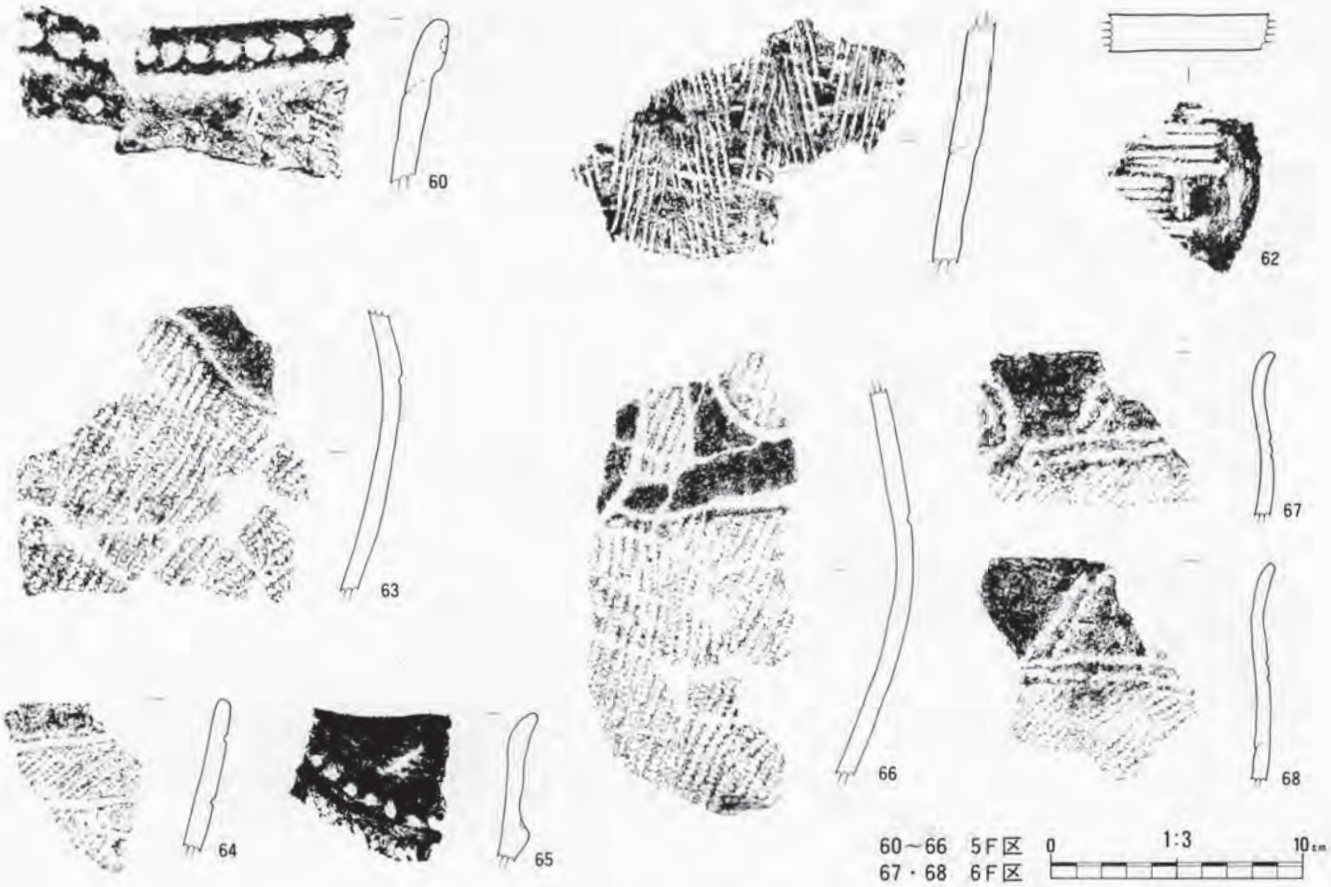


Fig.29　　4F、5F区出土土器



5F、6F出土土器　　Fig.30

フラスコ状ピット検出状況（6F区東半部南より）　　Photo.50

Photo.51　　フラスコ状ピット検出状況（南東より）

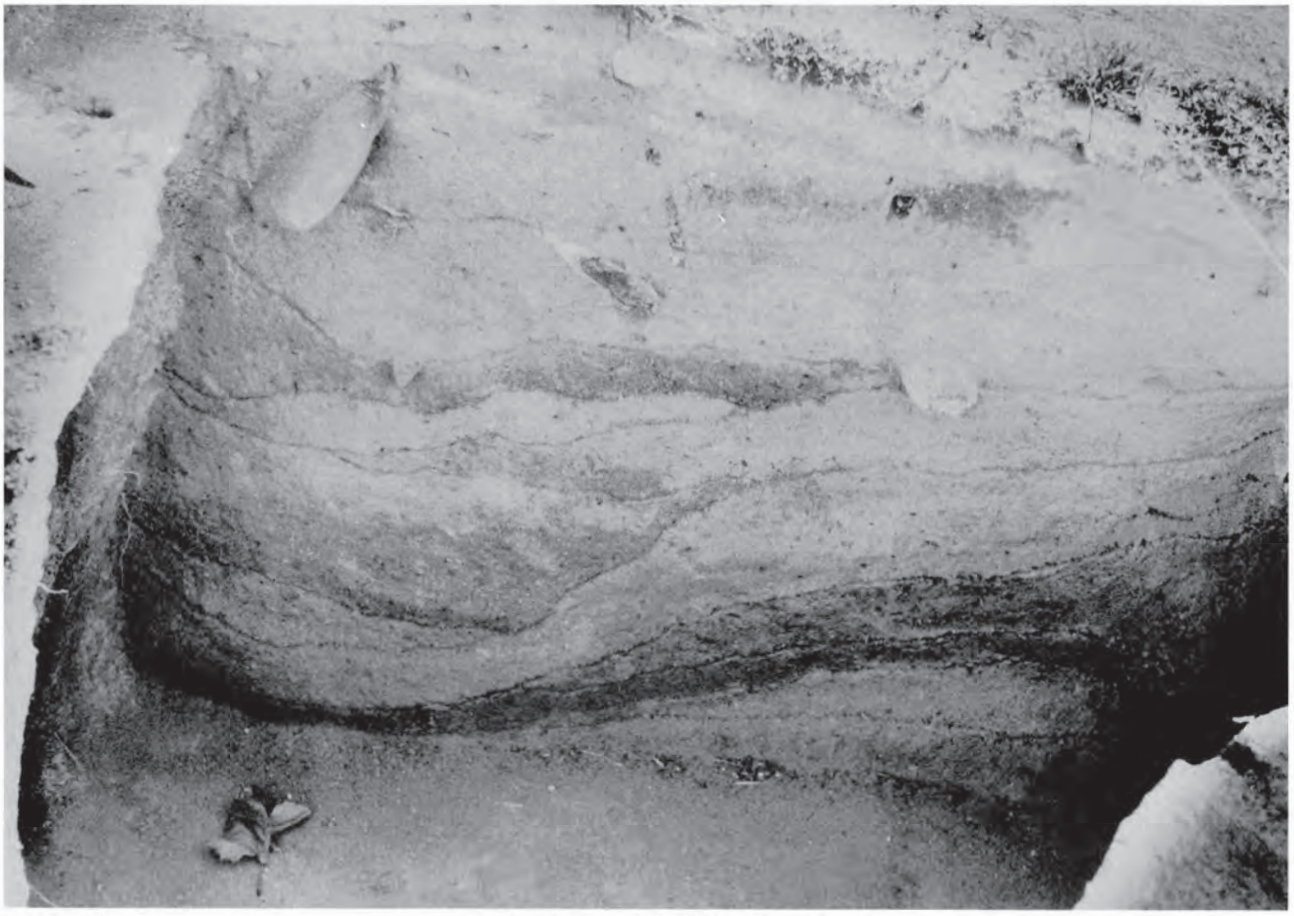
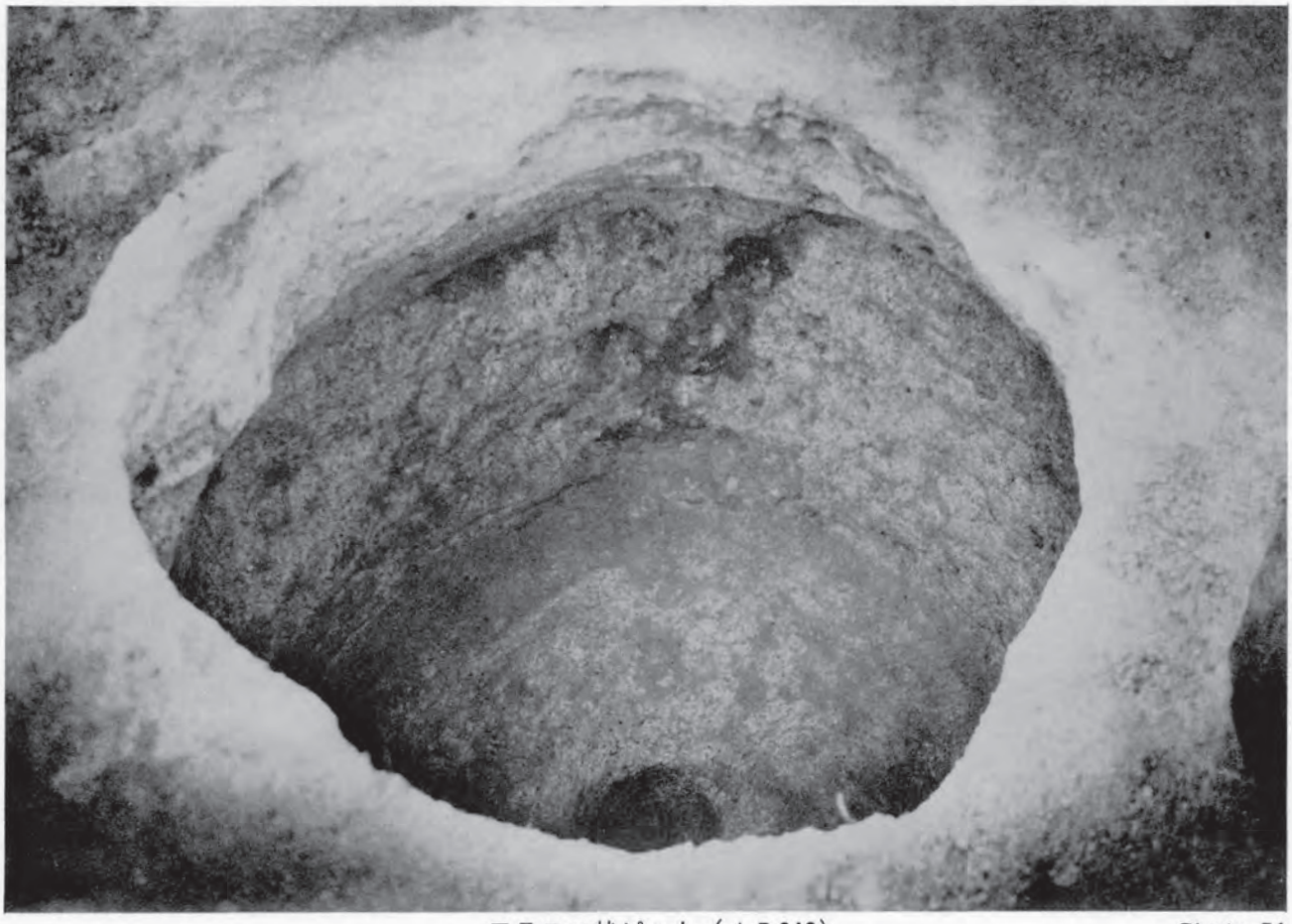


Photo.52　　フラスコ状ピット埋土状況（ＪＰ624）

フラスコ状ピット埋土状況（ＪＰ633）　Photo.53



フラスコ状ピット（ＪＰ640）　Photo.54

Photo.55　フラスコ状ピット（ＪＰ625）

Photo.56　金浜館の現状

V 金浜館について

1．文　献

（Ⅰ） 金浜村に関する記録

『邦内郷村志』　巻三　閉伊郡宮古縣　（南部叢書第五冊）　大巻秀詮著　18世紀後半刊　**文献 1**

『下閉伊郡志』　第八章　磯鶏村（関連記録として船越村）　1922年〃　**文献 2**

（Ⅱ） 金浜館に関する記録

『東奥古傳　閉伊之巻』　金浜館　藩政後期の宮古地方の史家である白根光久の撰著　**文献 3**

（Ⅲ） 金濱圓斉（金濱隠居）に関する記録

『吾妻むかし物語』　（南部叢書第九冊）　松井道圓著　17世紀末（元禄年間）刊　**文献 4**

第14　石川左衛門津軽退治附尾本金濱雨隠居の事

『祐清私記』　（南部叢書第三冊）　伊藤祐清著　18世紀前半の著作　**文献 5**

左衛門尉高信領内静謐並出馬平定之事　**5－1**

高信津軽出陣付金濱圓斉夢合西野・相川落城之事　**5－2**

高信公岩手郡切取事　**5－3**

津軽相川・西野か事　**5－4**

『南部根元記』　（南部叢書第二冊）　津軽騒動之事　**文献 6**

『奥南舊指録』　（　〃　）　二十三代安信公御代之事　**文献 7**

『聞老遺事』　（　〃　）　従大祖光行公至二十五代晴繼公御事蹟　安信公　**文献 8**

『南部藩御当家記録一』　「二十三代右馬亮安信公」　**文献 9**

（Ⅳ） 船越氏に関する記録

『参考諸家系圓』　**文献10**

『宝翰類聚』　**文献11**

文献４～９によれば、高信公（南部22代安信の弟）が津軽平定の際、船越修理・金濱圓斉という二名の評定人を従えており、高信公の夢見物忌をこの両人が諭して軍を進め、津軽を打ち取ったとある。これらの文献の中で最も古く著わされたと考えられる『吾妻むかし物語』ではこの両者について「船越修理亮剃髪して宗喜と號し尾本に退穏しければ隠居と號す亦金濱圓斉も隠居しければ金濱隠居と號す」とあり、また『祐清私記』では「閉伊郡侍舟越修理・金濱圓斉とて両人の隠居有」（点筆者付）とある。この他に『奥南旧指録』には「小本入道・金濱入道」と記されている。　**金濱圓斉**

ここにある高信公津軽平定というのは、津軽郡代津村某が当時貧民に人望のあった相川掃部・西野内匠を殺害しようとしたところ、これを漏れ聞いた両人が大に怒り郡代を討ち戦乱となったことに対して、高信公が平定のため出陣したという出来事であるが、この年代について文献４では「永禄年中の事かとよ」（1558～1569）とあるが、文献5－2では「元亀三壬申八月半の事なるに」（1572）と明確な年月が示されている。また『南部史要』にも「元亀三壬申八月高信を将とし云々」とあり、元亀三年という年代が結び付くのではなかろうか。　**高信津軽平定**

これらをまとめてみると、元亀三年に高信公が津軽を平定した際、閉伊の侍船越修理・金濱圓斉の２名が評定人として仕えていたという内容になる。

ここでは金濱圓斉という人物をとり上げてみたわけであるが、この人物が金浜館と直接結び付くのか否かについてはここでは断定を避けたい。金浜の地名は宮古市の他に、船越村金浜という字名で見られ、閉伊郡以外にも気仙郡金浜、八戸市金浜がある。『祐清私記』の「閉伊郡侍」に限定すれば宮古市大字金浜あるいは旧船越村字金浜に関係する人物であると考えられるが、この何れとも断定し難く、さらに金浜館との関係となると以上の記録からは詳らかではない。

東奥古傳

藩政後期に著わされた『東奥古傳　閉伊之巻』には、船越村に在城した小笠原系船越氏が後に分かれて金濱に移り住み、金濱修理之助と名乗り落髪し金濱入道円斉と号したとあり、高信公津軽平定の際に功労があったことを『奥南旧指録』から引用している。

甲州小笠原氏が閉伊郡船越村に来住し、船越氏と称したことは『参考諸家系図』の他『祐清私記』・『内史略』にも記されていることであるが、船越氏が元亀あるいは永禄年間以前に金浜に移り住んだという確証は見い出せない。ただ船越氏の系図の中に「船越修理之助」という名が見られるが、ここには「家督ノ後、小屋鳥村唐船御番人トナル、是ヨリ家内御番所ニ移リテ代々之ヲ勤ム」とあるのみである。

金浜地区には、旧家として船越姓が現存することは事実である。藩政後期の地誌『邦内郷村志』（文献１）には金浜村が船越氏の給地であると記されていることから、藩政期のある時期には船越氏が所領していたと考えられる。また船越氏系図の中には、助五郎の代に「信直公ノ時召出サレ、閉伊郡津軽石村ニ四百八十石、金濱村高浜村磯鶏村鍬ヶ崎村ニ三百石、大沢村ニ百八十石、合九百六十石ヲ賜フ、利直公慶長元年九月十五日付御黒印ヲ賜フ」とあり、これと同じ内容は『宝翰類聚』にも収録されている。（但し文禄五年が慶長元年に改元されたのは十一月二十七日のことで、慶長元年九月は疑わしい）

このように船越氏と金浜との結びつきが、『東奥古傳』の金浜館に関する記述が成される背景となっていたのではなかろうか。元亀あるいは永禄以前の金浜に関する記録も詳らかではなく、前出の文献に出る船越修理・金濱圓斉という二人の人名を混同している可能性もあり『東奥古傳』の金浜館に関する記述は疑問な点も多い。『下閉伊郡志』にもこれとほぼ同じ内容があり、ここから引用したものと思われるが、金浜に小笠原氏が移ったのが永禄年間であるとの引用の誤りがある。

以上金浜に関する文献をとり上げてみたわけであるが、ここではこれらの文献にある、人物あるいは年代を金浜館に直接結び付けることは避け、上記のような記録の紹介に止めてすくことにする。

文献7『奥南舊指錄』

二十三代安信公御代之事

右馬允安信公津輕三郡を切りしたがひ其頃津輕は葛西の一族領しける。或時安信公の命に依て御舍弟左衛門尉高信公津輕征伐の軍勢を催し既に御出馬なさるべき所に、前夜怪しき夢を御覽じ玉ひ軍に進み給はず、高信公の近臣に小本入道金濱入道と申兩人申けるは、如何なる御夢を御覽候や我々合せ申べし夢見物忌慎て嬰兒のならはし戰場にてはさる事ならず候。其時高信公仰せあられけるは、門の柱片方倒れ向歯は欠たりと見たり、是不吉の夢なれば出馬延引と仰ける。金濱入道横手を打て大きに喜び是は目出度御夢なり、武士の戰場に趣く時は何候左程の御心する、慎て夢に色々有、此御夢の告げ慎じて思召され給ふべからず、今日の御合戰は必定味方御利運にて津輕三郡をたやすく御手に入申べしと事もなげにぞ申上ける。高信公御不審に思召、扨なにと合せ候やと御尋有ければ、私合せ考候には門の柱片方倒れ前歯の欠てと御覽有しは、かた木倒れてむかへば落るにて候ゲ程の御歩は買ふても御覽有たき事なれば打立玉へと進め申せば、高信公喜ひ淺からずいざ打立と勇進んで津輕の城へ寄せらる、城主津輕殿は葛西の一族なるかや、其頃諸方亂世の砌なれば御家中の面々思ひ〳〵にて相隨ふ人もなし。されども敵寄ると聞て城下へ敵に足を越させては味方おくれたるに以たるなりと途中に待請戰んと軍勢を引具し途中に出て備らる。高信公仰けるは、津輕方は大方馬上すぐり此方は前立すぐりなれば懸立られては叶ひがたし、只精兵をすぐり射しくめて戰はんと、閉伊武者の弓の上手をすぐり、矢ぶすま作て左右に立渡り射しらませて、いづれも精兵の手利にてあだ矢は一つもなかりけり。一矢に二騎三騎宛射落し、或は馬を射させては射落させ互に人を懸に取ていろめき渡り備しどろに見へければ、其時高信公諸卒に下知して鬨地らに打て懸り玉へば、津輕勢一討にも不及一度にはつと崩れさん〳〵に退散す。高信公備を亂して追んとし玉ふ時小本隆居と金濱隆居諫て申上けるは、御本陣の御備へ堅くまとひ御下知被成候べし諸卒に御まかせ遊されよと進みまいらせける處に、大將を射落しければ津輕勢右往左往に散亂しけるゆゑ、津輕三郡を打隨ひ玉ひけゝ。其後左衛門尉安信公の命によつて石川の城に居住し（依て石川左衛門、高信公とも申也）晴政公の御代迄津輕三郡の御郡代として津輕を下知し玉ふ。高信公天正九年に卒し玉ふ。

傳曰、津輕は葛西一族の所領のみにあらず、足利將軍家より八戸氏の先祖ゐ津輕の内、目の前、冬井兩郷宛行はる、御教書有と云々。

文献8『聞老遺事』

廿三代
安信公　右馬助

令室不知

年號不知、津軽郡誌記ル、元龜三年トス非ナリ。八月津輕三郡又公ノ命ニ不從因、是公子高信君（輕部左衛門佐ヲ石川ト名乗ル）シテ津輕ヲ平定セシメ玉ス相川播部・西野内匠防戰ス、我先鉾ハ八戸薩摩守政榮苦戰ス。政榮ノ臣田中左馬助・馬場大炊介・松田雅樂・高橋雅樂戰死ス。是ヨリ先セ、相川播部ノ兄杉生大藏ナル者、一揆ヲ横濱ニ起シテ郡中騷動ス、公八戸政榮ニ命テ之ヲ討シム。杉生敗走シ五十餘兵ト舟ニ乘テ松前ニ奔ル。政榮勝利ヲ得テ今高信君ニ途ニ逢ヒ、兩下共ニ之ヲ討テ津輕三郡ヲ拔キ玉フ。船越修理（法名宗岩號見本理居）金澤圓齋爲謀士、終ニ高信君ヲシテ津輕石川ニ居シメ玉フ故、高信君ヲ石川殿ト申ス。

（靈風記）石川左衛門高信ヘ仰有テ、津輕征伐ノ軍勢ヲ催ケル　安信公ヨリ小本圓齋入道・金濱修理ヲ添テ出陣アルヘキ處、高信前夜怪キ夢ヲ見玉ヒ軍ニ進ミ玉ハス。小本・金濱申ケルハ如何ナル夢ヲ御覽候ヤ、夢見物忌ハ嬰兒ノ事ニ候、高信仰ケルハ門ノ片々ノ木倒レ向歯缺タリト、是不吉ノ夢ナレハ出馬ヲ延ン。金濱横手ヲ打チ是ハ目出度御夢カ、大門ノ片木倒ルヽハ敵ノ倒ル、也、向歯落ルハ向則落ニテ候御夢何ソ候ン。津輕三郡悉チ御手ニ入ヘシト、高信是ニテ道玉ヒ御土器數廻リ津輕ニ寄テル。（此時二人ノ輩、曰、明年民力疲弊未タ、遠隔、兵門計助右衛門、而信、之助、利、謀、怒之要、故、世、新の地、玉ス、）高信仰ケルハ敵ハ大方馬上此方ハ歩行立多ケレハ駈立ラレテハ叶マジ、精兵スクツテ射スクメヨト下知シ玉ヘハ小本・金濱畏リ閉伊武者ヲスクツテ百人計左右ニ立射サスレハ、一矢ニモ二騎三騎或ハ馬ニ當リハネ倒サヽ互ニ人ヲ懸ニ取リ備ヘシトコロニ見ヘケレハ、高信諸卒ニ下知シテ眞間ニ駈散シ玉ヘハ、一戰ニモ不及トツト崩レテ引退ク。猶モ備ヲ亂シ追掛ントシ玉フヲ、小本・金濱是ヲ押ヘテ備ヲ堅メ士卒ニ下知シテ、頓テ大將ヲ討取津輕ヲ乘取玉ス是ヲ津輕弓矢ト申也云〻。

永正五戊辰年四月五日歿シ玉ス、御年三十。金剛院殿ト申奉ル。

悅山恰公

文献5-2

高信津輕出陣付金濱圓齋夢合西野・相川落城之事

一新面相川播部助吉野内匠助兩人は、思ひの儘に郡代を打亡し、津輕三郡を手に入剰騰の余りに一揆を起し三戸を切取んと叛逆用意有りければ、此事三戸へ聞へける、彦三郎晴政公不安に被思召、伯父君にも軍將なりし職部左衛門尉高信（晴政公の御伯父右馬頭安信公之御次男なり）を被召御評議有しかは、高信被申けるは當春津村か没落之時直々出馬して蹈潰さんと思ひしに折しも兵粮の路如何に存捨置ぬ、其上兩雄は必爭習有、定て兩人中悪く成ん、然は其變を何て貶入らんと存る所に、剰一揆を起す事ならは其來や此方より逆寄にせんとて何もかはらぬ舟越修理、金濱圓齋（始梅林に金濱隱居と有金濱隱居とは舟越修理か祖父か本隱居とは舟越修理か祖父か歟）と云兩隱居もの驍たる老功之武士なれは軍の評議人として高信の左右に控、其外北南東毛馬内、大湯大光寺櫻庭、野澤、石亀等を始、頃は元亀三壬申八月半の事なるに已上其勢二百五十余騎にて各々今度を晴と立出秋風に旗を靡して津輕退治其爲に三戸を打立玉ふ、野邊地表に御陣有諸方の諸士を待玉ふ、爰に高信の評議人舟越修理物驍たる勇士なれは、五拾餘騎を二手にして櫻庭大光寺を大將と定め、野邊地浦より舟に乘海手より押寄る、斯て諸方の陣業相圖之日にも成しかは、二拾騎三拾騎打連〳〵野邊地之御陣へ相詰る既に其勢三百五拾騎に及しかは、兩右兵衛に五拾騎を指添て津輕境馬門之邊に殘置高信は三百餘騎を引卒す、既に津輕へ打入玉ふ、狩場澤をも打過て浅虫之邊に御陣を据、明くれは辰の一天には敵味方雌雄を爭決んと其用意取々也、然る所に高信如何被思召けん夜明て軍に進み不、玉舟越修理、金濱圓齋急き高信の御前へ出て最早相圖之刻も移行候、何迚軍に進不、玉、打解玉ふは如何成事候や、斯方之相圖を定諸勢氣乘て迚義得は必定味方之御利運たる所に相延玉ふのみなら寸、敵を目近に餝なから浮々として居玉ふ事、且は味方軍兵共勇氣も衰可申更に難心得、とて諫申せは、高信宣けるは我等も左様に思へとも昨夜奇怪之夢を見る、心に合ぬ夢なれは今日は軍を止明日取懸べしと宣は、金濱隱居申けるは武士の戰場に趣に何様左様之御賣可有、惣面軍に出るには再可躊とせす、必身を惜者は後を取もの也、昔より夢を見て物忌仕は鄭重子の言葉也、少も左様之御心得不可有、併御心の不晴は奉逆も如何也、上古の圖にも夢と慮とは合物と申せは某合せ進らせん如何成御夢やらん疾くと申上……

文献6『南部根元記』

津輕騒動之事

津輕三郡は往昔を傳聞に廿三代安信の御時代御手に屬したる所也安信公の御舎弟左衛門尉高信殿津輕に打入明る日合戦と相定むる前の夜高信奇怪の夢を見給ひけり夜明て軍に進み給はず・其頃尾本隱居、金濱隱居とて老功の武士高信の左右に有て萬軍の評定せられけるが彼兩人高信の御前に參り何とて今日の合戦には進み給はず、かほど遠方々相圖をきわめ必定御利運たるべきに相延さるゝ候更に心得かたく侍ると諫めければ、高信公仰られけるは昨夜心に合ぬ夢の告げ有これに依て先今日の合戦は相延べしと思ふ也との玉ふ・金濱隱居申けるは武士は戰場に趣んに何様左様の御心にや候べき態て夢見物忌など申は女童の習はじにて御座候ゆめ〳〵御心に懸け給ふべからず去にても如何なる御夢やらん下劣の諸に夢と慮とは合せからと申せば某合せ申すべし御語り候得と申上ければさればこそ夕部の夢に門の片方の柱倒れ又我等が向歯かけて見たれば旁々によろしからぬ夢也と思ふこれに依て今日の合戦相延べきとは申なり・金濱隱居横手を丁と打扱々目出度御夢かなかほどの能き御夢の告を悪敷心得たまふものかな合戦必定味方御利運津輕三郡は則御手に入べしと事もなげにぞ申ける・高信公不審に思ひ玉ひ何と夢を合せ候と尋ね給へば、門の柱かた〳〵（○天明本片柱、宝保・宮崎本片方）倒候と御覽あるはかたき倒るゝにて候前歯○天明本向歯かけて御覽有しはむかば落るにて候はずやかほど目出度御夢は買ても御覽ありたき事なれば急き打立給へと寸〻め申せば高信公御悦喜淺からずいざ打立たんと勇み進んで津輕の城へ押寄せらる・津輕殿は萬西の一族なりとかや、其頃諸方亂世の則なれば家中の面々思々心々にて相隨ふ人もなしされども敵寄ると聞て城下へ敵の足をこさせては味方おくれたるに似たり、中途に待請け戰んと軍勢を引具し陣を立て待懸たり・……

文献4「吾妻むかし物語」

第十四　石川左衛門津軽退治幷尾本金濱兩隠居の事

一、むかし石川左衛門佐と申せしは南部右馬頭安信の御舎弟にて政廣公の二男なり、智勇兼たる生質にて晴政の御時志和御取合の節は御名代としてよしが瀬風が鼻にて御合戰有し時も勝利を得玉ふ。又其頃給越修理亮剃髪して宗喜と號し尾本に退隠しければ隠居と號す、亦金濱圓齋も隠居しければ金濱隠居と號す、此兩人は老功の勇士にて左衛門佐高信の左右に有て高門軍策の評議せしかば龍に羽翼のあるが如し。愛に永禄年中の事かとよ、津軽舊士に相川播部西野内匠といへるもの南部の御下知を背き自立を企つ、其外諸士にも是に同意のもの多し是によつて討手の大將を高信へ仰付られ、亦高信の介添に右の兩隠居をも相添られ大勢にて鹿向はる。高信すでに津軽の境へうち入て明日合戰と相定らるゝ前の夜、高信奇怪の夢を見玉ひしかば夜明て殿に進玉はず、諸勢いかなる子細にやとうたがひ思はずといふ事なし。時に兩隠居高信の御前に出られ何とて今日の合戰にすゝませ玉はぬらんか程まで方々の相關を定め必定御利運たるべき處を相延らるゝ事さらに心得ず、其上味方の諸勢疑心を抱く時は勇氣さめてかさねての殿ひおゝくは理なきものなり、願くは御合戰をはしめ玉へかしといひければ。高信仰けるは昨夜心にあはぬ夢の告あるによつて先今日の合戰をば延べしと思ふなりとの玉へば金濱申さるゝは武士の戰場におもむかんに何條夢見ものいみをもち玉ふべき夫は女わらべ杯の申事にて候武將たらん御身の上には努々有まじき事と申。尾本隠居申さるゝはさるにてもいかなる御夢やらん下劣の蕩ながら夢と雖とはあわせながらと申せば、某あはせて見候べし御語り候へと申ければ、高信さらば語り聞すべし夕部の夢に吾門の片方の柱たをれまた向疊かけて見候へば、いかさまよろしかるまじき夢なるべしと思へば今日は何とやらん道まれずと仰らるゝ。隠居横手を丁と打て扨々目出度御夢の告是はいかさま御氏神八幡大菩薩の御示現にてぞ候らん今日の御合戰は必定味方の御利運津軽御手に入べき瑞相なりと事もなげに申さるれば高信不審におぼしめし扨なにとあはせ候やと仰ければ、いや〳〵かようのよき御夢は御盃のうへにならでは申さぬものにて候。……

文献5-1「祐清私記」

左衛門尉高信領内靜謐並出馬平定之事

一、斯て南部左衛門尉高信は御命兄右馬之亮安信の遺命に任せ、晴政公（安信公の四子にて嫡家二十四代なり）を守立既に領内靜謐に治られ、諸人の靡服日を追て長す、就中八戸薩摩守義康（九戸修理亮政實後に左近將監と云なり）等家中隨一之大身にて、何も居城を堅固にしかつて自立の志をさしむ、然とも高信智謀策備の大將にて晴政公の補任せられければ、却而安信公の御代より領内一統にぞ見得し、然而より高信は田子の館に居城せられけるか、其頃軍評定人閉伊郡侍所越修理金濱圓齋とて兩人の隠居有、武功之老武者なれは高信愚に被召仕、或時右兩人を側近く招請足の如く座せしめ、酌の儲の終夜談語けるは、我安信の孤を托り領内の危を踏直し、今既に異議に及者なく一統に治ぬ、然は此上は隣境に出を向て一當變を付て見ん、先隣境と云は津軽鹿角岩手に候、是皆一度當家の領内なれとも興廢の變に隨或は服し或は叛く、今我何を先に取らんと宣ふ時に、金濱圓齋申上るは、津軽は豊饒の國、其上御當家に數代相叛今新に干戈を收結給ふ事大事に候、其變を見てゆるやかに御攻取可、然候、鹿角は我々持の領念勢に候得共、是豊饒之地として其城は堅固に兵多武邊手調候得は只一方より攻入候事は難難分離けんか、岩手は我々持の地侍領地にして居城も不堅固に候得は、先岩手に御手入被遊手初よくは其勢に乘て隣々をも御責可、然候事、初之切は味方は逸し雖國は開闢可、仕候間、先安き方を御取可、然と申せば非越修理も尤可、然事にこそ、其上干戈を以て敵を討は常の事、智謀を以敵をひしくこと良策とすへし、幸不來方御出伊勢を語ひ、次に一方井刑部左衛門に爾々の事申ければ、高信公容悅有て兩人の軍謀張良も及まし、諸方打捨先岩手郡責取へし、尤往々津軽鹿角も取へけれとも、只今其事を沙汰しては却而敵に備させん、先々密謀不可、論とて岩手の平入の評定より外他事をかりけり。

文献1『邦内郷村志』

金濱村　　高四十三石二斗余　舟越瓢司給地　　馬十一疋

民戸三十七軒。

文献2『下閉伊郡志』「磯鶏村」

（ロ）地名の起因及沿革

磯鶏なる地名は、古昔よりの稱呼にして、今に至るまで變改なきが如し。其の起因を傳說に徵するに、昔時、高貴の方（南部財城志には豊臣秀吉の臣子とし、流謫の身と爲り、久しく此の地に、配所の月を眺め給ふと雖も更に恩赦の命なく、幽憤の極、遂に搭架根島より、海中に投じて斃じ給ふ。里民痛惜措かず、百方捜索するも得ず、相議して一雙の家雞を小舟に載せ、再び捜索せしに、雞鳴數聲果して其處に於て、遺骸を發見することを得たり。山口村黒森神社參照）因つて、此の地を磯鶏と名つくるに至れりと、八木澤は、元、彌義澤と書せり。文龜（紀元二二六一年間、千徳城主、一戸政明の弟、一戸左馬之助重遠の領たり。而して重遠、八木澤を以て氏とす。八木澤の文字を用ひしは、蓋し、當時よりならんか、前館、後館と稱する二つの館あり、重遠の築く所なりと傳ふ。墓碑五輪塔等今に存せり。二代興四郎に至り、慶長（紀元二二五六年間、三戸に移る。金濱は、永祿（紀元二二一八年間、甲州の浪士、小笠原氏の擁りし地なり。小笠原氏、地名を採りて氏とし、金濱修理之助と云ふ。館は東南の麓、白浪常に其の岸を洗ふ、當時の下町に在り。今は今宿と云ふ地名の存するのみ。（船越村參照）本村は初め、閉伊氏の領地にして、後、八木澤氏の治下と爲り、元和（紀元二二七五年間以來、磯鶏、八木澤、小山田は、南部藩士櫻庭氏の所領と爲り、金濱、高濱は、船越氏の領地と爲れるも、高濱は間もなく檜山氏の所領と爲れり。元祿（紀元二三四八年間に至り、磯鶏は船越、檜山、野田、刈屋、四氏の分領、八木澤は刈屋花輪、野田の三氏、小山田は、野田氏の各領地と爲り、金濱のみは御藏地と爲り、以て明治維新に至る。

参考　　同　　「船越村」

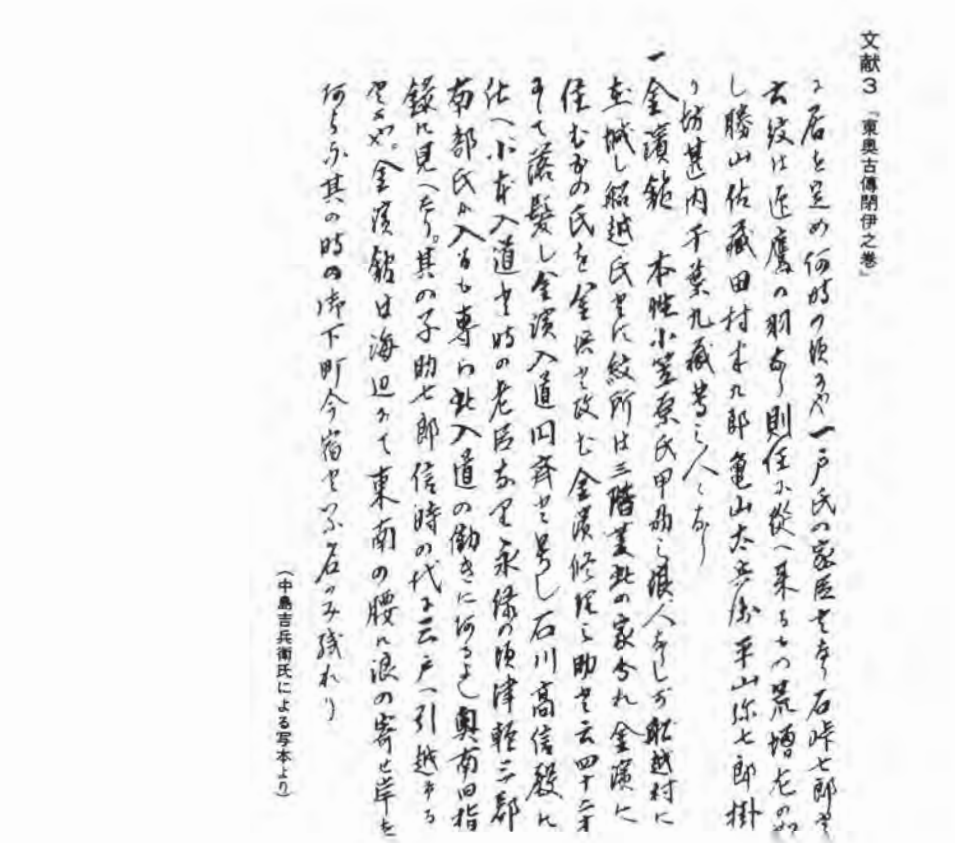
（イ）境界、面積、戸口、區劃、

本村は半島を爲して、山田灣と船越灣との間に突出し、西方の一部織笠村に界す。面積二、五二四方里戸數四三二、人口男一、三二九、女一、二〇六あり。船越大浦、田ノ濱の三大字に分たる。

（ロ）地名の起因及沿革

本村は、往古は一の島嶼を爲し、舟楫の便に依りて、他と往來せるを以て、船越と稱するに至れりと、大浦、田ノ濱に至りては、其の名の由來を詳にせず。本村の開創時代詳ならざるも、清和源氏の末流、小笠原修理之助なる者、永祿（紀元二二一八年間、甲州より來り、今の館山と稱する、船越灣に臨める丘上に壘壁を構へ、土民を綏撫し、威を四近に振ひしに、南部氏の攻むる所と爲り、其の臣下に列したり。後此の家分れて磯鶏村金濱館に在住し金濱修理之助と稱し圓齊と號す。（磯鶏村參照）永祿（紀元二二一八年間、南部氏の葛西氏を津軽に攻むるや、圓齊も亦、軍に從ひ其の功多かりしこと舊記に見ゆ。南部藩の時代に到りては、大槌代官所の支配に屬し、其の統治を受けたれども、給所と稱して、漆戸、伊藤、毛馬内三氏の領地若干あり。以て明治

文献3『東奥古傳閉伊之巻』



（中島吉兵衛氏による写本より）

宮古市埋蔵文化財調査報告書７

金浜館発掘調査報告書

Archaeological Research
in Kanehama Tate Site

1985.3

発　行　　岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町２番１号

印　刷　　有限会社 プリントハナサカ
岩手県宮古市田の神１丁目２の32